

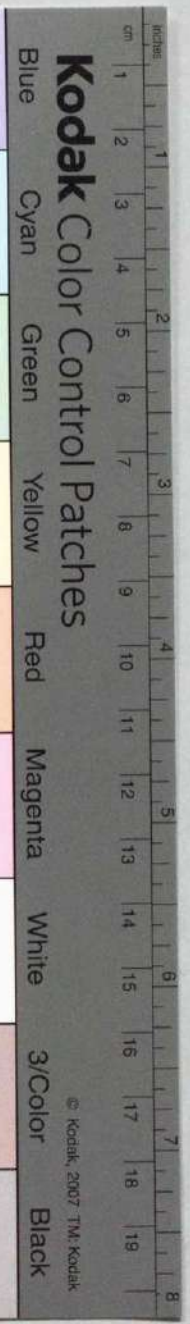
金の星

Z32-B88

十一月



第七卷
第十號



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak

世界少年少女名著大系 (19) 金の星社編・装幀 寺内萬治郎畫伯

アンデルセン童話

世界第一の童話作家として、誰でも知つてゐるアンデルセンの童話の中から、最も面白い、いゝ作を集めました。童話を研究される方々のために、最もよい指導書であることは勿論ですが、少年少女の方々がお読みになつても、こんな上品な面白い童話は、先づ世界を通じてありますまい。成る程、これでこそ、本當の立派な童話だぞ、お思ひになります。ごなたの書棚にも、是非一冊はなくてはならない本です。

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

東京 本郷 町 坂 金 星 社
振替 東京 五九五 九六八 番

あしるお伽新 カシフとコルマ

昇曙夢譯

最新刊

兒童諸君の
好讀物

あゝ讀んでよかつた!!

これは本書をお讀みになつて思はず
設せられる第一の言葉であります

本書はロシアの有名なお伽所の大家アファナーシエフ氏の「ろしあ國民お伽全集」の中から兒童に取つて最も興味のあつた代表的なお伽十七種を選んで最も平易に譯したものであります。殊に本書は十歳前後の兒童にも適するやう大きい活字を用ひ各頁にロシアの有名な畫家の手になつたカッツ十七種を入れ美しい口繪寫眞を多くして藝術味を豊かにしてあります。今や日露の國交も恢復して凡ての人が新にロシアに興味を持つ時代となりました。この機會に於て第二の國民たる少年少女諸君も彼地のお伽所を愛讀することによつて愛すべきロシアの兒童と握手しつゝ彼等の性情と趣味とを理解することに努めなければなりません。この意味におきましても中秋第一の讀物として少年少女諸君に本書をお薦め致す次第であります。

目次

- 一、マルゴシマシカ
- 二、馬鹿息子
- 三、百性の王女
- 四、びつくりだめし
- 五、熊の王子
- 六、一寸法師
- 七、二つの運命
- 八、かくれんぼ
- 九、狐と狼
- 十、怪獸退治
- 十一、百性の謎
- 十二、羊飼の娘
- 十三、雪の小父さん
- 十四、意地悪女房
- 十五、黄金の手籠
- 十六、不思議なお土産
- 十七、ダニ・コロミ白鳥姫

秋の讀物

昇曙夢譯

- ◆ ろしあお伽集
- ◆ ろしあ傳説集
- ◆ ろしあ童話集

四六判三六六頁
定價壹圓八拾錢
書留送料拾八錢

ろしあお伽は雪深い北國の人々の冬の夜長に懷遠を誘ふ年々幾千年も不變の物語であります。本書は有名な露國の代表的傳説を平易に譯したもので兒童の讀物としても露國文學の研究資料としても興味あるものであります。



出版圖書録呈
大倉書店
東京日本橋南堀町 振替東京 二八三 番

日本童謡作曲界を代表するものとして大好評を受けてゐます。童謡音楽愛好者は是非お供へ下さい。

一輯二輯	各定價金六拾錢
三輯以下	各定價金八拾錢
送料	各金六錢

人 買

(目 曲)
人買船、青い目の人形、九
官鳥、日傘、歸る燕、十五
夜お月さん

一本居長世作曲・野口雨情作謠
一つお星さん

(目 曲)
一つお星さん、七つの子、
鼯と雀、鶏さん、象の鼻、
四丁目の犬

青
い

(目 曲)
青い空、燕、雨夜の傘、で
んく、蟲、雀の酒盛り、呼
子鳥

赤
い
靴

(目 曲)
赤い靴、山彦、三月月さん、
姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜
の子

夢
と
り

(目 曲)
夢とり、おしやれ椿、つば
子、十と七つ、雲雀の水汲、
雀の機織り

子守唄

(目 曲)
道 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さん、霜柱、葱坊主、蕨の下

お人形さんの夢

(目 曲)
お人形さんの夢、釣鐘草、
啼いた啼いた雉子、芒の穂、
お馬のお耳、草遊び、霜柱

小松耕輔作曲・達崎 龍作謠
へんへん 鳥

(目 曲)
べんく鳥、螢のお使、仔
牛、赤い小馬車、紅殻蜻蛉、
さみだれ

あの町この町

(目 曲)
あの町この町、木の葉のお
舟、高野山、鼠のおぼさん、
狸ばやし、雀をどり

名所めぐり

(目 曲)
長柄の橋、柱くゞり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳飴、石山寺の秋の月

東下 京目 市四 外八 大 賣眉 捌 社 振五 替四 東九 京八

大 白 賣 眉 捌

振五 替四 東九 京番八

赤い猫

装幀・装書・岡本歸一壽伯、寺内萬治郎壽伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・定価金壹圓
日本で出来た最初の童話讀本であつて、又最
も立派な童話讀本として大評判の本です。各
篇とも面白いこと此の上なく、しかも深い教
訓を持つたものばかりなので、沖野先生の
大傑作集ともいはれてゐます。是非一度は讀
んで置かなければならない名著です。

沖野岩三郎先生の二大童話讀本

金の釣瓶

装幀・装書・寺内萬治郎壽伯、水島爾保布壽伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・定価金壹圓
『赤い猫』と同様大評判を受けてゐる童話讀本
です。沖野先生の童話讀本は、本書の發行に
よつていよいよ有名になつて、各學校の課外
讀本として最もよい本であるばかりでなく、
少年少女を持つた家庭には是非備へねばなら
ないといふ讃辭を受けました。

甲田正夫編・装幀挿畫 高坂元三

世界童話 叢書第五編 ドイツ童話集

四本 定價 送
六文 壹圓 拾
箱入 十圓 貳
入一 拾五圓 貳
美一 拾五圓 貳
本〇 拾五圓 貳

目次
仕立屋のちびさん
ながはな小入
太陽の馬
奇妙な裁縫士
魔法の裁縫士

ドイツは世界に名高い童話の大地、グリムや、ハウフの生れた國だけに立
派な童話が澤山あります。その中から、最も勝れて面白いものばかり七篇
を選びましたのは本書です。それだけの話も一冊の本になるだけの長編で
讀めば讀むほど興味の盡きないのは、必ず讀者の賞讃を得ることと思ひま
す。装幀の美と、定價の廉なのは、他に比類のない本書の特色です。

世界童話叢書 第六編	世界童話叢書 第四編	世界童話叢書 第三編	世界童話叢書 第二編	世界童話叢書 第一編
ペルシヤ童話集	フランス童話集	ろしあ童話集	印度童話集	支那童話集
(近刊)	(既刊)	(再版)	(再版)	(再版)
定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢	定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢	定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢	定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢	定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢

東京市外金蘭社 振替東京七番 電話七四七番 一〇七番 番

東京市外金蘭社 振替東京七番 電話七四七番 一〇七番 番



落葉の頃	寺内萬治郎
ボーイスカウト(口繪・三色版)	岡本歸一
落ちて来たのは何物(口繪・一色版)	寺内萬治郎
鴛鴦の晝寝	(一) 野口雨情
同作	(二) 本居長世
大豹あらはる	(六) 久米正雄
小鳥は空に	(六) 加藤武雄
臆病者の成功	(三) 松平道夫
琴彈き山	(三) 三宅房子
大島二等卒の話	(四) 久米絃一
秋の生蕃に追はれて	(四) 野口雨情選
四つの幽霊	(五) 小島政二郎
もどり馬	(五) 三井信衛
	(五) 鳥本夫二



お雪と重吉	(六) 織田小星
雨夜の宿直物語	(七) 西川喜平
雨の上つた朝	(七) 野口雨情選
風荒む満洲の夜に	(八) 齋藤佐次郎
恩を返す盗人	(九) 若山牧水選
曲馬を見ながら	(九) 田賀かずを
討たぬ敵	(一〇) 若山牧水
鳥屋のおちいさん(遠方)	(一〇) 三島霜川
ころびさうな人(自由篇)	(一〇) 齋藤佐次郎選
通	(一〇) 山本鼎選
講	(一〇) 鹽谷羊友
演	(一〇) 鹽谷羊友
讀者	(一〇) 鹽谷羊友
出版	(一〇) 鹽谷羊友
挿金ちゃん歸る	(二〇) 小山勝清
畫	寺内萬治郎・水島爾保布
	岡本歸一





ボーイスカウト

(金の星賞)

岡本歸一 畫

？ 者も何にはのた來ても落



(第六頁の「大豹あらはる」を御覽なさい)

書郎治萬内寺

千葉正視著

四六判二百五十頁

定価金一圓八十錢
送料金

國語讀本に 現はれたる 人物史考

小學校教師が讀方教授を最も満足に取扱ふに
良師友◎文庫◎圖書館等の備缺くべから
書中心主義を取り他教科書との連絡關係を明にし且つ主要人物の系圖を附し其他重要事項の附説を爲す等親切丁寧實に初等教育界に裨益すること多大國語教育の革新◎人物史の先驅◎として類例なし

中等學校入學準備書の權威
小學校五六年生徒が年中練習用の模範書

著一榮賀有
初等
基本算術書

本書の問題を眞に頭に入れて居つたならどんな六ヶ敷しい試験問題が出てもしも恐れるに足らない算術は只注意が肝心であります
四六判二百三十頁
紙質上等製本堅牢
内容充實
定價金七十錢
送料金四錢

發行所 振替東京市東區錦町一丁目三番九番 米本書店

文學士 相良徳三著 二四六判上製二 定價二圓四十錢
送料(書留)十二錢

日本美術史

(飛鳥時代より明治時代まで)

最新刊

日本人は、日本の藝術に關してあまり雜然とした知識をのみ有してゐます。著者はその明快な筆致を以て、世界に誇るべき過去數世紀の日本文化の精華を彷彿たらしめ、兒童の藝術心を呼び醒まさうとしてゐます。

日本の風俗史

祖先の生活

上里朝秀著

定價二、〇〇
送料、一二

ギリシヤの神話

中島孤島著

定價二、五〇
送料、一二

西洋美術史

埃及から現代まで

相良徳三著

定價二、〇〇
送料、一二

理學士

貴志敏雄著

二四六判上製二

定價一圓七十錢
送料(書留)十二錢

理科物語 地球の姿

最新刊

少年少女の爲めに豊かな材料と深き學識を以つて、人類の棲むこの地球を地質學上から、又生物學上から懇切に平易に説明せる絶好の良書です。めづらしき美しき挿畫は本書出版の爲めに帝大地理學教室から特に貸與されたものです。

科子供の學

謎の生物界

小鹽義郎著

定價一、六〇
送料、一二

科子供の學

汽車の話

小島政一郎著

定價一、五〇
送料、一二

科子供の學

天文の話

小鹽義郎著

(近刊)

世界少年少女名著大系 (18) 金の星社編・装幀 寺内萬治郎畫伯

ギリシヤ英雄物語

原作・英國文豪
キングスレー著

日本で初めて紹介されるギリシヤの英雄の物語りである。本書の發行は日本兒童文學の偉大な誇りである。

【本書の内容】 本書はギリシヤの英雄の物語りを傳説に從つて書かれてゐますから、その面白さは格別です。本書にはギリシヤの英雄達の中で、最も有名でもあり、又最も面白いお話を持つてゐる三人の勇士、ヂエリオン、ペルシウス、テシウスの一生が書かれてゐます。どの勇士のお話も實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話があるのに、知らずに済ますのは實に残念です。

【本篇の著者は如何なる人か】 原著者は英國の有名な文學者であるばかりでなく、世界第一流の作家として立派な作品を澤山に残してゐる人であり、この人は大層子供を可愛がつて、自分の子供が一人生れるごとに一對づつお話を書きました。この『ギリシヤ英雄物語』もその内の一篇であつて、しかも、最も有名な著者の一つであります。

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九番六

世界の少年少女著名大系

金の星社編 四六判箱入類本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第一編	第二編	第三編	第四編	第五編
ロビンソン漂流記	ナポレオン物語	ドン・キホーテ	コロンブス物語	大人國小人國めぐり ガリバー旅行記
船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。	ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポレオンが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。	イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、海馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。	アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戰つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。	ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽なやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさんざんな目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて来るまで實に面白い物語りです。

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

星の金社
編

星の金社編

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

星の金社編

ロビン
フッド
物語

アラビヤナイト

第 八 編
ギリシヤ神話
オデッセー物語

シエークスピア物語

第十編
グリム
童話

第十編
繪入
イソップ物語

第二十編
日本神話
古事記物語

第三十編
新約物語
子供キリスト傳

西遊記

第五十編
ロ
一
マ
英雄物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャールウッドの森にかくれ、王を救ふ戰を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

アラビヤン・ナイトの面白く物語りは、世界の童話文
學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間と雖
り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこ
の物語りが讀者に興味を與へてゐるかをわかりま
す。アラビヤン・ナイトの中へ、特に面白いのば
かりが集つてゐます。

ギリシヤの詩人ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

有名なシェイクスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物詣り風に書いたものです。『テンペスト』『御堂のまゝ』『ベニスの商人』が女・女驎し』『眞夏の夜の夢』『冬の花ばなし』等、是非一度は読んで置かばいゝ物語りです。

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説各地にグリム兄弟の作つたもの各篇ともグリムの童話は今ではドイツ國民童話であるが、少くもその珍美として尊ばれてゐるものは國のものではなく、年少女性の故事として集めてある有名なものも数多い。本書は研究家の手記から採られたもので、一日一冊を讀むにつけては、その性質を考へて讀むべきであらう。

イツツブ細語は古くから知られてゐた體だけに、これまでに隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話を兼と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始めて神々の誕生、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話もある。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが国に紹介された最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

支那が印度へ、はる／＼お經を取りにつた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には憍童、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々な寶物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けな／＼世界的の名作。この本を讀まない者は不幸である。

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、すから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロミュラスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつづぬ面白い物語りです。

金星の社 世界少年少女著名大系

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第
こども
約 聖書物語

編七十第
奴隸トム物語

編八十第
ギリシヤ英雄物語

編九十第
アンデルセン童話

編十二第
小公子

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返して讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことがかつて面白味深いでせう。

白人種のために大猫同様にあつかはれてゐた奴隸の涙の物語りです。偉人リンコルンが現れるまで、米國のあはれた奴隸たちの生活を書いたもので、米國最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。偉大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに養はれることとせう。

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングスレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど、尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

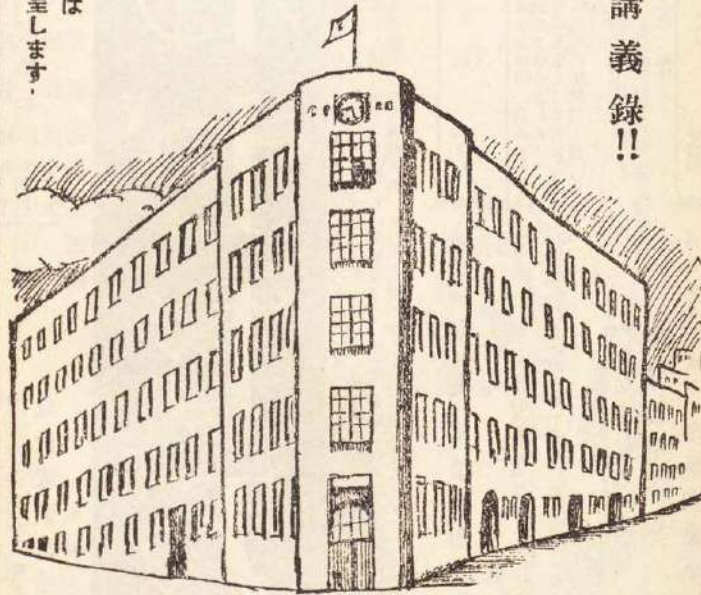
幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてゐました。少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇情愛と涙と歡樂に満ちた傑作です。

世界一の 中學講義錄!!

創始は第一番 大日本國民中學會
いし新番一は客内く古番一は立創
い早び業卒クスマか貴會

會員大募集

講義錄見本つき規則書は
申込み次第無代で進呈します。



東京神田駿河臺
大日本國民中學會

電話五七七一〇番 振替東京二〇〇番

葛原 函先生著

小松耕輔先生作曲
弘田龍太郎先生作曲
武井長世先生作曲
武井長世先生作曲
武井長世先生作曲

四六判特別函入類美本
定價貳圓貳拾錢
送料八錢

最新刊

わねわね

童謡界の先驅者として、コドモの活きた師表であり、最もよき遊び友達である氏の童謡集で、おさわる歳九十九歳、一昨年夏より今春までの作中氏が最も會心、愛唱おける能はざるもの、いづれもコドモをなして共に誦ばしめ踊らせすにおかない誦ばかりである。世に類びず、コドモにおもれらす、もつとも正しく清く美しく可憐なこの童謡集こそ、學校で家庭で何の不安も躊躇もなく、コドモに與へ、オトナに満足の微笑を齎すべきである。聖なるかな鐘の聲、そはおん身の胸にしみて珠玉とならむ。

葛原 函先生著

童謡の作り方

四六判綴布製 定價壹圓六拾錢
二百六十頁 送料八錢

兒童に童謡を作らすことは兒童をして内心の叫びを端的に發表せしむることである。自らなる心の動き、兒童にとつてそれは直に童謡になる。しかし心を動かさせるにも又自ら動かさせる方がある。童謡に著者は多年の経験と理想によつて童謡指導者としての天分を遺憾なく發揮したものが本書である、本書出で、名ある童謡作家となり、兒童に童謡を産ませしめるやうになつた學校は十指にあまる。

葛原 函先生著

小松耕輔
弘田龍太郎
武井長世
本居長世
三先生作曲

『かねがなる』の
姉妹篇童謡集

四六判特製函入 定價壹圓參拾錢
送料八錢

こ
ん
こ
ろ
踊

(通巻第七拾貳號)

金の星

十一月號



振替東京三六二一七番
電話大手四八二番

培風館

東京市神田區
錦町一丁目六

鷹たかの 晝ひる 寝ね

作曲 本居長世
作 詞 野口雨情



三



二



ビーヒヨロロ

枯れ木でお晝寢

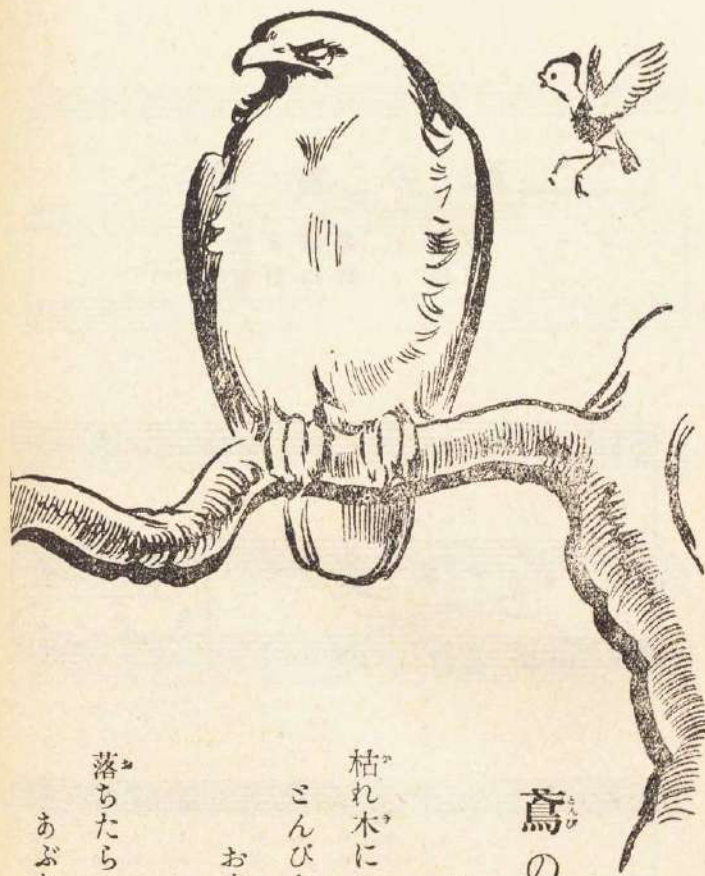
こんびが

夢みた

飛ばぬこ

あぶない

ビーヒヨロロ



鳶のお晝寢

野口雨情

枯れ木にこまつて

こんびが

お晝寢

落ちたら

あぶない



大豹あらはる

久米正雄

六

一、犬をさらはる

冬になると、皆さん毛皮の外套を着るでせう。大村君と森君とは、その毛皮の材料になる獸を撃つたり、罾にかけて捕つたりするのを商賣にしておりました。

尤もこの二人は、主に虎とか熊とかを捕るのが目的ですから、内地でなしに、秋になるのを待つて、朝鮮の山奥へ這入つて行くのです。いつも仲よく二人連れでした。

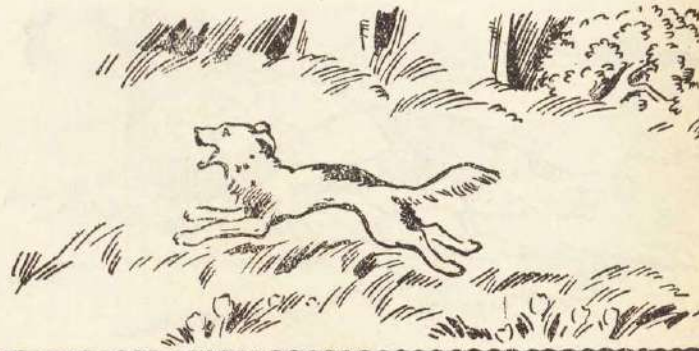
まづ食糧やいろ／＼入用の品々を馬の背に積んで、勿論二人とも洋服にゲートル掛けです。獵銃を斜に、銃口が左の耳の上のあたりへ出る位に背負つて、彈玉帯を腰へ巻き、ジャックナイフを首から垂らして、胸陰しへ入れ、ジョリーと云ふ名の大きな犬を従へて、トコ／＼山を昇つて行きます。かうして森の中へ這入ると、恰好な樹を切り倒して、早速

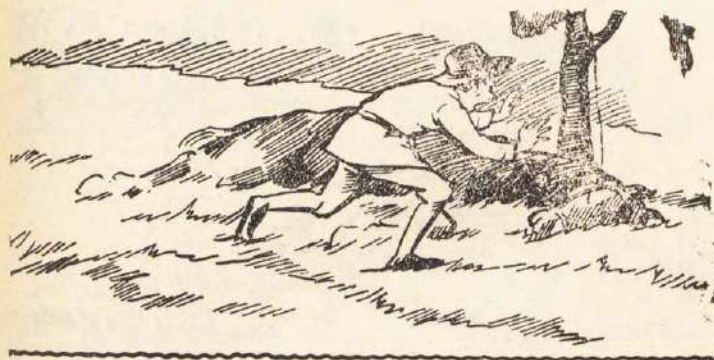
小屋掛けをして、ちよいとした住みを作り上げます。ここで寝起きをして、方々へ罾を掛けては朝早く見廻りに行つて、獲物があれば早速皮を剥いでしまふ。それから犬を連れて一日中狩りをして廻る、——かうして冬の初め雪の降る前に又急いで下山して、獲物を毛皮屋へ卸す。と云ふのがこの二人の生活でした。

ところが、或暗い晩、二人はジョリーが凄じく吠える聲にふと目を醒まして聞耳を立てると、ジョリーの聲の合間合間に、太くつて深みのある唸聲が混つてゐるのが聞えました。裏の方では、立木に繋いである馬が、何かに恐れて綱を振り切つて逃げ出したいかの如く、大地を頻に蹴つてゐました。やがてジョリーのキャン／＼云ふ悲鳴と同時に、喉を締められるやうな苦しうな唸聲が聞えて來たので、二人はいきなり旋條銃を握るが早いか、ドアを開いて飛び出しました。

が、その時には最早ジョリーの姿はどこにも見當りませんでした。唯闇の中を向うへ、大きな、足の裏の柔い獸が飛ぶやうに逃げて行くのが見えました。森君は早速一發放ちましたが、手應へありませんでした。「ジョリー、ジョリー。」闇に向つて呼んで見ましたが、答がありません。大村君は「ビー」と口笛を吹いても、唯空しく眞暗な森に底氣味悪く反響するばかりで、ジョリーは歸つて來ませんでした。

七





「何だらう？」二人は早速松明を拵へて、足跡を調べて見ました。

「やあ、大きな足跡だ。こりや虎か豹だぜ。」

「畜生！ そうだとすれば、ジョリーは殺られたんだな。」

「可哀想に……。」

「どうしよう。」

夜は猛獸の襲つて来るのを教へてくれ、晝は獲物の陰れてゐるのを教へてくれた忠實な愛犬をさらはれた二人が、途方に暮れたのも無理はありません。

二、馬もまた

ところが、それから一週間ばかり経つてからの事でした。朝早く起きて、馬を小屋の前の草原へ連れて来て、日向ぼっこをさせ、いっだけ草を食べられるやうに手綱を長くして置いて、二人は手別をして昨夜掛けて置いた罾を見廻りに出懸けました。旨く行くと、大きな虎や熊が陷阱へ落ちてゐる事があるのです。い、獲物がないと、その儘鐵砲で撃ちに行のですが、この方は、半分は副食物になるやうなものを撃つのです。いつも歸りは夕方になります。その日も二人揃つて歸つて来ると、草原に馬が血だらけになつて斃れてゐるではありませんか。

「あつ！」と云つた儘、二人は立ち竦んでしまひました。やがて森君は

「傷ましうに死骸を眺めながら、

『どうして今年はお運が悪いんだらう。この間はジョリーを殺られるし、今日は又これだ。今度は何だと云ふんだ。』

すると、大村君が、

「もう何もありません。我々の持つてゐるものはもうこれでみんなだもの。今度殺られれば、僕等の番だ。」

「ナーニ、殺られるまで待つてゐて堪るものか。これからすぐ害獸を退治してやる！」

「いや、奴の後を追ふにしては少し時間が経ち過ぎた。それよりも君、いゝ事がある。この死骸を見ると、唯腰のところに一口食られてゐるだけで、外は何うもなつてゐない。それから考へると、虎だか豹だかの奴、また腹が減つた頃に御馳走になり来ようと思ふつもりぢやないかと思ふ。きつと夜中あたりにやつて来るに違ひないよ。そこを小屋の中から見張つてゐて、ズドンと、お見舞申さうぢやないか。」これが大村君の意見でした。

「成程、そいつはいゝ。」

そこで、二人はその準備に取りかかりました。

三、近くにうなり聲



その晩、二人は代り／＼に見張りをして、一晚起きてゐましたが、その甲斐もなく、虎も豹も姿を見せませんでした。無事に白々と夜が明けてしまつたので、死骸を引きずつて行つて、小屋から離れた處へ棄てて、狼か狐の餌食にしてしまひました。と聞くと、無慈悲な事をすると思ひになるかも知れませんが、丁寧に埋めてやつても、すぐ獣に掘り返されて餌食になる事は同じです。さて、大村君はいつもは元氣のある快活な青年でしたが、續けてこんな恐ろしい目に逢はされたので、すっかり恐くなつて「かう不運が附き出したところを見ると、今年は引き上げた方がよくはあるまいか。」と云ひ出しました。森君は「いや、そりや惜しい。今年はいつもより獲物が多いし、食べる方の獲物にだつて困らない。もう一ヶ月か一ヶ月半ここにゐよう。さうすれば引き上げる時までには、獲物が多くつてホク／＼もので歸れると云ふものだ。第一、ジョリーと馬の敵討をしないうで歸るのは日本男兒の恥ぢやないか。」かう云つて勵ますと、流石は大村君も純粹の獵夫です。「全くさうだね。よし、踏みとゞまつて敵討をしてやらないうちは歸らないぞ。」



森君が云つた通り、毎朝晨を見廻りに行くと、面白い程大きな虎や熊が陷阱に落ちて暴れてゐました。それをなりたけ毛皮にする時のために疵の附かぬやうに殺して、引き上げるのでした。「どうだ、僕が云つた通りぢやないか。」と森君が云へば、「全くね、引き上げないでいゝ事をした。」大村君もだん／＼元氣を取り戻して、又もとの快活な獵夫になりました。すると或晩、森君が眠つてゐると、大村君がガバと跳ね起きて、「おい、君は何か聞かなかつたか？」云はれて森君も耳を傾けると、しいんとした庭の空氣を顫はして、谿河の方で太い喉で唸つてゐる聲が聞えて來ました。「ウン聞える聞える。ありや豹だ。お氣の毒様、もう僕等の處には犬も馬もゐないよ。ハ、ハ、……。」「彼奴ぢやないかね、ジョリーと馬とをさらつて行つたのは？ どうも僕はそんな氣がして仕方がないな。」「そんなら猶いゝ。見事な一發をお見舞ひ申したいな。」森君は元氣よくこんな事を喋りながら床の上に仰向けになつて目をつぶりましたが、大村君は隣の床の中で寝返りばかり打つてゐました。

四、「早くお逃げなさい」



翌る朝は、カラリと晴れた、い、秋日和でした。空中に水蒸氣の少い朝鮮では、青空が内地よりも透明で色をもつと濃い。思はず二人は胸を張つて上を向きましたが、その目へ、上空に鶴が一匹舞つてゐる姿が落ちて來ました。

「い、ね。」と森君が云ふと、

「ウンい、もんだね。」と大村も答へて、その盡森君は谿河の南側へ、大村君は北側へそれ／＼畏の見廻りに出懸けました。

その日は餘に獲物がなくつて、森君は一日歩き廻つてたつた貂と獾と二匹しか手に入れる事が出来ませんでした。

疲れて、夕方谿河を南側に渡ると、大村君が小屋へ歸る目印のためにしたのでせう、森の木々の枝がすつと續いて折つてあるのを便りに、森君は歸つて來ました。

暫く行くと、地面の柔い所へ出ましたが、見ると、大村君の草鞋の跡が附いてゐます。いや、草鞋の跡ばかりではない、その後を豹の足跡が追つてゐるのです。森君はギョツとして、見ると、餘程大きな奴と見えて、ぐいと土がメリ込んでゐました。大きなも随分大きい。

やがて堅い地面の處へ出ると、足跡は薄くなつてゐました。その時、森君の歩いてゐる道の前を左から右へ横切つて行く朝鮮人の白い袂が目



に這入りました。こんな山の中で人に逢なんて實に珍らしい事です。思はず兩方で見合ひましたが、

「お、お前は丁ぢやないか。」と森君が言葉掛けました。それはこの邊の炭焼で、毎年逢ふのでいつの間にか知合ひになつてゐたのでした。

「丁度い、處で逢つた。これを見つておくれ。」かう云つて、森君は丁を柔い地面の上の豹の足跡の處まで連れて行きました。

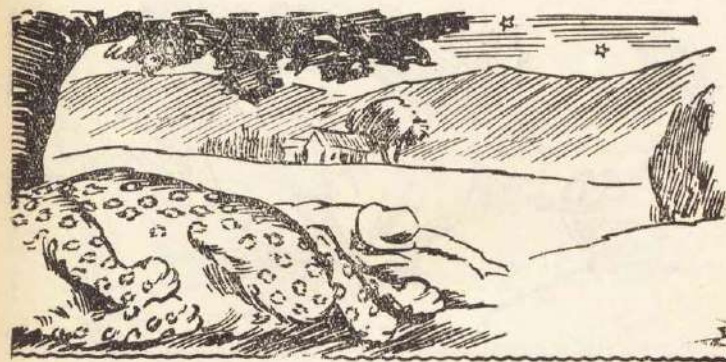
屈んでちつと見てゐましたつけ、いつも大膽な丁に似合はず俄に顔に恐れを浮べて、

「貴方早くお逃げなさい。」と手を森君の肩に置きながら、「獸のうちでこれが一番恐ろしい奴です。此奴はよく人間の後を追ひます。併し晝間は無事です。が、夜になると襲ひかかります。貴方は早くお連れを探し出して一刻も早くここをお立ち退きなさい。」かう云ひながらも丁は、豹に聞かれてもしては大變だと云はんばかりに、囁くやうに聲を低くしました。さうして云つてしまふと、さつさと歩き出しました。

「おい丁君、今夜は僕等の小屋へ泊つて行き給へ。」

森君がうしろから聲を掛けましたが、彼は振向きもしないで唯頭を振つて見せた儘、トットと山の上の方へ昇つて行つてしまひました。

五、大村君の災難



日が暮れて来ました。
森君は丁の話を聞いてから急に友達の上が心配になり出しました
が、「なあに、多分明るいうちに無事に小屋へ歸り着いたらう。」と思ひ
返しつつ、兎に角道を急ぎました。
すると、廣場に出ました。廣場を越して向ふに、自分達の小屋が黄昏
の弱い光りのうちに見えます。入口のドアが明いておりました。「やれ有
難や」と思ふ間もなく、「大村君はどこにゐるのだらう」と目で探しま
した。

その時ふと、廣場の真中に大きく手を擴げて立つてゐる楓の大木の下
の間が妙に森君の注意を引きました。ちつと見入ると、黒い影の中に
何か轉つてゐる様子です。どうもそれが人間の姿らしい。若し人間とす
れば、大村君より外にはありません。森君は即座に旋條銃を構へました。
が、地上には別段怪しいものは見當りませんでした。そこで森君は樹の
上に注意を向けながら、轉つてゐる人間へ近寄つてよく調べたいと思つ
て、大楓の蔭の中へ這入り掛けました。
するとその時、ふいにサラ／＼と云ふ響が梢の上から聞えて来ました。
森君はバツと思つて立ち留まりましたが、瞳を定めて見入つても、唯こ
んもりと茂つた梢が目に入らばかりでした。



「なあんだ、怖氣が附いてゐるな。」と我れと我心を嘲ひながら、森君は
もう一步近附きました。
と、梢の上に確に何かある！ 森君は先づ燐光を放つ二つの玉を見つ
け出しました。よく見ると、それは大きな兩眼でした。枝の又のところに
は、頭が載つてゐます。
畜生！ 木の葉が黄いところへ持つて来て、此奴の體が黄いので、見
分けがつかなくなつたのでした。サラ／＼音のしたのは、茂みの中で尾を
捲き上げたからでした。大村君を殺して置いて、森君を待つてゐたのに
違いありません。

六、一騎打ち

森君は旋條銃を肩に當てて引金を引きました。
と、敵は大きな肩を上げました。耳がうしろへ靡き、燐光を放つてゐ
た目が真赤に燃えてゐます。
その時、森君は二度目の發砲をしました。と同時に、樹の上から生き
た雷神が森君目掛けて落ちて来ました。森君は體を引き裂かれたやうな
氣がしたかと思ふと、その儘何も分らなくなつてしまひました。
やがて秋の夜の冷たさに我れに返つた森君は、葉越しに輝く月の光と
無數の星とを見ました。氣が附いて見ると、手に堅く旋條銃を握り締め
てゐる傍に、腦天を撃ち抜かれた大豹がゴロリと死んでゐました。
(をばり)



小鳥は空に

加藤武雄

十一

一六

ある朝、老伯爵は別邸を訪ねて、信子夫人に相談したのであつた。

「あんたも知つて居るやうに、いやな事件がいよいよ法律上の問題になつた。それで對手方の辯護士が本邸へ訪ねて來たりするので、雇人なども自然その問題を暗するやうになるだらうし、義雄の耳に入るやうなことがあつては、あの兒にも面白くない影響を残す。それで、此の問題が解決するまで、義雄をしばらく京都の方へ歸しておきたいと思ふのだが。」

信子夫人は、ちよつと考へて答へた。

「義雄も事情はうす／＼承知して居ます。でもあの兒は、例へば伯爵家の御世嗣になれなくとも、お祖父様の孫であれば幸福だと申して居ります。お祖父さまにお別れして京都にゆくと聞いたらどんなにかあの兒が寂しがることとございませう。」

「さう義雄が云つたのかい。いや、あんたも知つての通り、俺は三人の息子にさへ捨てられた爺だ。たれ一人として心から俺を慕ふてくれた者もなく、また俺も今日まで何人ひとり、心から愛したことはなかつた。それに、あの兒は俺を好いて居るやうだ。俺もあの兒と別れては一日も居られさうにない。」

老伯は、さう云つて窓の外に枝をさしのべた櫻の梢をながめて云つた。

「然し、あの櫻の蕾が開くまでには事件も解決するであらうし、義雄も亦わしのところへ歸つて來るであらう。」

その夜、大工の庄吉が附添ふて、信子夫人、義雄、お美津、河本夫人の一行五人は東京驛を立つた。國府津を過ぎて、信子夫人と義雄とは寢臺に入つたが、ほかの三人は二等車の片隅に、つましく假睡んだ。春の夜は明けるにはやく、關ヶ原をすぐる頃、

森や村や野が、くつきりと窓をとほしてながめられた。そのとき突然、機關車のあたりに大音響が聞えた。そして、烈しい勢ひで列車は停つた。まだ眠つてゐた客も醒めて居た客も座席から投げ出された。窓硝子がくだけて散つた。

「大變だ！」

庄吉は起きあがると、倒れて居る人々の上を飛ぶやうにして入口へ駆けつけた。それから六輛ほど後ろになつた寢臺車へと急ぐのであつた。

前部車掌が血みどろになつて駆け來た。

「脱線だ。寢臺車が脱線したのだ。」

倒れた客は身を起すと窓から後ろを眺めた。お美津も河本夫人も心はあせつたが、人々に妨げられて思ふやうに歩けなかつた。

線路に故障があつて機關車がそれに乗りあげた。その反動で後部の一等寢臺車が二輛、無慘にも畠の中へ脱線したのであつた。

一七



「大丈夫よ。今に何人か助けに来てくれますよ。」

信子夫人は義雄を抱、締め、慰めた。大型のトラックに両脚が挟まれて今にも折れるのではないかと思ふほど痛むのを堪えながら。

そのとき、窓を破つた者がある。そして重いトラックを取りのけて、帯に手をかけてくれた。夫人は義雄を抱いて立たうとしたが、両脚の痛みがひどくて起てなかつた。

「坊ちゃんを放して下さい。奥様が御出にならねば坊ちゃんが出せません。」それでも夫人は義雄を放さ

うとはしなかつた。救助に來た人の力が強かつたので、それでも母と子とは、窓から引き出された。救助に來た人は兼組の車掌とボーイだつた。ボーイの白い上衣が血に染んで居た。

外に出ると、今まで黙つて居た義雄が俄に元氣になつた。

「お母様、待つていらつしやい。僕が庄吉を呼んで來ます。」

さう云つて駆け出した。間もなく庄吉もお美津も河本夫人も來た。負傷したのは信子夫人だけだつた。村の醫者が駆けつけて負傷者に應急手當をした。

間もなく救護列車が來て、その夕方に京都へ着いた。皆は、夫人にその儘、大學病院へ入院するやうにすゝめたが、夫人は鹿ヶ谷の家に歸ると云ひはつた。

鹿ヶ谷の家は朝から村の人達が來て、掃除をしてあつた。そして、あの懐しい油繪の懸つたアトリエ

へ寢臺を据えて、夫人はその上に運ばれた。森田巡查が、自動車で大學病院へ駆けつけたので、間もなく外科の博士が自動車で來た。

信子夫人がねむつて居るあひだ、義雄は、母の病狀を心配しながら、思出の庭を歩いて居た。そしてびつたりと新聞記者に出會つた。

記者は、會釋しながら、たづねた。

「坊ちゃん、お母さんは？」

「お母さんは、おけがなすつて寢て居らつしやるんです。」

「では、どなたか東京から御見へになつた方に會はせて下さいな。」

義雄はいつもの癖で兩手をうしろに組みながら、「僕、東京から來たのです。おちさん何か御用ですか。」

「坊ちゃんではお解りになりません。どなたか東京

からいらした方はありませんか。」

「あります。お美津も、それから河本さんもさうです。でも僕に解らないことはありません。おぢさんは何處から來たのですか。」

「新聞社から參りました。」

「あゝさうですか。僕、東京で新聞社のおぢさんに澤山お目にかゝりました。みんなが、あの恐ろしいおぢさんのことをききました。でも僕にはよく解らないのです。お祖父様にも仙石のおぢさまにも解らないのですつて。」

若い新聞記者は微笑した。そして云つた。

「さうでしたか。では坊ちゃんの寫眞をとらせて下さい。」

そして、寫眞師に合圖した。

その午後、義雄は老伯に手紙を書いた。

「オヂイサマ。」

オカアサマノオケガハシンバイアリマセン。ボク

ハ、オヂイサマニアエナイノデ、サミシクテシヨウガアリマセン。マイアサ、ヒガシヤマノウヘニデル、アサヒヲ、オヂイサマノオカホトオモツテ、ゴアイサツシマス。」

それはあとになつて知れたのだが、老伯は此の手紙を仙石氏に見せて、生れてはじめて涙をながした。そして、

「早く、あの兒たちが東京へ歸るやうにするがよい。」と云つた。

一週間もたつと、信子夫人は杖をたよりに庭に出ることが出來た。

森田巡査と庄吉が發起人になつて、小學校の教室で、岩村一家の歡迎會が開かれたのもそれから間もなくのことであつた。その會で義雄は生れてはじめての演説をした。紀念のために記して置かう。

「僕達のことを新聞に出したので、皆さまが心配して居ると庄吉が申しましたが、お母さまも僕もそ

して河本さんも心配なことではないと思つてゐます。僕は伯爵にならなくても馬に乗ることができ、そして矢張お祖父様の孫であります。

僕は汽車が倒れるとは思つてゐませんでした、役人の話では動くものはみんな倒れるさうです。河

本さんは地球も動いて居ると教へて下さいましたから、多分いつかは地球も倒れると思ひます。そのときは動かないで、だれか助けに來るのを待つて居るとよいと思ひます。」

みんなは拍手した。



京都に歸つて三週間目に信子夫人は杖をばなして歩くことが出来るやうになつた。それで皆が揃つて若王寺山へお墓詣りに登つた。義雄にとつては一番愉快な日であつた。ちやうど日曜日だったので、駐在所の健吉も同伴した。見はらしのよい處に來ると、義雄は河本夫人に、あたりの風景について説明してきかせた。

「あれが黒谷の山で、僕は栗拾ひに行きました。その左が動物園で、舟が陸へのぼつて居るのが見えませう。あれがインクラインで

す。その上の、そら東京のお邸みたいのがホテルです。」

「義ちゃん。君のお邸はホテル程もあるのかい？」
健吉が訊ねた。

「さうだよ。そして僕の馬が居るんだよ。」

義雄は肩をそびやかした。

信子夫人は、亡き夫の墓前に跪いて、今日まで義雄を正い少年として育て、来たことを報告した。そのほかに何も云はなかつた。

その歸りみちで、薔の櫻が一つ二つはころびて居るのを見た。そして老伯が、櫻の咲く頃には皆が東京へ歸るのだ、と云つたことを思ひ起した。

はたして、歸つて見ると東京から手紙が来てゐた。

仙石氏からの詳しい便りであつた。

裁判のとき、線路工夫の定吉が戸籍謄本を誇據として差し出したので、謎の婦人は定吉の兄の妻で、



臆病者の成功

松平道夫

昔印度に大變臆病な一人の武士が居りました。ところがどうした廻り合せか、この臆病な武士が王様の命令で隣の國へ使にやられることになりました。今日の世なら何も心配することはありませんが、昔のことですから汽車や汽船などあるではなし、深い山を越えて幾多の危険を冒して行かねばな

りません。その山には虎や獅子などの猛獸が澤山居りますし、又山賊なども居るのでから一人旅はこの上もない危険です。
この臆病武士がこの命令を受け

へ歸つて來ました。
「まあ貴方の顔色は眞青ですよ。何か心配事でも起つたのですか。」
と彼の妻はいきなり訊きました。
「實は王様の命令で隣の國へ明日立かねばならない。隣の國へ行く道はあの通りけわしい。或は山の中で虎に喰ひ殺されるかも知れない。又山賊に捕つて殺されて了ふ

少年は、その長男であることが判明した。従つて伯爵家の御世嗣は矢張義雄様である。老伯も心から喜ばれた。就ては、至急御歸京ありたい。そして京都のお邸は長く御別邸として保存し、森田巡査に保管を依頼されたい。御上京の節は庄吉殿、それから森田健吉君をも伴はれたい、といふ意味であつた。
信子夫人は、裁判の結果、義雄が伯爵世嗣と確定したことは格別嬉しくもなかつた。そのため、母子と子が永久に別居しなければならぬことを思ふと、何だか悲しくもあつた。
義雄は手紙の話を聞くと、あわてゝかけだした。そして健吉の家にいきなり飛び込んで叫んだ。
「健ちゃん、君も東京へ行くのだよ。僕と一緒にあのホテルみたいなお邸で暮すのだよ」
(つゞく)

かも知れない。」
と心配さうに云ひました。

「まアさうですか。」

と妻は平氣な顔をして云ひました。彼の妻は大變、悪い女で、前から自分の夫を逐ひ出して財産を横取りしようと考へて居たので、この話を聞いて恰度よい機會だと思つて、何喰はぬ顔をして云ひました。

「まアそれは困つたことになりましたね。しかし私はよい道を知つて居ります。その道を通つて行けば安全ですから。」

と眞らしく良人に向つて、間違つた道を教えました。その道はもつとく／＼けわしい、そして多くの猛獸や、又山賊などの出る道でし

た。けれどそんなことを知らぬ良人は喜んでその道を通つて行くことにしました。

その夜不貞な妻はいつになく忠實に働いて、金柑大の歡喜丸と云ふ元氣をつける藥見たいなものを五百粒練り上げました。そして旅支度に忙しい夫に向つて、

「道中は随分氣をつけて行つて下さいよ。これはね、私が心をこめて拵へた歡喜丸五百粒です。道中でお疲れになつた時やお腹がすいた時に召上れ。たちまちに元氣が恢復しますから。」

と云つてそれを渡しました。好人物の良人はこ／＼して、
「手製の歡喜丸か。有難い。これさへあれば千人力だ。」

と喜びました。そしてその習日早く出發しました。妻は出て行く良人を見送つて赤い舌をペロリと出しました。

「あゝ行つて了つた。もう歸つて来る氣遣ひはない。あの歡喜丸は毒藥が混入つてゐるのだもの。大方今日の晩あたり、山の中であれを食べて死んで了ふだらう。さうすればあの人を誰が殺したのか分らない。先づこれで一安心。」

と恐ろしい妻もあつたもので、いゝ氣になつて朝つばらから寢て了ひました。

そんなことは少しも知らぬ武士は道を急いで來ました。その道は妻から訊いたとは反對にととてもけわしい山路で、云はゞ間道です。

けれど今更引返す譯にも行かず、兎に角行けるだけ行つて見よう、と決心して歩き續けました。

その中に日はとつぶり暮れて來ました。山路はもう大抵登りつくして、それさへ越せばもう隣の國へ這入るのです。けれど山の中で日が暮れるの程困ることはありません。

「たうとう日が暮れた。里までまだ餘程あるらしい。あゝ困つたなア。この邊に人家がある筈はなし、と云つてこんな山の中で寝ることも出来ない。うつかりして居ればすぐ虎や獅子に喰はれて了ふ。どうしたらいいか。」
と臆病武士は途方に暮れて立ち止まりました。もう疲れて足は一歩

も前に出ません。仕方なく彼は大木の根元に腰を下ろしました。今までは一生懸命に歩いて居りましたから何も耳に這入りませんでしたが、立ち止まつて耳をすませてゐると、あちらこちらで狼の吠える聲や虎のうなり聲などが深い山の奥から何とも云へぬ恐ろし氣に響いて來るではありませんか。武士は思はず身體がぞく／＼としました。そして彼は何思つてか今まで腰をかけて居た大木へ猿のやうに攀登つて、枝のよく茂つて居る間に身を秘めました。大方かうして隠れてをれば狼や虎が出て來ても大丈夫と考へたのでせう。ところが暫くすると、件の武士は思はず大聲を立てました。

「やつ、しまつた。大變なことをした。歡喜丸を落した。」

けれど臆病な武士は一度木を下りてそれを拾ひに行くだけの勇氣がありません。彼は山の奥から響いて來る猛獸の聲に魂を奪はれて、木から下りたが最後、それらの猛獸が飛び出して忽ち殺されて了ふやうに思はれるからです。

「仕方がない。翌日まで待たう。」と武士は腹がへつたのをじつと辛抱して梢にしがみついて息を殺して居りました。

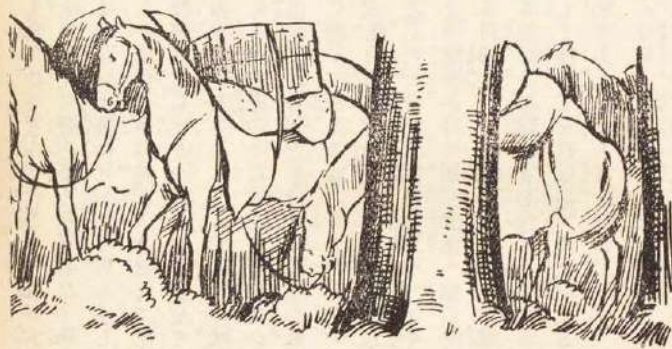
その中夜は段々と更けて來ました。恰度眞夜中と思ふ頃何となくざわ／＼として、何だかしらないが多勢の人間がこの山路を登つて來る氣配がします。

『はてな、何だらう。めつたに人の通らぬこの山路を、しかも大勢のやうだが。さうだ、蛇度山賊に違ひない。』

と臆病武士は猶一層小さくなつて息を殺して居りました。その中に足音は段々近づいて來ます。ざわ／＼と云ふ人の私語、馬の馬蹄の音も交つて居ります。そして臆病武士の登つて居る大木の下まで來ると、それらの私語や馬蹄の音もびつたり止まりました。

『おい。こゝまで來れば大丈夫だ。一休みして行かう。馬を繋げ。そして篝火の準備をしろ。』

と首らしい人の命令する聲がしました。すると急に人の聲や馬の嘶やらで一時賑やかになつてゐ



がてばつと篝火がつきました。臆病武士はもう自分が彼等に見つけられたやうな氣がして生きた心地がありません。そして恐る／＼下を見下しますと、此處、彼處にいろ／＼な劔や槍を持った異様な姿をした人間が篝火を圍んで談笑してをります。それは正しく山賊の群に違ひありません。そして自分が登つて居る木の根元を見ますと、そこには首魁らしい鬚武者が二三十人の部下に圍まれ乍ら愉快さうに話をして居ります。

『首魁、今日の仕事は全く危険でしたね。』

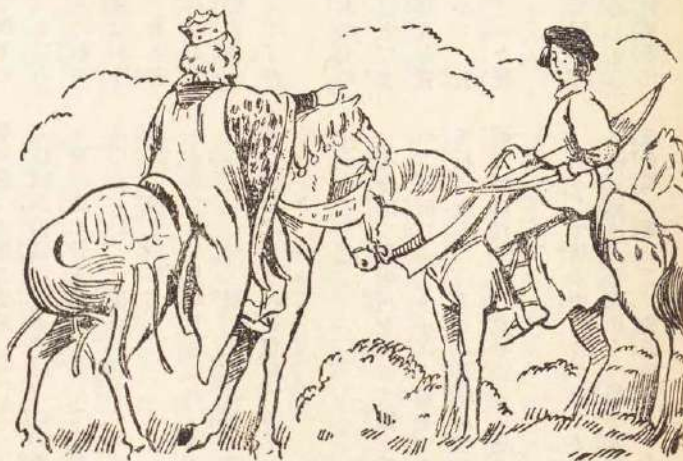
『さうよ、命懸だつたからなア。』
『敵手は假令小さくとも一國の王ですからな。』

『さうよ、今頃は城中で上を下へ大騒動をして居るだらう。』

と首魁はから／＼と笑ひました。察するに

これらの山賊は隣の國の王様の城中に忍び込んで多くの馬と金銀財寶とを奪つたものらしいのです。見ると何十匹かの馬の脊にはそれぞれ寶の還入つてゐるらしい袋が二つづゝ結びつけてあります。

『あゝ急に腹がへつたやうだ。今までは夢中だつたから別に氣にならなかつたが一休みす



ると急にべこ／＼になつた。何か食ふものはないかなア。』

と首魁は部下を見渡しました。

部下の面々も今首魁と同じことを考へて居たので一同は顔を見合せたまゝ黙つて居ります。それを見ると食物は何もなさうです。

『弱つたなア。』

と首魁は呟いてふと自分の腰を掛けてゐる傍を見ますと何だか知らないが袋が落ちてをります。

『おや、こんなものがある。』

と首魁は手早く拾つて袋の口を開けて見ました。

『おや、これこそ天の興へだ。美味さうな歡喜丸があるぞ。しかし大分澤山ある。皆なで分けて食ふことにしよう。』

と早速これを百人近くの部下に分けて食つて了ひました。ところがどうせう。山賊共はその歡喜丸を食ふて了ふと、急に皆ながうん／＼と唸り出しました。ある者は大地に獅噛付いて苦しみ、ある者は傍の木に抱きついて悶え苦しんだ後、たうとう皆な死んで了ひました。

さあ譯の分らないのは木の上の武士です。さつきの恐怖は未だ去りませんが、とにかく歡喜丸を食つて死んだのは事實ですから、彼は怖々、木から下りて来て一々死體に觸つて見ました。

『冷たい。たしかに死んで居る。』と臆病武士は一先づ安心しました。傍を見ると澤山の馬が勝手に

草を食べて居ります。

『盜賊共の話の様子は、この馬も脊の袋も皆王城から盗んで來たものらしい。一番俺の功名にして恩賞に預るかな。』

とあたりを見廻しました。すると夥しい弓と箭が死屍の間に亂雑に捨てゝあるのに氣が付きましたから、

『これ／＼。』

と早速一張の弓を取つて箭を番へ、死屍にぶつり／＼と箭を立てて行きました。そして盜賊が皆な箭で倒れたやうに見せかけてをきました。

さうして居る中に夜がほの／＼と明け始めましたから、馬を皆な珠數繫に繋いで、先頭の馬にひら

りと飛び乗つて、悠然と山を下つて行きました。

さうして隣國へ這入つて行きますと、突然王様が澤山の軍勢を引きつけてまつしぐらにこちらを目がけて驅けて來ます。そして忽ち臆病武士の前に立ちふさがりました。

『こら、その方は何者だ！』

『隣國からの旅人で御座る。』

と臆病武士はわざと威張つて云ひました。

『ふむ、その馬も背の實も全部余のものぢや。昨日の盜賊はその方ぢやな。』

と王様はいきなり劔を抜いて切り捨てようとした。その有様に臆病武士は吃驚仰天して、

『うむ。』

と王様は臆病武士を見上げて云ひました。

『貴公は誠に勇士ぢや。貴公のお蔭で馬も實も無事に戻つた。貴公は全く見掛に依らぬ英雄ぢや。今日から余に仕へて力となつてくれる氣はないか。』

『ははは……これしきのこと………忝なうござる。』

と臆病武士は自分の思ふ通りに行つたのでべこ／＼と頭を下げて云ひました。それを見て王様は満足氣に笑ひ乍ら云ひました。

『それが勇士の遠慮と云ふものぢや。奥床しい心根ぢや。余は勇士を得て幸ぢや。今日の恩賞に馬に積んだ寶を半分貴公に取せる。』

『ははは……有難う存じます。』

と臆病武士はもうぼうとなつて云ひました。

かうして彼は王様に重く用ひられるやうになりました。王様は誰よりもこの臆病武士が氣に入て、何でも彼でも彼に相談してから決めると云ふ風でしたから、舊臣等は彼を嫉妬して、彼の化の皮をはいでやらうと企てゝをりました。そしてある日、主だった者が集つてひそ／＼と何か相談してをりました。

『彼の新參者奴、僅かな勳功を以つて祿と云ひ待遇と云ひ、吾々舊臣を越えて君寵を擅にして居るのは實に怪しからん。それに見たところあんなひよろ／＼した奴が

『一寸持つて下さい。私は決して盜賊ではありません。却つて私はその盜賊を壓殺にして來た勇士です。嘘と思はれるなら、この峠を上つて行つて見られよ。』

と云ひました。

『ふむ、こりや家來共。誰か峠に登つて見届けて參れ。』

と王様は後を振り返つて云はれました。

『はは。』

と答へて二三人の家來が馬を驅けつて行きましたが、程なく息を切つて歸つて來ました。

『申し上げます。彼方には確かに夥しい死屍が箭傷を負ふて倒れてをります。彼等こそたしかに盜賊共でござります。』

百人の盜賊を慶殺にした勇士とは
どうしても思はれぬやないか。」
「全くだ。何として思ひ知らせて
やらねばならぬ。」

と密議して居りました。恰度そ
の時例の臆病武士はその部屋の前
を通りかかりました。そしてふと
自分の名が聞えるので立ち止つて
耳を傾けますと、自分の悪口なの
で彼は考へました。そして何思つ
てか突然つか／＼とその室に這入
つて行つて大聲で怒鳴りつけまし
た。

「貴公等は余をどうしようと云ふ
のだ。女々しい會議は止めて劔を
抜いて余と戦へ。余は唯一人で百
人の盜賊を慶殺にした勇士ぢや。」
と云ひ乍ら女竹のやうな細い腕

をにゆうと彼等の鼻先へ突出しま
した。すると舊臣等はその細腕を
見て戦慄しました。

「いや、決して貴公のことではご
ざらぬ。平に御勘辨を。」

と一同は謝罪しました。
翌日不意に一頭の大獅子が城外
に現はれて荒れ狂ひ、多くの人や
馬が殺されました。城内でも上を
下への大騒ぎをしましたが、誰一
人これを退治しようと云ふ者があ
りません。そこで舊臣等は集つて
相談しました。

「どうぢや。あの新參者を懲すに
よい秋ぢや。彼奴に獅子を退治さ
せてやらうぢやないか。昨日の手
前嫌とは云へまい。行けば獅子に
食はれるに決つてゐる……。」

三〇

と一人が云ひました。

「成る程それはよい考だ。」

と皆は同意して揃つて王様の
前に出て云ひました。

「王様、この度の獅子退治は、新
規召抱御秘藏の勇士こそ適任かと
思ひます。」

「うむ、彼なら立派に退治するで
あらう。」

と王様も早速同意して彼を呼び
出しました。そして一本の劔を示
して云はれました。

「今度の獅子退治の重任を命ず
る。この寶劔を持つて行け。」

「はつ。」

と臆病武士はそれをお受けしま
したが、顔色は土のやうに變りま
した。彼はすこ／＼と寶劔を持つ

て城外に出ました。

「あゝ余は故國の妻に背かれたゝ
め、この國で重く用ひられるやう



になり、夢のやうな歡樂を擅に
した。今その夢が醒める秋が來た
のだ。もう仕方がない。いさぎよ

く獅子の餌食となれ。」

と彼はさう決心して獅子に近づ
きました。獅子は彼を見る一瞥
高く咆哮して牙を鳴らして踊り掛
つて來ました。彼は「さア大變」
といきなり傍にあつた大木の枝に
飛びつきました。獅子は凄惨な
聲を發すると同時に再び樹上の彼を
目がけて大飛躍を試みました。そ
れを見た臆病武士は恐怖の餘り、
「あつ。」と叫んで、思はず手に持
つた寶劔を取り落しました。

「さア大變、劔がなくなつた。」
と彼はもう生きた心地なく枝に
ぶら下つて縮こまつてゐますと、
急に下で獅子の苦しさうな唸り聲
がします。「はてな」と彼は恐る恐
る下をますと、こゝろ如何に、落

した筈の寶劔が獅子の口から咽喉
を貫いて、獅子の咽喉からは眞赤
な血が泉のやうに流れ出して居り
ます。流石の獅子ももう二度と跳
り上ることも出來ず、地上に伏し
て最後の苦しみをして居るではあ
りませんか。

「あゝ何と云ふ僥倖だ。」

と臆病武士は涙が出る程喜び勇
んで急に元氣を取り返し、枝から
パツと飛び下りて叫びました。

「天祐！天祐！神々の加護ぢや。」

そして彼は意氣揚々と引き上げ
ました。それから後は誰も彼の惡
口を云ふものがなくなり、彼を嫉
妬して居た舊臣等も彼の勇猛に心
服して了ひました。そして王様の
寵愛は益々加はり、眞淑な妻を迎
へて幸福に暮しました。(をばり)



琴弾き山

三宅房子

三三

昔、山城の宇治の里に、伊藤帶刀矩資といふ武士が住んでゐました。祖先が平家でありましたので、矩資にもその血が流れてゐました。ですから、何處か物優しい青年でした。學問が大好きで、また武藝にも流れてゐました。しかし、今は家が落ちぶれてゐますので、出世の望みもなく、止むなく文學の研究にふけつて、風流な日を送つてゐました。

もう秋も末の、ある夕暮れでした。矩資はたゞ一人、丘の麓を歩いてゐました。すると、後の方から、見なれない少女が来るのに出遇ひました。年は十二位でせうか、大層美しい服装をしてゐます。矩資は不思議に思ひました。こんな山里に、どこ娘だらうかと不審に思ひました。そこで、少女が傍まで来るのを待つて尋ねました。

「お嬢さん、もう日も暮れて、ちき暗くならうというのに、どうしてこんな處を、獨りで歩いてゐらつしやるのです。道にでも迷ひましたか。」

矩資が聲をかけると、少女は立止つて、につこり笑ひました。

「私は宮仕へをしてをります。この近くに住つてゐらつしやる或る尊い方のお側に仕へてをります。でも、家は直き近くなのでございます。」

矩資は一層不思議に思ひました。この近くに、そんな尊い身分の人の住んでゐる事を、聞いた事がなかつたからです。で、矩資はたゞ

「私もこれから宇治へ歸りますから、淋しい處だけ送つて差上げませう。」と、いひました。

少女は矩資を道づれにしたのを大層喜んでゐるやうでした。二人は歩きながら、いろ／＼の話をしました。少女は宇治へも行つたことがあるといつて、宇治の花や紅葉の話や、それから自分の両親がゐる

京都の話などもしました。

矩資は面白がつて、少女のおしやべりを聞いてゐる内に、いつか村へ入りました。

其處は樹が茂つてゐて、妙にいきな村でした。太陽はもう沈んでゐました。あたりは、とつぷりと暮れてゐました。

狭い細道のところまで來た時、少女は立ち止りました。

「御親切に有難うございました。私はこの道を參ります。」

「このお近くですか。それでは折角こゝまで來たのですから、貴女のお家を見せていたゞきませうか。」

と、矩資がいひました。

矩資は、再び少女と一しよに細道を行きました。やがて小さい門の前に出ました。

「私がお仕へしてゐるのはこの家でございます。わざ／＼お送り下さいましたのですから、お入りにな

三三

つて、暫くお休み下さい。」
さう少女がいつたので、矩資もその氣になつて、
門を入りました。



三四
門の中は庭になつてゐます。そこには、薄や、萱
など秋草が茂つてゐました。そして、家の中からは、
もう灯が洩れてゐました。
矩資は家の方を眺めながら、
『こんな人里離れた村に住んでゐる尊い身分の人と
いふのは、一體何人であらう。』と、思ひました。
『どうぞ、暫くこゝにお待ちになつて下さいませ。
あなた様のお出でになつた事を、お知らせして参り
ますから。』

さういつて、少女はあはたどしく奥へ消えて行
きました。

矩資は、もう一度家の軒下まで行つて、家の中を
覗き込むやうに見ました。家は驚くばかり廣く、し
かも、大層古くて、古風な建方です。廊下に沿うて
は、美しい御簾が下つてゐます。それが何ともいへ
ない奥ゆかしさでした。

ふと、奥から琴の音が洩れて來ました。彈き手は

矩資は、それを知りたくなりました。

やがて、琴の音は止みました。すると、先の少
女がまた出て來て、

『さア、どうぞお通り下さいませ。御主人様は是非
お眼にかゝりたいと仰つてございます。』と、い
ひました。

そして、矩資を玄關の方へと案内しました。

主婦らしい年老つた婦人が、矩資を迎えるために、
奥から現れました。この老女は、丁寧に矩資を迎え
ました。幾つもの部屋を通つて、奥座敷へと案
内しました。

矩資は部屋立派なものと、道具や装飾の美しいの
には、全く驚いてしまひました。そこへ女中達が茶
やお菓子を持つて出て來ました。

さて、そこへ置かれた器を見ると、いづれも珍し
い、尊い細工ばかりでした。模様といひ定紋といひ、
主人がただ人でないことを語つてゐます。矩資の好



誰かわかりませんが、尋常の手並みとは思はれませ
ん。矩資は、うつとりとして聴き入りました。
『この家に住んでゐる人は何人だらう。』

奇心は、いよ／＼深くなつて行きました。

と、不意に、老女が、

『あなたは伊藤様ではございませんか。宇治の伊藤帯刀様ではございませんか。間違つてをりましたら、御免下さいませ。』

と、いつたので、矩資は答へることも出来ない程驚いてしまひました。矩資はたゞさうであることを



示すために、黙つて頭を下げました。矩資は先きの少女に、自分の名を話もしませんでした。ですから、この老女が自分の名を知つてゐるのが全く不思議に思へました。

老女はまたいひました。

『いろ／＼お尋ねしては失禮と存じますが、お赦し下さいまし。あなたがお出で下さいました時、私はあなたのお顔を存じてをりました。全く私の思つた通りでございました。是非申上げたいことが御座いますので、念のために伺つたのでございます。』
老女は矩資の傍へにちり寄りました。そして囁くやうに、

『あなたは時々この村をお通りになりました。それを姫君が御覧になつて、それ以来姫君は、あなたのことはかり考へてゐらつしやいます。そして今では、御病氣になつて了ひました。もしも、このまゝに置きましたら、お命もどうかと氣遣はれてをります。』



そこまで話して、老女は吐息をつきました。

『そんな次第ですから、一生懸命あなたのお名前やお住居を尋ねてをりました。手紙を差上げようか、使を差上げようかと思つてをりますところへ、思ひがけなくも御出で下さいました。どんなにか嬉しい

ことでございます。本當とは思へない位でございます。これといふのも、出雲の神様のお引合せでございます。就きましては、かうやつて、不思議な御縁で結びついたものでございますから、どうぞ姫君を喜せて上げていたゞきたうございます。』

矩資は何と答へていゝか全く分りませんでした。若し、老女のいふ事が本當とすれば、それは矩資のためにはまたとない機會でした。彼のやうな名も、富もない武士が、尊い家柄の姫君の婿となるのですから、こんな幸はない筈です。しかし、靜かに考へて見ると、あまりに不思議すぎる話でした。

矩資は、やゝ暫くして答へました。

『私には差し當つて困る理由もございません。私には妻も許婚もありません。しかし、あなたの仰ることがあんまり突然ですから、何とお答へしてよいかわかりません。私は御覧の通り仕へる主人も無く、また身分もない卑しい者です。ですから、出世をす

るまでは決して妻を持つまいと考へてをりました。
あなたの仰るお話は、私には餘りに身分に過ぎた
お話で、お断りいたすより外ありません。」
矩資が漸くこれだけのことをいつた時、老女が、



三八
「さうは仰ひますが、まア／＼その御決心は姫君
に一とお目お遇ひになつてからになすつて下さいま
せ。お遇ひになれば、きつとお心も變ります。」
さういつて、老女は躊躇してゐる矩資を無理に引
き立て、別な部屋へと案内して行きました。そこ
には、既に御馳走の用意がしてありました。老女は
矩資を上座に据ゑて、それから矩資だけを一人置い
て出て行きました。

間もなく襖が開いて、老女が案内して來たのは、
この世の人とは思はれない程美しい人でした。それ
が姫君でした。矩資も、嘗てこんな美しい人を見た
ことがありませんでした。

矩資は、これは皆な夢ではないかと思ひました。
さう思つて、眼の前の光景を見つめてゐました。

老女は、蒼白い顔をして黙つてうつむいてゐる姫
君に向つて、

「姫君様、あなたがお遇ひしたいと仰つた方が、

老女は暫く泣いてゐた後で、漸く顔を袖から現し
て、

「姫君様、何を躊躇つてゐらつしやるのです。さア
さア早く神様に御夫婦のお誓をなさいませ。」と、い
ひました。

矩資は何といつていゝか、言葉も出ませんでした。
自分の眼の先きに現れてゐる天女のやうな姫君の姿
を見てゐると、口が固くなつてしまふでした。矩
資は、どうしていゝか全くわからなくなつてしまひ
ました。

その内に、召使達が三三九度の盃を持つてあらは
れました。厳かな結婚の式が、こゝに舉げられたの
でした。

矩資は夢に夢を見るやうな心地がしてゐました。
不思議といへば、世の中に、これ程不思議なめぐり
會ひが、またあるでせうか。

(つゞく)



思ひがけなく來て下さつたのです。全く思ひがけな
いことでした。これこそ、出雲の神様にお引合せと
より外思はれませぬ。本當に私は、この事を思ふと、
うれしくつて／＼泣かすにはゐられませぬ。」
といつて、老女は、おい／＼と泣きました。



大島二等卒の話

久米 舷 一

日露戦争當時のお話です。

ある中隊に、大島と云ふ二等卒が居りました。

大島は、中隊長の佐伯大尉の從卒をして居りました。皆様は從卒と云ふ者を御存知でせう。將校が、

「おい、從卒。俺の靴を持って来い。」と云ひ附けると、

「はいッ。」と大きな聲で御返事をして、敬々しく靴を捧げて行きます。その他、將校がお風呂へ這入る時には、背中を洗つたり、お湯かげんを見たり、着物の世話をしたりせねばなりません。大島はこの從卒と云ふ役目をしてゐるのでした。

中隊長佐伯大尉は、ついぞ曾つて笑顔など見せた事のない、厳格な人でありました。

ところが、從卒の大島は又、負けきらひの強情者でしたので、佐伯大尉に心から服してゐると云ふ譯には行かなかつたのです。

大尉の猿股を洗つたり、あつちこつちへ使ひに追ひやられたりするのが、大島には厭で／＼堪りませんでした。大島は中學校出でした。ですから、ともすれば、色んな理窟がこねて見たくなるのでした。

「何んだ、中隊長だ？　へん……中隊長の何處が豪いんだ。同じ人間ぢやないか。……同じやうに身を投げ出して御國の爲に戦争してゐるんぢやないか。」大島は使ひに行く途中も、胸の中ではこんな事を考へて居りました。

それは我軍が、支那の老君峪のあたり迄、進軍して行つた時の事でした。

ある夕方の事、大島は大尉の命令で、附近の村へ、酒を一升ほど買ひにやらされました。

終日、暑い／＼日の中を行軍して來た後です。大島はもう疲れ切つて居ります。あたりを見廻すと、戦友達ははや彼方此方に焚火を圍んで、夕食の支度をして居ります。

大島は羨しく思ひましたが、仕方がありません。

從卒の身ですから、大尉の命令通り、空饈を持つて酒を探しに出て行きました。

「ところが何處の農家へ行つても、
『酒などはありません。』と云ひます。いえ、有るにはあつても、隠してゐるのです。大島は重い足を引摺り／＼、方々を探し廻つた挙句、漸くの事で、一軒の農家の土間に、酒甕らしい物が置いてあるのを見つけ出しました。

其處には、一人の汚い身なりをした老婆が居りました。大島はどん／＼家の中へ這入つて行つて、いきなり甕の蓋を取つて、匂ひを嗅いで見ました。ぶーんと、いゝ酒の香が鼻を衝きました。

「おいこの酒を少し分けて呉れ。い、だらう？」

大島はかう云つて、老婆が顔を顰めて、何かくしや／＼云つてゐるのにも構はず、持つて来た瓶に一杯つめ込みました。そして、老婆の前に五十錢だまを一つ抛り出して、露聲地へ歸つて参りました。

「中隊長殿、行つて参りました。」

中隊長は其時、岩蔭に腰を下ろして、夕飯を食べて居りました。

「うん、御苦勞。あつたか？ よし／＼。そいつは此方へ呉れ。それから貴様ももう彼方へ行つて、飯を食つてよし。」

やつとお許しの出た大島は、自分の存続の所へ歸つて来て、これから食事の用意にかゝらうとした時でした。突然、

「大島。大島。大島は居らんかッ。」と云ふ、烈しい大尉の呼聲がしました。

「はッ。只今参ります。」

あたりの兵士等は、
或者は同情の眼を以て、また或者は面白さうに薄笑ひをしなから、うなだれて歸つて行く大島の姿を見送つて居りました。

三

其晩大島は、岩蔭に藁束を敷いて横になりながらも、どうしても、眠る事が出来ませんでした。くやし涙が後から／＼と睫毛に溢れては、地面に滴たり落ちました。

「間拔けとは何んだ、間



大島は慌て、飛んで来て見ると、大尉は眼の色を易えて、立上つて居ります。

「これは又何か失敗じつたな。」大島がヒヤリとした時に、大尉はいきなり頭から嘸鳴りつけました。

「大島！ なんだ、この酒はッ。」

大尉は茶碗の酒を突きつけて、

「まるで酔になつとるぢやないかッ。馬鹿。こんな物が飲めると思つとるのかッ。」と云つて、突然、その酒をびしやツと、大島の顔に浴せかけました。

「馬鹿。間拔け。少し氣を利かせろッ。」

大島は濡れた顔を拭きもせずに、キツと地面を見結めたまゝ、其處に突立つてゐました。身體中の血が、くわツと煮えくり返へつて、足から頭へ、頭から足へと走り廻るやうな氣がしました。

「なんだ、その間拔けは。面を見るのも癪にさばる。あつちへ行けッ。……さア、行け。行けと云つたら行かないかッ。」

抜けとは！ 畜生。……間抜けか、間抜けでないか
今に見て居ろ……」大島は齒を喰ひしばつて泣きま
した。こんな事ぐらゐで泣くまいと思つても、口の
所が自然にむづくと動いて泣けてくるのでした。
明方近くの事、大島はフト、何か決心したらしく
獨り深く頷きました。
『よし、かまはない。やつつけてやれ。なに、俺も
直ぐ其場で死んぢまへばいいんだ！』
大島は何をもくろんだのでせう。
大島は戦ひの最中に、後ろの方から自分の銃で、
大尉を射つてやらうと考へたのです。
——兩軍が接近して、皆が夢中になつてゐる時だ、
敵に向つて發砲するやうなふりをして、大尉を射つ
たつて分りやしない。——大島はかう思つたのでし
た。
何んと云ふ卑怯な、何んと云ふ愧かしい事だせう。
味方の將校を、しかも自分の中隊長を射つ。彼にこ

ました。と見るまに、突然、自分の銃を大尉に向け
て狙ひを定め、ずとん、と一發打ち發ちました。



併し、なんと云ふ幸せでしたらう。彈は僅かに急

んな恐ろしいたくみがあらうとは、大尉は勿論、誰
一人として知る者はありませんでした。

四四

たうとう、その時が來ました。

十月十二日、大島の屬する聯隊は、八宗子東方高
地を占領すべき命を受けました。

第×中隊、百八十餘名は、佐伯大尉の指揮の下に
前進を始めました。敵の方でもそれと知ると、一齊
に射撃を開始して、我軍の進出を止めやうとしま
す。それはもう實に何とも云へない烈しい、悲惨な
戦ひでありました。

勇敢な佐伯大尉の指揮の下に、中隊は申分なく戦
かひました。そして其日の午前四時頃、遂に中隊は
敵前二十米突の所まで、肉薄して行きました。

佐伯大尉は右手に高く指揮刀を挙げ、部下の方を
振りかへつて、最後の突貫を叫ばうとした時でした。
大尉から七八間後に居た大島の眼が異様に輝きや

所を外れて、大尉の右腰に命中したのでした。大尉
はがつくりと前にのめりました。併し直ぐに上體を
起こして、右手に刀を翳し、大聲に突撃を叫び続け
ました。

『まだ駄目だ。もう一發！』

かう思つた大島が、再び銃を取りなほさうとした
瞬間一發の彈が飛んで來て、大島の額を掠めました。
大島は、ぐら／＼と眼まひを感じてどうと其處へ
倒れるなり、後は何も分らなくなつてしまひました。

四

大島が再び氣が附いた時には、自分の身は野戰病
院の、薄いアンペラの上に寝かされて居ました。

頭がすき／＼と烈しく痛んで、到底起上る氣力
もありません。眼を細く開けて、見るともなく天上
の幕を見つめて居ると、ふと、自分の顔に暖かい
息がかかるのを感じました。

『大島。氣が附いたか？……どうだ、氣分は？』

四五

それは中隊長の佐伯大尉でした。大島は眼を大きく見開いて、大尉の顔を見て居ると、昨日の出来事が夢のやうに浮んで來ました。

「大島。傷は浅いんだから、しつかりしろ。お前達の御蔭で我軍は〇〇山を占領する事が出来たんだ。全く、お前達のお蔭だ……。」

この時大島は、苦しいのを無理に起上らうとしました。

「なんだ、どうしたんだ。寝てろ……。起きない方がい。」

大尉はかう云つて止めやうとしましたが、大島は、「中隊長殿。どうか起こして下さい。私は……。」

私は、中隊長殿に申し上げねばならぬ事があるので。と云つて、無理に上體を起こしました。そして大尉の方を見ると、どうでせう。大尉は自分の直ぐ傍に、同じやうにアンペラを敷いて、寝てゐたのです。そして、その右腿には木片を當てがつて、幾重

配しないで、養生して早くよくなれ。許すも許さぬもない。そんな間違ひは戦場では有勝ちの事ぢやないか。」

大尉はかう云つて、何處までも大島の「過失」として、總てを笑ひの裡に濟ませてしまひました。

その翌る日の夜明方、大島は確く大尉の手を握りしめながら、息を引きとりました。

心の中にあるものを、すつかり驅け出してしまつて、大尉の赦しを得た大島は、もう全く安心して、その顔には微笑さへ浮んでゐるのです。

「ありがたうございます。大尉殿。」

大島は死ぬ時まで、かう云ひ續けて居りました。

私はこの話をまだ小さい時、佐川と云ふ軍曹から聞きました。佐川軍曹は話を終つたあとで、私の顔を見ながら、

「どうだ。お前は大島二等卒が好きか、嫌ひか？」

四六
にも細帯が巻かれてありました。大尉は自分の傷も忘れて、從卒の大島と枕を並べ、看護をしてゐて下さつたのでした。

大島はハラ／＼と涙をこぼしました。

「大尉殿。大尉殿……。」と云つた切り、あとの言葉を續ける事が出来なくて、たゞもう子供のやうにオイ／＼と聲をあげて泣きました。

やがて大島は顔を擧げて、泣きじやくりをしながら、昨日の出来事の一切を大尉の前に白狀しました。大尉は大島の手を握りながら、黙つてそれを聞いてゐました。

語り終ると、大尉は聲をあげて笑ひました。

「なんだ、そんな事か。ハ、ハ、ハ。そんな事は何んでもないぢやないか。心配するな。お前だつて俺を殺すつもりで射つたんぢやないだらう？ 敵に向つて射つたのが、誤まつて俺に當つたんだらう。いや、それに違ひない。さうだ、……。そんな事に心

と、訊ねました。

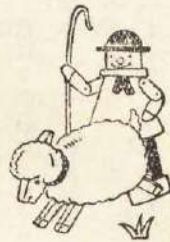
私は、そんな上官を鐵砲で撃つやうな人は、感心しませんでしたから、

「大嫌ひ！」

と、答へました、併し今になつて見ますと、ちつとも嫌ひではないばかりか、かへつて、ある親しさを感じます。

大島が額に傷を負つた時、すぐ其場で息が絶えてしまはないで、あと暫く生きて居たと云ふのは、ほんとにありがたい事でした。その爲に大島は、充分自分の悪い事を後悔する事が出来たのですもの。そんな事を考へると、この世の中には、何かかう神と云はうか、何と云はうか、總ての事を支配する、ある「力」があるのではないでせうか。その「力」が大島に、惡かつた事を後悔する時間を御與へ下さつたのではないでせうか。

(を は り)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

秋の唄

名方 和郎 (大阪)

さらさら
ひやこい
秋の風
おいでと
お月さん
お月さん

ぼつかり
山の上
お餅を
べたんこ
掲ぐ鬼

猫

松井 雅夫 (福岡)

もろこし畑に
ねころんだ
猫はこどもを思ふてる

(仔猫は山に
すてられて
とうと見えなく
なつちやつた)

もろこし畑の
親猫は

ひとりこどもを思ふてる

お月さん

松井 純 (東京)

お月さん病気で
お顔が青い
すいぶんやせた

青い顔のお月さん
お薬あがれ
早くふとれ

ねん／＼ねむの花

河野 砥吉 (京城)

ねんねんねむの花
もうねたか
まだ日は高いに
ねてしもた

日暮時

檀上春之助(和歌山)

すゞきの原の
日ぐれどき
風吹きやすすきの
穂が揺れる

さらさらすゞきの
穂が揺れりや
こんこん狐が
化けて出る

車蜻蛉

西野 紅兒 (岩手)

くるくる車引く
車とんぼ
すゞきの蔭から
車とんぼ

豊年

北野 牧夫 (東京)

ホーホー
今年は
豊年だ
雀も
米蔵
建てたとよ

つばめ

篠原欣次郎 (栃木)

風は吹く吹く南風
二羽のつばめも
みなみかせ
昨日のおひるに
巢をくつたつばめ
今見りやおうちも
半分出来た

秋の風

夕立

潮田 榮 (東京)

夕立夕立
ガツクガク
蛙はお濠で騒いでる

紅殻さんば

石崎 青花 (茨城)

紅殻とんぼの
おしやらくは
草葉の露で
紅といた
紅殻とんぼの
おしやらくは
どこで紅殻
買って来た



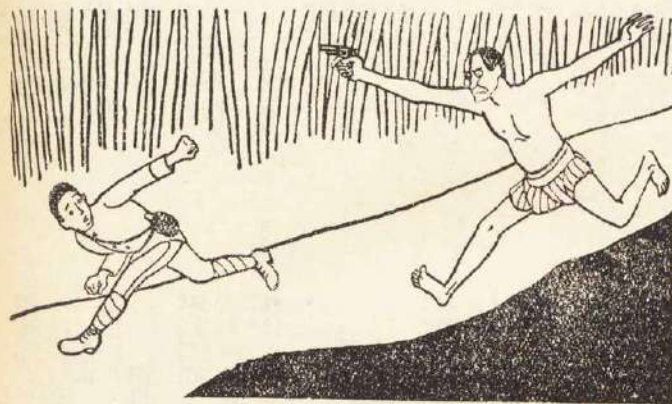
お日さんに
そつともらつて
つけました

小川の橋に
車とんぼ
夕やけ大空
車とんぼ

落木拾ひ

若衣ひろし (廣島)

枯木
枯枝
松の枝
一つでき
一つでき
二つでき
二つでき
かゝえて
山を下る
夕風
小風



てれは追に蕃生

郎 二 政 島 小

ふいに藪の中から、十七八の青年が一人轉るやうに飛び出して来て、顔の色を變へて山を駆け降りて行きました。駆けながらうしろを氣にしているところを見ると、何物にか追はれてゐるに違ひありません。

こゝは恐ろしい生蕃の住む山の中です。麓には、生蕃が生首を取りに降りて来られないやうに、軍隊が番をしてゐました。この青年——名を武夫と云ひますが、東京から學校の休みを幸ひ歸省してゐたので、そんな恐ろしい山とは知らず、鐵砲を持つて獵に登つて、ふいに生蕃に襲はれたのでした。

しかし、武夫は學校でランニングの選手でしたから、見る／＼うちに、生蕃を後の方に殘して駆け抜けました。しかし、まだ全く逃げおぼせたと云ふのではありません。

路は、藪に添つて曲つて、それから廣場になつてゐました。武夫がそこまで来た時、どこか抜道をしたと見えて、道か後に追ひ殘して来たつもりが生蕃の一人が、突然すぐうしろの藪から躍り出しました。瘦せて背の高い瘠惡な顔に、物凄く笑ひを浮べて、『もうめめたものだ。』と云はんばかりに腰にさげたピストルへ手を伸ばしました。

武夫は、さつきふいに襲はれた時、獵銃で防げるだけ防いで、後は逃げるのに重いので銃は棄て、逃げました。しかし、まだ腰には短刀があつたので、突然うしろに生蕃の現れたのを知ると、用心のためにギリギリと引き抜きました。

丁度その時、敵は一二間のうしろまで追ひついて、ズドン！と發砲しました。その瞬間、武夫は透かさず膝と手を突いて踞むと、彈丸は擦れ／＼に頭の上をブスツ！と音を立て、通り過ぎました。次の瞬間、ヒラリと立ち上つた彼は、振り返つて、

大膽にも短刀を揮つて敵に向つて行きましたが、この思ひも寄らぬ攻撃に、生蕃は身を守る暇もなく、忽ち胸を突かれて、『あつ！』と叫んだ儘、バツタリ倒れてしまひました。

武夫はその儘また足を早めて駆け出しましたが、百間も走つたと思ふ頃、今度は彼の方が、『あつ！』と口の中で叫んで立ちどまりました。

二

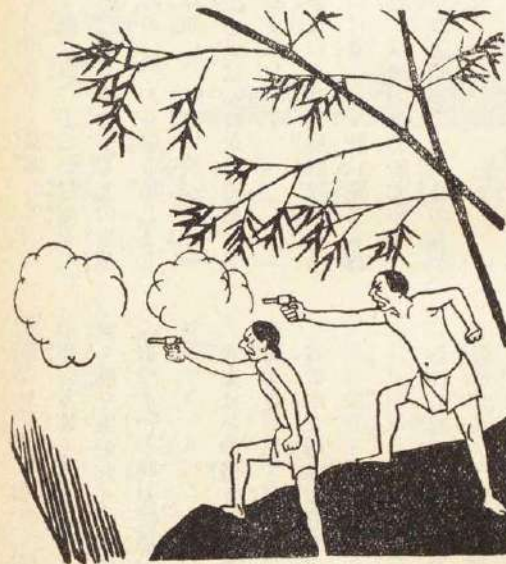
それも無理はありません。

道はだん／＼狭まつて、道幅一尺位しかなくなつて来たのには驚かないとしても、突然見上げるやうな崖で行きどまりになつてゐるのです。

それでは、右か左かへ曲らうと思つても、生憎右も左も切つ斷つたやうな深い谷になつてゐて、どつちへも行けません。しかし本當は、左の谷には葡

荷蔓の橋が架つてゐて、谷一つ越して向うの路に繋
つてゐたのですが、近頃麓に軍隊が見張りをするや
うになつてから、いつ軍隊に襲はれないとも限らな
いと考へたのでせう、生蕃共はズタ／＼に切つて、
路を斷つてしまつたので
した。

やつとこゝまで逃げの
びて来て、やれ助かつた
と思ふ暇もなく、この有
様です。地の理を知らな
かつたばかりに、こんな
行きどまりのところへ自
分で逃げ込んで来たのか
と思ふと、残念でたまり
ませんでした。しかし、
武夫も日本男子です。潔
くこゝで敵を待ち受て、



力の限り戦つて花々しく死んでやらうと決心をし
ました。

さうかうするうちにも、敵はだん／＼近づいて来
ました。二三人づゝ森の中へ分け入つて、手別けを
して武夫の行方を探し廻つ
てゐると見えて、方々で、

「オーイ。」

「オーイ。」と呼び合つてゐ
るのが、シーンとした山の
空氣の中に聞えます。

今や彼等一同は、一つ處
に落ち合はうとしてゐるら
しく、さうやつて呼び合ひ
ながら、路のない藪の中を
こつちへこつちへと、邪魔
になる枝や樹をボキ／＼折
つたり、バツサリ切り落し

たりして近づいて来つゝ
あります。

武夫はキツとなつて、
短刀を堅く握り締めまし
た。

三

その時、突然彼の蒼ざ
めた顔に、喜びの色がさ
しました。

と云ふのは、例の葡萄
蔓の橋の架つてゐた方の
谷の縁に、すく／＼と何
十尺の高さに成長した竹簾がこんもり繁つてゐるの
を見附けたからです。谷の幅を目分量で計つて見る
と、そこはいゝ鹽梅に稍狭くなつてゐて、三十尺位
のものだらうと思はれました。竹の中で一番高いの



も、矢張その位はあるやう
に思はれました。

「よし、この竹を利用して
谷を越して見よう。」呟
武夫は考へ附きました。

「逃げるなら今のうちだ。」
と思つた彼は、急いで竹簾
の所まで駆けて行くと、靴
を脱ぐか早いか、いきなり
スベ／＼と幹にしがみ附
いて猿のやうに昇り始めま
した。

しかし、考へて見ると、
これは随分危険な業に違ひありません。なせと云つ
て、今彼の昇つてゐる竹は高いのですから、どこか
らでも全見えます。ピストルで狙はうと思へば、譯

案の定、生蕃のうち二人までが、青い竹の幹にしがみ附いた武夫の黒い姿を見つけた。『それ!』と云ふと、二人は全速力で竹藪の下へ駆け附けて來ました。彼等は味方の一人が殺されたのを知つて、狂氣のやうに怒つてゐました。しかし、武夫は愚圖々々してはゐませんでした。その時には、もう殆んどテツペン近くまで昇つてゐ



五四
ました。昇るに従つて、竹は、彼の想像通り、向うへ向うへと撓つて、今武夫の體は、一本の糸からブラ下つた蜘蛛のやうに、底の見えない恐ろしい谷の眞上にブラ下つてゐました。それを狙ひ撃ちに、二人の生蕃はピストルを突き出しましたが、やがて、ズドン! と二發續け打ちに發砲しました。したし、武夫の體はタワ〜と上下に揺れながら、少しづつ昇つて行つてゐるので、當りませんでした。そのうちに、全くテツペンまで昇り盡すと、竹は一層撓つて弓形になりました。それを利用して、武夫はわざと自分の力でゴ〜と竹を揺つて置て、その彈動に乗つてパツと手を放しました。すると、見事に一間餘り谷の上を飛んで、武夫の體は向うの路の上に落ちました。



その時、二發目の彈丸がピストルの口を出ましたが、狙ひ違はず彼の左の肩に當つて、デーンと痛みが滲み通りました。が、大した傷ではありませんでした。彼は立ち上がるが早いか、兩手をあげて谷の向うの生蕃をからかひながら、急いで崖の蔭へ隠れてしまひました。丁度その後へ、外の生蕃達も遅れてやつて來て、口惜しさうに何事かを口々に叫んでゐ

五五
四
これで武夫が無事に麓まで歸り着けたと思ふと、間違です。森を出はづれると、また細い、やつと一人通れる位の路になりました。兩側は谷です。すると運悪く又向うから生蕃が一人やつて來ました。一本路ですから、避ける事も出来なければ、隠れる事も出来ません。唯こんな時には、早く相手に氣の附いた方、幾分かの得があるものですが、幸ひ武夫の方が早く氣が附いたらしいのです。彼は咄嗟に或思ひ切つた事を考へつて、いきなり駆け出しました。これには相手も驚いたらしく、どうしていゝのか分らずに立ちどまつてしまひましたが、その暇に近づくが早いか、武夫は跨を狙つてベースボールの通り込みをやつたかと思ふと、うしろへ抜けざまに、短刀を揮つて背中から突き刺しました。それから一時間程の後に、彼は無事に麓まで降りる事が出來ましたが、生蕃に襲はれて助かつた者は實に珍らしい事ださうです。(をほり)



四つの幽霊

三井信衛

（前号までの梗概）

貢一は十三年、前園見家に拾はれた孤児だったが、園見夫妻は既に死に、義理の兄純郎も亦此世を去り、今では下男の宗兵衛と下女との二人暮らしだつた。ところが純郎が死んでから直ぐ、園見家には夜な夜な不思議な幻像が現れた。純郎の姿、園見の主人の姿、さては貢一の生みの父だと名乗る白衣の怪像、其等が次々に現れ、殊に生みの父の亡霊は貢一に向つて「園見の家を去れ」と命じた。不安と恐れに閉ざれた貢一が恩師波多野牧師を訪れると、牧師は只「『ゴーストマン』と謎の言葉を残して去る。『ゴーストマン』とは映畫俳優トオマス高田の主演にかゝる映畫で、それには高田の扮した幽霊が出る。牧師の言葉に暗示をうけた貢一が、その映畫の上映されてゐる活動小屋東洋俱樂部に入ると、映畫に映つた幽霊は、果して園見家に現れる生みの父の幽霊とよく似てゐた。と、突然映畫幕に映つたのは、その幽霊の指紋、即ち俳優高田の指紋の大寫しであつた。

映畫俳優トオマス高田の行方は？
園見の邸に現れる幽霊の正體は？

四、トオマス高田の指紋

1 指紋は萬人同じでない

生みの父だと名乗る、あの怪しい白衣の姿が、どうやら人間の扮装してゐるものらしい——それは疑ふわけには行きません。

いや、映畫の「ゴーストマン」に出て来るトオマス高田の幽霊姿は、どう見てもあの生みの父のそれに似通つてゐる。が、只似通つてゐるといふだけで、この二つが全く同一の人間であるとは、誰が断言出来ませうか？ トオマス高

田が、生みの父の幽霊に違ひない。さうした確かな證據を握らなければ、この出来事には何の目鼻もつかないのです。

「やッ、指紋だ、高田の指紋だ！」スクリーンの上に、惡漢幽霊人の指紋が大寫しに映つたとき、貢一の顔には、俄かにサツと光明が現れました。

指紋！ 指紋！ スクリーンの上に大きく現れたのは、トオマス高田の右の手、五本の指の指紋です。

僥倖とはこのことでした。いや、僥倖といふよりも、今までつい忘れてゐたのです。二年前にもたしかに、この指紋の大寫しがあつたのですから。

大寫しは約三十秒の間、それが

バツと消えるや否や、貢一は大意で、東洋俱樂部を出てしまひました。歩きながらに彼は、一生懸命順序を立て、考へたのでした。

「指紋といふものは、この世界に住んでゐるたくさん人間の、一人々々によつて皆違つてゐるものだ。今、映畫に出たのは、むしろトオマス高田の指紋だ。もしや、あの生みの父の幽霊が、トオマス高田の扮装をしてゐるものとしたら、その幽霊の指紋と、今の映畫の指紋とは、全く同一でなければならぬ筈だ……。」

それは、AがBに等しい場合には、Aの二乗もまたBの二乗に等しい、と言つた數學の定理のやう

に、はつきりとした問題です。

「さうだ！ いや、高田に違ひないといふ、確かな證據を握らなくちゃならない。あの生みの父と名乗る、白衣の怪像の指紋、それを一つしらべてやらう！」貢一の胸は、再び冒險の血に、湧き上つて來たのでした。

が、指紋を檢査するといふことは、大變な苦心です。まさか、目の前の幽霊の手をとつて、それを查べる譯にも行かないし、又注文通り幽霊が出て來るかどうか、それも全く怪しい。警察などでは、犯人の手の觸れた箇所へある薬品を用ひると、そこに指紋が出て來る仕掛があるさうです。けれどもそんな方法が出来るかどうか、そ

れも疑問です。

園見の父、兄の純郎、この二つの煙のやうな不思議な幽霊——それは別として、生みの父と名乗る白衣の怪像の正體は、そも／＼何者でありませうか？ 貢一は如何にして、幽霊の指紋を検査するのでせうか？

2 ベンキ屋へ電話

東洋俱樂部から歸つた貢一は、その次の日も、その又次の日も、一室に閉ぢこもつたまゝ一心に思案を廻らしましたが、一向によい考へも浮びませんでした。

三日目の朝です。不圖貢一は、ドアの邊りを見つめました。見つめてゐた貢一の目が、刻一刻と輝

かしいものになりました。

「うむ、さうだ。失敗したら、又失敗した時のことだ。」

何を思つたか貢一少年、卓上にあつたベルの鉦を、ちいつと押したのでした。又もう一つ、ちいつと押しました。

二つ鉦を押せば、下女のお喜美が來ます。間もなくバタ／＼と廊下に足音がして、靜かにドアを開いたのは、お喜美。

「坊ちやま、お呼びでございました？」

「あ、喜美や、あの新宿の楠原といふベンキ屋を、お前は知つてゐるだらう？」

「はい、存じてをります。」

「序でいゝから電話をかけて、家

の西洋間のドアや家具に、ベンキとラックで塗りかへをしてくれるやうに、言つてくれないかい？」

「承知いたしました。本當に坊ちやんは、いゝところへお氣がおつきになりました。全くこのドアなんか、塗りが禿げて汚うございますよ。」

「電話番号はわかつてるかい。」

「四谷の八百八十九番、八八九と覚えてをります。」

「はゝゝ、ちやあハヤク頼むよ。」

3 塗りかへられた部屋

下女は別に怪しみもしませんでした。いゝや、ドアを塗りかへたからとて、誰が怪しむでせう。

お喜美の電話で、直ぐに園見家

へやつて來たのは、ベンキ屋の楠原です。

「今日は、お塗りかへに上りました。」

「御苦勞様です。えーと、西洋間は、應接室に子供部屋に僕の寢室の三つありますが、ドアにはベン

キを塗つて、家具類には色の濃いたラックを塗つて下さい。」

「承知しました。さしづめドアは、どんな色にいたしませう？」

「さうですね、もう少し濃くしてもらひませう。」

間もなくベンキ屋の手によつて



あの汚なかつたドアも、すつかりと塗りかへられ、さうして家具類には、チョココレト色や緑のピカ／＼と光つたラックが、一つ／＼塗られて行きました。

やがてその日の夕暮、三つの部屋は盡く塗りかへられて、さつき貢一の居た部屋も、ドアから椅子からテーブルから、書棚や窓枠や壁の腰板まで、それ／＼美しい色に塗りかへられて、まるで見違へるやうになりました。さうしてベンキや塗料の匂ひが、ぶん／＼と漂つてゐるのでした。

「出來上りましたね。」貢一はニコ／＼と笑ひながら言ふのです。

「四五日は乾きませんから、御注意を願ひます。殊にベンキを塗つ

たところは、乾きが通うござい
ます。」さう言つて、楠原は歸つて
行きました。

4 白壁にペンキの指紋

初めの日は、貢一自身の寢室で
眠りましたが、幽霊は現れませ
でした。今夜貢一は、この子供部
屋で、夜を過してゐたのでした。
なつかしい子供部屋。今から何
年も前の以前、兄の純郎もまた
貢一もほんの小さかつたころ、こ
こでその日々を楽しく送つた、
なつかしい子供部屋。
ペンキ屋の手で、ドアや窓枠や
壁の腰板は塗りかへられて、方々
に描いてあつた汽車や電車や人形
の落書きも、もうすつかりと消えて

をりました。けれど貢一が、不圖
部屋の隅を眺めると、そこには
思ひ出の多い数々の玩具が、塵に
まみれたまゝ置かれてあつたので
した。

馬やゴムマリや汽車や太鼓……
その一つ一つを手にとつて、貢一
は電燈の下で眺めながら、過ぎ去
つた昔の思ひ出に、ちつと浸つて
をりました。

……と、電燈がバツと消えた。
あつと振り返ると、すうつと音も
なくドアが開いて、よろ／＼よろ
／＼と立つてゐるのは、生みの父
の幽霊でした！
怪しい白衣の怪像は、足音もな
く、いつものやうに壁にびつたり
と手を支へて、一寸か二寸づゝ、

ちり／＼、ちり／＼、と近づいて
來ました。

「……園見の家を去れ……園見の
家を去れ……」

又しても恐ろしいその聲！

「……わが子を思ふ父の心を……
お前は何故信じようとはせぬ？……
お前は呪はれてゐるのぢや……一
時も早く去れ、一時も早く去れ、
園見の家を……」

貢一はわざと、ふる／＼手足を
慄はせて、床の上に伏してをりま
した。いつものやうに幽霊は、園
見を去れの一瞬張、さうして一足
づづそこを去つて、そ／＼とドアか
ら出て行きました。

五分、十分、尙もちつと伏して
ゐた貢一、俄かにサツと起き上つ



たかと思ふと、ドアの外に出て、
電燈のスイッチを捻りました。
煌々と輝く電燈は、邊りの白壁
をあか／＼と照しましたが、その
白壁を眺めた貢一、
「しめたッ！」
と叫んだのでした。おゝ、ドア
から部屋の中程までの一間ほど、
白壁には今の幽霊の指紋が、幾
つも／＼、くつきりとついてゐる
ではありませんか！

5 指紋を寫眞に撮る

いつもあの幽霊は、ドアから壁
の方へ両手をべつたりと觸つて、
蜘蛛の這ふやうに歩いて來ます。
そのドアには、濃い藍色のペンキ
が塗りたてです。いや、ドアばかり



か、その邊の道具類や椅子テエブル、みんな塗りたてです。そこに一寸でも手を觸れたら、べつたりと塗料がつきました。

今、案の定、白い壁にベタリベタリと残つてゐるものは、チョココレット色や濃藍や真紅、色々さまだ。

まな指紋！
拇指もある、人指指もある、さうかと思ふと小指もある。はつきり過ぎる程はつきりした指紋でした。

それを眺めた貢一が、直ぐさま自分の部屋に入つて、つと取り出

して來たのは、コダック會社製プロウニー一號の寫眞機でした。電燈を後に移して、逆光線にならないやうに装置をすると、テエブルの上にその寫眞機を置いて、壁の指紋に向つて、靜かにレンズを向けました。

カチリッ！ シャッターを殆んど明つ放しにすると、貢一は懷中時計を出して、ちつと眺めました。さうして時計の針が七分間過ぎると、カチリッ！ 音も爽やかにシャッターを閉じたのでした。七分間のタイム撮影なのです。

くる／＼とフィルムを巻いて、もう一枚カチリ！ 又もう一枚カチリ！ 寫眞機を懷中深く藏つた貢一は、そのまゝ子供部屋を去つ

たのでした。

残る仕事は、今撮つた寫眞の現像と焼附です。部屋に歸つた貢一は、外部から覺られないやうに押入の中に入つて、紅い現像用の電球をつけました。やがて何時間かの後、フィルムに現れたのは、三枚のどれも／＼、見事な指紋でした。

『よし！ 成功、大成功！』

彼は思はず胸を躍らせたのでした。

6 再び映畫『ゴオストマン』

三つのフィルムは、それぞれ印畫紙に焼附をされて、今貢一のポケットに入つてゐるのは、見事な三枚の指紋寫眞でした。

もう秋も半を過ぎてはゐたが、明る日はまるで春のやうな、靜かな日本晴。その靜かな朝、身仕度を整へた貢一は、指紋寫眞をポケットに入れて、代々木山谷の家を立ち去つたのでした。

行先は言ふまでもなく上野鷺谷の東洋俱樂部です。しかもその日は、丁度開期の最終日。貢一が再び、その活動小屋の前に來たときは、又この間と同じやうに、畫間第一開會の直ぐ後でした。貢一はその中に入りました。

グイオラの音が、一しきり慄へるやうに聞えて、今、目の前のスクリーンに映つてゐるのは、この間と同じ『フランダスの犬』です。やがてそれが終つて、その次

に映された映畫こそ、あの疑問の『ゴオストマン』！ おつと腰かけてゐる貢一の心臓は、制へても／＼、切りに波を打つてをります。映寫機から迸る、青白い一脈の光線、さうしてあのトオマス高田の姿は、そこに再び動き始めました。……第一卷、第二卷、第三卷と早くも進んで、今はもう第八卷の終り、説明者の聲は今や一段と高く、小屋にひびいてゐる。

『……直ぐさま名探偵の木崎は、一臺の自動車にヒラリと乗つて、幽霊人目がけて追跡したのであつた……』

騒がしいオーケストラ、拍手喝采の音、さうして尙も映畫は進んで、幽霊人は警察の手に捕へられ、

その次にバツと現れたのは、この間見たあの字幕。

「あッ！」

と言つた貢一は、直ぐさま懷中から、三枚の指紋寫眞を取り出しました。それを持つ手も、今は細かに懐へを帯びてゐます。

「おッ、映つた！ 映つた！ 幽霊人の手、トオマス高田の手、大さく／＼スクリーンに映つたかと思ふと、そこに残したのは、右手の指の指紋が五つ！」

「あ、指紋だ！」

貢一は、その映畫の指紋と、手に持つてゐた寫眞とを、ちいつと見比べました。途端、思はず貢一は、

「おッ！」

と言つて立ち上つたのでした。

「おッ、映畫の右手五つの指紋、貢一の寫眞の右手五つの指紋、あの指紋この指紋、この指紋あの指紋——一分一厘一毛、どこに違ひがありませんか！」

「トオマス高田だ！ トオマス高田だ！ 幽霊の正體は、トオマス高田だ！」

俄かに立ち上つた貢一は、直ぐさま東洋俱樂部を後にしたのでした。

7 事件は更に一轉化

貢一の努力は、あり／＼と効を奏したのであります。二つの指紋が、かうもピッタリと合ふ以上は、あの生みの父の幽霊は、トオマス

高田が扮装してゐるのだといふ、動かせない證據を掴んだことゝなりました。

トオマス高田、未だに脅として行方の知れないトオマス高田、彼はこの園見の邸に入り込んで、幽霊の役を引き受けてゐるのです。

何者から引き受けたのでせう？ 何のために何者が企てたのでせう？

それはさておき、家に歸つた貢一は、すつかりと疲れてをりました。この上はいよいよ事の真相を查べなければならぬ。……不圖この時、この探索に暗示を與へてくれた、波多野牧師のことを思ひ出し、その人に再び援助を乞ふため、手紙を認めようとしたのでし



た。と同時に又貢一は、非常に咽喉の鳴きをおぼえました。

「ジリ、ジリ、ジリ——貢一はベル

を二つ押したのでした。

「バタ／＼と音がして、ドアを開けたのは下男の宗兵衛。

「呼んだかね？」

「お喜美はゐないの？」

「買物に行つとりますだ。」

「ちやア氣の毒だけど、僕にコオヒイを持て来てくれないかい？」

「へえ、お易い御用だ。持つて来るべ。」

下男がそこを去ると、やがて貢一はペンとインクを取り出して、牧師波多野に宛て、手紙を認めたのでした。

「坊ちゃん、コオヒイを持つて来ただよ。」

その時再びドアが開いて、宗兵衛が入つて來ましたが、貢一はそれに氣がつかずに、尙も手紙を書きつけてゐたのでした。

「手紙を書いてるだね。何處さ出

「すだ？」

「コオヒイを持つたまゝ、宗兵衛は突つ立つてゐます。」

「牧師さんの所へ出すんだよ。あの恐ろしい幽霊のことを、知らせるだよ。」

「お、幽霊のことだね。わつしやあれから後に、たんだの一度、純郎さアの姿を見たアよ。」

「さうかい、へえ……」純郎の幽霊ときいて、貢一は思はず椅子をよせました。

「それがはア、何でも洋服——胸の開いた洋服、何ちふか、あゝ背廣か、その背廣を着て、かういふ恰好に立つて、かういふ風に身を曲げて——」

話好きの宗兵衛、話に夢中にな

つてゐる間に、手に持つてゐたコ

オヒイ碗が、銀のお盆からスルスルと滑つて、あッといふ間もなく

テエブルの上に、カツチャン！コオヒイ碗は粉葉微塵、その序に、側にあつたインク罎までひつくり

返して、罎の口からどす黒いインクが、どゞどゞどゞ、どゞどゞどゞ、とテエブル一面に擴がりました。

「ひやあッ！ 坊ちゃん、これやア、えらい不調法をしただ！」

「あゝ、いゝよ。」びつくりして慌てふためいた宗兵衛は、そゝくさとテエブルの上を拭いて、そのまゝお辭儀をして出て行きましたが、その後で貢一は不圖書簡箋を手にとりました。と、そこに残されてゐるのは、インクで汚れた宗兵衛の手の、指紋

が三つ四つ五つ！

「はゝゝゝ、宗兵衛の指紋か。」

ほんの好奇心から、貢一はあの指紋寫真を取り出して、それと書簡箋とを見比べたのでした。……と、俄かに

「あッ、これはッ！」と叫んだまゝ、よろ／＼よろ／＼、貢一は後退つてしまひました。

宗兵衛の偶然残した今の指紋、それと又昨夜撮つた寫眞の指紋、一分一厘一毛、全く同一ではありませんか！

(次號完結)

意外！意外！事件は思はぬところに擴がつてしまひました。幽霊の指紋はトオマス高田の指紋、それは又下男宗兵衛の指紋。次號には更に三度事件に轉化を生じ、さうして全ての謎は解かれます。

もぐり馬 (推薦)

愛知縣 島本 夫二

山から來た子こもぐり馬

もこの厩へ おもぐりだ

そりやおもぐりだ

七つのお鐘が鳴る頃に

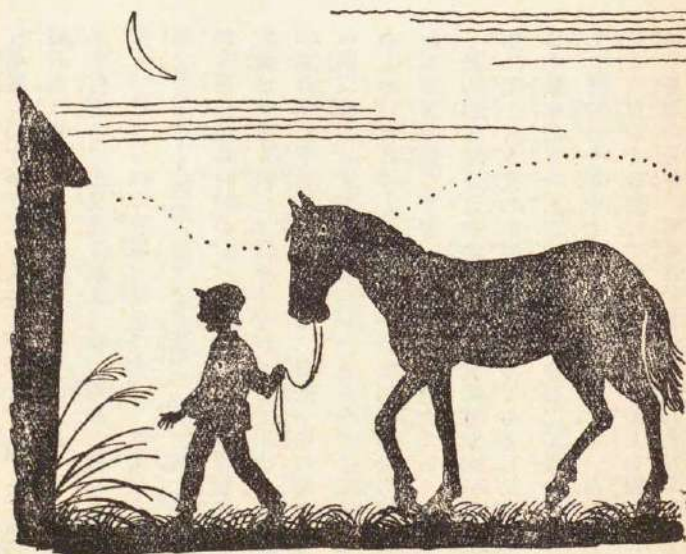
お馬も曳かれて おもぐりだ

そりやおもぐりだ

お馬は厩が戀しいこ

嘶いて厩へ おもぐりだ

そりやおもぐりだ



お雪と重吉

織田小星



六八
朝晩に陽を浴びて、大空の下で赤や紫と、色様な衣に着かえる山の姿、むら／＼と高峯より吐き出す白雲の、山又山を蔽ふてゆく眺め、何れも山國ならでは見られぬ壯麗な景色です。此所はその山里、奥へ／＼と四圍に重なる連峯の、朝は東山の頂から薄桃色に夜が明け、夕は西山の麓より藍色の夜が盆地を黒く包んで行きますが、若しも大空からその暮れゆく下界を見たらば、海底の様に黒ずんだ一隅に砂かとまがふ星屑が一つまみキラ／＼光つてゐるのが目につくでせう。それは何時の世の頃からか人が寄り集つて營む小さな村の燈火であります。ほの白く、そばの花など咲く此の寒村の入口に、彌兵衛と言ふ貧しい鍛冶屋が住んでゐましたが、妻は十数年前に一人の娘と男の子を残して世を去りました。娘は今年十七の名もお雪と言つて、白百合の花より白いその顔に、黒水晶の様な美しい眼ざし、赤い珊瑚の可愛い口唇は、世にも稀な美はしさであ

りました。一つ年下の弟は重吉と言ひまして、物静な性質の上、いつも何か夢見てゐる様な眼ざしをしてゐましたが、生れつき物覚えがよく、頼まれた仕事など年に似合はす何でもよくするので、村の人は我子の様に可愛がつてゐたのです。

ある日のこと、彌兵衛は二十年來坐りつけた仕事場に、まだ夜の明けきらぬ頃からいつもの通り機械の機に腰をおろし、不氣味な音を立てる古いいびきを重吉に押させながら、薄暗い隅に火花を散らせてトンカン／＼と仕事を始めましたが、暫くすると入口にふと人の立ち塞がつた氣わいに手を止めて見あげると、其處にはついぞ見かけた事のない立派な若侍があみ笠深くかぶつて立つてゐますので、彌兵衛あわてゝ立ちあがり、

「ヘエ、いらつしやいまし。何か御用で御座いますか。」と衣紋つくりながら尋ねますと、若侍は奥をじろ／＼見る様子でありましたが、

「イヤ、わしは別段仕事を頼みに参つた者ではない………けれど實は折り入つて別な頼みがあるのじや。彌兵衛一つ聞いてもらへまいか。」と、深あみ笠を取りのける。淺黒い顔の中剃りは綺麗に青々と、眼は鋭くも光つてゐます。

彌兵衛は鍛冶仕事以外の用事と聞き一寸不安な氣持に驅られました。

「ヘエ、別の頼みと仰しやいますと何で御座いますか………此の私に出来ます事なれば何なり御申付けを願度ふ御座います、ヘエ。」

「ウム、左様か、何もむづかしい事柄ではない。實はわしは隣國の國主の次男でな……彌兵衛！……お前の娘お雪と申すを妻に致したいと所望に参つたのじや。」

思ひもかけぬ侍の言葉に驚いた彌兵衛。

「エッ、娘を？……お武家様、外の事ともちがひ、之ばかりは私の一存では参りません。それに鍛冶屋風

情の者の娘を差上げますことは親と致ししても思案致しますので暫く御裕餘を願度う御座います。」

「フム、直ぐは返事が出来ぬと申すか。その渡世は鍛冶であらうと何であらうと、わしが自分の妻として所望致すことであれば差支はない。それにわしは此處にぐす／＼して居られぬ事情があるのじや。あの太陽が東の山から出ぬ間に戻らねばならぬ、……な、彌兵衛、頼む、せひ娘をくれい。」

餘り卒急の難題に彌兵衛は當惑してゐましたが、「お武家様、これほど彌兵衛が申上げる事をお聞き下さらないのですか。常人にも尋ねまする間、少しの御裕餘を願度いと申すので御座います。」と言ふと、武士は少し聲を荒げ、「先刻から申す通りじや。東を見ろ、山の端が赤ふ染められて來た。ぐ／＼して居たら太陽が登るではないか。サ、一刻も待てぬ。直ぐ此の場で返事をして欲しいのだ。」と若侍はしきりに太陽の登

るのを氣にし、氣をいら立たせる様に彌兵衛は不思議に思ひ、

「お武家様、斯様な事を伺ひましてお腹立ちでは困りますが、一體なぜ太陽が東に登りましてはお困りなので御座りますか。」と尋ねると、若侍はガラリと眼を光らせ、

「フン、お前等に言つて聞かせる必要はない。」ときつぱり言ふ。言はれて彌兵衛も少し意地になり、

「その譯をお聞かせ下さらないでは、私も安心して娘を差上げる譯には参りません。成る程彌兵衛は貧乏者で何一つ目ばしい物としては御座いせんが、二人の子供はお金に換えられぬ私の實で御座います。それを差上げますことは私といたしましてもよくよくの事、一切の秘密を打ちあけてお聞かせ下さらないでは、大事な娘を差上げられぬと申すのに無理はないと存じます。」と返答しますと、若侍の顔色は忽ち蒼白となり、眼は金色に輝いて、彌兵衛をハ



ツタと睨めましたが、「エイ、何をつべこべ申す。言へんと言つたら言へないのじや……オ、小鳥が鳴く、陽がのぼる……」と驚き叫びながら立ち上ると見るや、いきなり彌兵衛を蹴倒し、アツと驚くその隙に、やにわに奥へかけ込んで、其處にわな／＼ふるえてゐたお雪を見付け、小掖に抱えたとその儘裏口から、まだ薄暗い外に躍り出ました。

其時不思議や空は急に墨を流した様に暗く、盆地を繞る山々には雷鳴すら轟いて、物凄い嵐となりましたが、若侍とお雪の姿はその中に何處へともなく消えてしまひました。

漸く雲も晴れ、雨もあがつた時、村の人々は彌兵衛の娘が攫はれたと聞き傳へ、天地の異變に恐を抱きながらも集まつて來ましたが、其中の一人が裏口に落ちてゐた大きな帆立貝はともある蛇のうろこを見付け、始めて人々は彼の若侍こそ昔から美しい

娘をさらつて行く。此土地に言ひ傳へられる、北嶺に住む大蛇の化身であつたと氣付いたのです。

彌兵衛は、無二の實と慈しみ育て、來た娘を大蛇にさらはれてから、悲しさの餘りどつと重い病氣になりましたが、重吉が日夜の看護もその甲斐なく、恨みを呑んで妻の住む彼の世へと息引き取つて逝きました。

日頃から孝行な重吉の悲歎は、申すまでもありません。

彼のふいごの音も今は鳴らず、鐵の火花も散らぬ仕事場を眺めては父親を偲び、冷い涙がほろ／＼と頬を傳はつて落ちます。その淋しさの幾日かを送つた重吉の心には、何時か北嶺の大蛇に對する憤怒と復讐の念が焰の様に燃えて來ました。そして決心を決めると只一人身仕度を整へ、姉の行衛を探しに北を指して家を出たのです。

るり色に青く澄み透つた秋の空、樺の枝ではひよ

が鳴いてゐます。

小川にかゝる丸木橋、淺瀬には小さな魚が遊んでゐます。

その景色の全ては、重吉の心に幼い時から深く刻まれた村の紀念であります。が、今北嶺に姉を尋ねて、若しもあの恐ろしい大蛇に命取られれば、もう此の里へは再び戻つては來られないのです。

重吉は固い決心はしてゐるものゝ、又後髪ひかる思ひもして、村のはづれの小さな祠の前に手を合せ、どうか姉に會はせて敵を撃たせて下さいませと祈願をした後、眞一文字に北へ／＼と山を越え谷を渡つて行きましたが、とある山中の池に出て、ホツと其はとりで汗を拭き／＼憩んでゐますと、急に水の中から可愛い聲で重吉の名を呼ぶ者があります。思ひかけぬ山中の人聲に驚いて水面を見れば、白い水藻の花の蔭から、赤い髪した青い目の女が顔を出してゐて、

『重吉さん、あなたが姉さんを救はふと思ふなら、もう一遍村に戻つて、一心になつて刀を一振り造つてゐらつしやい。そして其刀で私の此の赤い髪の一絛が美事に切れたなら、其時あなたは其望を遂げることが出来るのよ。』

と、優しく言つたまふ、水底に沈んでしまひまし

重吉は不思議に思ひましたが、これも神のお告げにちがいないと、そのまゝ再び家に戻つて來て、早速仕事場に行き、父が日頃使つた槌を振りあげ、鐵を眞赤に焼いては力をこめて打ち始めましたが、とう／＼一振りの刀が出来上りました。重吉は嬉しげにそれを持つて、又山を越え谷を渡り、山中の池にやつて來ますと、赤い髪の女は前の様に藻草の中から姿を出して、

『出来たの？ ではこれを切つてごらん。』

と其髪の一絛を白い細い指につまんで水の上に高くかゝげました。

重吉は『何これしきのもの』とは



やる心を押し鎮め、鍊えた一刀引き抜いて、サツと切り付けると、怪しや及はピンとはね返つて切れません。

ハツと思つた重吉は、今度は力を入れてぐいと引くと、意外にも刀の及はボロ／＼にこぼれて鋸の様になりました。

其時水の女は彼を見て、

「重吉さん。あなたは之れに力落しをしてはいけませんよ。あなたは良い刀鍛冶です。けれどあなたに一つ心掛けの足らないものがあります。それは怒と復讐だけの心では決して降魔の刀は鍊えられませんよ。降魔の名剣はあなたの全てを―命も―神に捧げ姉さんばかりでなく、村の人々の難儀をも救ふ覺悟で、一心に鍊えてこそ始めて出来るのです。」と言ふと、そのまゝ水藻の蔭に姿を消してしまひました。

重吉は一時力ぬけた様な面持ちでしたが、水の

女の言葉をよく味ふと深い真理があるので、思ひ直して勇氣を起し、又復村に戻り、身を清め神明に祈願して、一心不亂に新に刀を鍊えましたが、造りあげたものは世に稀な名刀でありました。そこで重吉は謙讓な心を抱きながら、其刀を携へ又々山に登つて前の水の女に會ひましたが、こんどは彼の女は重吉の顔を見たまゝ、

「もう試す筈もないから、早く北嶺にお登りなさい。」

と、言つてくれました。

重吉は心の奥底から湧き上る様な勇氣を感じながら木の根、岩角を踏み越えて高峯峨々と雲を抜く北嶺目指して登るほどに、ある薄暗い岩と岩とに狹まれた谷間に出了ましたが、其時突然奥から瀧の音とも違ひ、遠雷の様な響がゴーツと聞えて來ます。

重吉は其音をば怪みながら、靜に岩間を這つて近づいて見ると、見上げる大餘の斷崖から大木の様な

胴をした大蛇が、首をだらりと下げて水を吸つてゐるのでした。そして先刻遠雷の様に聞えたのは、それが水を吸ひ込む時の響なのです。

重吉は其有様を見てこれこそ北嶺の大蛇に違いない、幾世を人々を悩まし、姉をさらつた天罰を、今自分が代つて加ふ可き時が來たと、神明の加護を祈

りながら、岩を傳ふてする／＼と音なく岩上に登りましたが、大蛇はそれとは露知らず、眞暗な洞窟から半ば外に逼り出した胴に大波を打たせ、身を逆しまに谷底の水を吸つてゐます。

重吉は今ぞとばかり心願かけた一刀ギリリと引き抜いて、



『エーイ』

と古木の様な胴を眞二つに切り下げると、谷にこだまする萬雷の如き吠聲。大蛇の首はギューツと水面を弓の様に離れ空にそり返りましたが、首に集る重心に、切られた體の前半がズルズルと滑つて、ドウと水煙あげて谷川に落ちました。然し其金色に輝く眼と、眞赤な口を開いた前半身

は、再び岸にはひ登らうと暫しが間もがいて居りましたが、瀧の様にほと走る血汐が谷川を紅に染めてゆく程に、次第々々に力おとろえ、何時しか下流に押し流され、激流の中に姿は見えなくなりました。

重吉はそれを見すましてから、いち早く、姉の所在を探しに洞窟に入らうとすると、切られた大蛇の後半身は大木のよぢれる様に、まだのた打ち動いてゐましたが、それを突き刺し、奥に迫つて行くうちに、尻尾のあたりに人が一人仆れてゐるのを見出しました。

重吉は急いで馳せよると、それは疑もなく姉のお雪で有りましたが、大蛇が最後に拂つた尾の一撃にはたかれて、哀れにも息絶えてゐたのです。

浅ましい姉の姿を眺めた重吉は、ふり落つる涙を拭ひながら今は致し方なしと、その屍を負つて洞窟

を外に出ようとし、何時しか空は曇り、地軸も碎ける様な大風雨。

おどろく／＼と鳴る雷の光りも青く物凄く光景でありましたが、其中突然全山ゴーツと揺れると思へば、川下の山は一時に崩れて溪流を塞ぎ、谷は山から瀧と流れ落ちる水に渦巻きかえつて、姉を背負つた重吉の姿も、ちらりと洞窟の入口に見えたまゝ、濁浪の中に消え、見る／＼山腹までの岩も樹も水底に没し、其處には満々たる大きな湖水が出現したのであります。

お雪と重吉の姉弟は、湖水の底に犠牲となつて沈みましたが、其後村には北嶺の大蛇の祟りなく、人は二人の霊を湖畔に祠つて、永く神としてあがめられました。

(をばり)

(一四、九、二)

七六

雨夜の宿直物語

西川 喜平



秋雨のシト／＼と降る晩、城内の宿直部屋に集つた大勢の侍達は、夜長の退屈まぎれに。めい／＼武藝の自慢や、手柄話をして、興じ合つてゐました。その中の、烏丸左衛門と云ふ侍は、平素からの武藝自慢に、家中の侍達は、皆心憎く思つてゐましたが、今日も相かわらず高慢の鼻高々と、手柄話

七七

をしてゐるので、どうかあの男の鼻をへし折つてやりたいものと、口には言はないが、心の中でめいめい言ひ合はせたやうな考へを持つてゐました。
九左衛門は座中を見廻して、



「各々方のお話は、仕合の勝負、争ひの手柄など、片弱い者對手の手業で、餘り感へ出来ぬ。そこで拙者は、それとは異つた、神出鬼没の妖怪、變化を對手にした話をいたさうか。」
と言ひますと、一同はこれは面白からうと、講談や落語を聴く心持ちになつて、

「烏氏の妖怪退治は、定めて勇まし 事であつたらう。後學の爲聞かせて貰ひたい。」と口々に勧めるので、九左衛門は乗り氣になり、勿體らしく咳払いをして、話し出しました。

「エッヘン、今から二十年程も前の事であつた。拙者が武術修行の爲、諸國遍歴の折り、ある土地で、武藝者共の言葉争ひから、妖怪の正體を見現うと、拙者只一人、妖怪の出ると噂のある、古寺の門前を差して参つた。しかもその夜は大雷、大雨、金色の稲妻の目を射る中に馬を進め。」
侍「ハ、ア、馬で行かれたのか。」



九「イカにも、鹿毛なる馬に打ち跨り、かの門前に乗りつけ、用意の札を印として立て置き、歸らんとする後より、何者とも知らず、兜の鎖を引きさつかみ。」

侍「モシ、兜とは甲冑で参られたか。」
九「イヤ、一々うるさい事だ。兜を着るからは鎖に身を固めて参つたは云ふまでもないことだ。」

侍「シテ鎖をつかんだは何者であつたな。」

九「何者とも知れぬが、サテコン妖怪御参なれと、腰なる太刀をスルリと引き抜き。」

侍「美事に腕を切り取られたか。」

九「またしても口を出す。かの妖怪を切らんとするに、拙者の武勇に恐れをなしたか、形は消へて逃げ失せた。」

侍「ヤレ、。」

九「無念ながらも立ち歸つたが、もう一度あのやうな妖怪に出會ひ、拙者の腕前を見せたいと心掛けてゐるのだ。」

侍「烏氏、その門はもしや羅生門とは云はぬか。」
侍「その時には、烏九左衛門の財宝の綱と名乗られたか。」と侍達は、からかひ氣味で言ひ掛けるの

で、九左衛門は腹を立て、眞赤になつて、

『各々方は拙者を嘲弄せらるゝのか。それとも、今の話を作り事とも思はれるのか。』と、目に角を立て、言ひますと、座中の年輩の者は、

侍『イヤ鳥氏、何れも戯談の事じや。誰とて貴殿の武勇を疑ふ者はない。』と宥めました。

その時に、今まで後の方で、ニヤ／＼笑つてゐた、左内と云ふ侍が口を出して、

左鳥氏のお話はイヤもう勇ましいことで、モ一度妖怪に出會ひたいとお言葉は實に感心した。それについて丁度幸の事がある。と云ふのは、この頃城下の町はづれ、靈禪寺の山門へ、夜な／＼怪しき變化の者が現れ、往來の人を惱ますと承つた。どうかお話をかりでなく、實地にお腕前を拜見したいものだ。』

と言ひ出しますと、何か事あれかしと望んでゐた連中は、口を揃へて、

侍『これはお腕前拜見ばかりか、諸人助けの爲にもなる事だ。』と、ワイ／＼言ひますので、九左衛門も今更イヤと云ふ譯にゆかず、

九アハ、ナニこれしきの事、拙者の手を下ろすまでもないことだが、折角の事、これより出向ひて、その變化の者の正體を見届けて參らう。』

左内は、

左變化の者に出合はれぬ時は、貴殿の小柄を門の扉へ刺して置かれてはどうであらう。』

侍達は面白半分に、

侍『それは妙案だ。鳥氏のことから、キツと變化の者の腕でも持つて歸られるであらう。』など、囁し立てられ、九左衛門は流々ながら、上へは大威張りで行きました。

あとで侍達は、

侍『鳥氏、今のお話は眞の事なのか。』

左内は笑ひながら、

左『イヤ嘘だ。』

侍『ナニ嘘、これは驚いた。どうも少し怪いとは思つたが、眞面目な顔色で話されたので、我々まで一杯食つてしまつた。そこで鳥氏これからどうするのだ。鳥氏が無事に歸つて來たなら、一層高慢の鼻を高くして手もつけられまい。何かよいお考へでもあるのか。』

左『イヤそこまで考へない。』

侍『そんな呑氣なことでは困る。このまゝでは彼に手柄話の種を作つてやるやうなものだ、仕方がないから貴殿が變化になつて、山門へ行かれたらよからう。』

左ア、情ない。晝でさへ無氣味なあの寺へ、この夜更けに行かれるものか。誰か代り役はないか、なければ二三人道連れを頼みたい。』

侍『馬鹿なことを云はるゝな。妖怪、變化に名代や道連れがあるものか。元は貴殿の話から起つた事

だ。一人で行かれるのは當り前だ。』

左『それはそうだが、お互に助け合ふのが朋輩の仲だ。日頃親しくするもの、かういふ時の爲ではないか、そんな不人情を云はずに。』

侍『エ、そんな愚痴を云つてる間に、鳥氏が行つては大變だ。サア／＼支度々々。』と、大勢で無理やりに、左内に變化の支度をさせました。

二

靈禪寺と云ふのは、城下の町はづれにあつて、山門の左右は深い森で、晝ももうす暗い物凄場所でありました。

降りつゞいた雨は、風さへ加はつて、森の木立を揺る音は、ゴ／＼と怪物の唸るやうで、山門の家根を掠める音は、ヒュー／＼と變化の叫ぶ聲かとも聞えました。

こゝへ、ビタ／＼と急ぎ足で來たのは、白い衣に

黒い髪を振り亂し、磐若の面をつけた左内でありました。

「ヤレ／＼とんだ事になった。口は禍の門とはよく云つたものだ。と云つて今更仕方もない。なんだか山門の軒下から、何か出て来さうで氣味が悪い。もし出たら逃げ出すまでだが、かう膝頭がグツ／＼しては走れまい。」

と、慄へながら山門の石段を上つて、向ふを見ると、臙げに人影らしいのが見えるので、

「イヨ／＼彼奴が来たらしい。こんな時は人間が来ると氣強くなる、……やつて来たらだしぬけに、飛び出して驚かしてやらう。」と、太い柱の蔭へ身を隠して待つてゐました。

森の木立の下を陣笠、陣羽織、野袴の勇ましい行装で、首を縮め、小さくなつて、トボ／＼歩いて来たのは九左衛門でありました。

「ア、どうか今夜はこんな雨風だから、變化の者も

休んでくれるといふが、こんな晩こそあいつらの出るには都合がいいのだらう。出てもこの鬼の面を見て、向ふから逃げてくれるといふがな。」と、呟きながら山門の前へ来ました。

九左衛門は山門を見上げて、

「まるで大きな悪魔が立つてゐるやうだ。」と、齒の根も合はぬ慄へ聲で、

「はやく扉へ小柄を刺して、何も出ない中に逃げ出さう。」と、あたりを見廻しながら、怖／＼石段を上つて来ました。

左内は、石段を上つて来た者は、テツキリ九左衛門と、柱の蔭から、

「ウワ／＼」と、變な聲を出しながら、陣笠の中を覗き込と、九左衛門と思ひの外、恐ろしい鬼の顔に、
「ワッ」と、聲を上げて飛び上ると、九左衛門は、思ひもよらぬ柱の蔭から、黒い髪を振り亂した磐若が、だしぬけに飛び出したので、

「アッ。」と、聲を立てて、鬼も磐若も、一絡に石段をコロ／＼と轉げ落ちました



た。やがて、雨も止み、風も風いで、雲間から洩れ出た月の光りの下に、鬼と磐若が、氣を失つて倒れてゐるのが見へました。

そこへ大勢の侍が、手に／＼提灯を持つて、ドヤ／＼来ました。二人を見つ、驚いて介抱したので、

やうやく息を吹き返しました。正氣に返つた二人は、顔を見合せて頭をかきながら、鬼と磐若の面を、めい／＼懐へソツト入れたので、大勢はドツト大笑ひに笑ひました。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

雨の上つた朝(賞)

東京 日向 桃子

雨の上つた朝は

なんでもゆれてる

水たまりもゆれてる

木もゆれてる

草もゆれてる

螢(賞)

横須賀市 高野 英二

螢の提灯

ビイカビイカ

五六度まはつて

夜が明けた

石屋の店先

甲府市 丸茂 五郎

石屋の店先

大地蔵小地蔵

大地蔵手を上げ

小地蔵はねむる

雲

茨城県 柴 三郎

白いくもと

青いくも

白い雲が

にげてつた

あをいくもが

みてゐた

しやぼん玉

東京 本岡 正雄

しやぼん玉の

よつばらひ

ふわり／＼

とんでつて

電信柱に

ぶつかつた

子ねこ

神奈川県 松村 美好

子ねこの首を

八四

かざらうと

あかいはんけち

まいたらば

小さな手々で

はんけちを

いちくり／＼

かんがへる

雨の日

福岡縣 松井 克巳

お山を見たらお山は

雲のぼうしを

かぶつてゐた

金の雨

奈良市 杉山 なを

金の雨銀の雨

種市に行く時

岩手縣 川村 花子

私が種市に行く時

私の可愛いアヒルさんが

行かないでちやうだいと

啼きました

夜中

横須賀市 野田 吉雄

真夜中

おかねが

なりました

山ちや鳥が

ねっします

里ちや

坊やが夢見ます

八五

雨

秋田縣 岩谷 貞三

雨だれとんとん

雨ざんざ

雀のおうちは雨もりだ

もぐらのトンネル大水だ

心

宇治山田市 中西榮之助

すこしの事で

悲しむ

笑ふ

何ておかしい

私の心

たほれた木

群馬縣 姉崎 忠重

起きたい起きたい

たほれた木



風荒む満洲の夜に

齋藤 佐次郎



〔前號の梗概〕
満洲、第一の馬賊を捕へるために行つた日本の探偵は、却つて馬賊の計略に落ちて、森の中の百姓家に泊ることになりました。勿論そこは馬賊の巢です。二階に案内されて、い

よいよ終つたやうでしたが、どうしても眠れないので、起き上ると、既に隣の部屋では、馬賊どもが手に手に武器を持つて、騒いかにうとしてゐるのでした。

私の決心はつきました。私は逃げ出さうと考へました。しかし、どうしたら、それが出来るのでせうか。

部屋の中を見廻してゐる内に、片隅に長い縄があるのが眼につきました。これは巧い！と思つてゐる内に、いゝ考へが浮びました。

私はその縄を壁の太い釘に結びつけたのです。それから音を立てないやうに窓を開けて、縄を外へ投げました。私は、縄につかまつて、降りる用意をはじめたのです。

その時でした。月の光でも、扉のハンドルがカタリと音を立て、一寸ほど開いたのが見えました。いよゝ時が来たのです。

ボン！ ボン！ ボン！
三發、私はビストルを放ちました。さうして置いて、すぐに縄につかまつて降りはじめました。苦しうな、うめき聲が聞えました。私の弾丸は

無駄でなかつたことが分りました。しかし、私の喜びはながくは續きませんでした。

下を見ると、一匹の物凄い蒙古犬が、私をめぐけて、今にも喰ひつきさうにして、火のつくやうに吠えてゐるのです。が、どうしても、犬の頭の上に飛び降りなければならぬことを思ふと、全くぞつとしてしまひました。そこで、止むなく私は、犬を目がけて發砲しました。

私の最初に打つた丸は外れましたが、二發目は、かすり傷位は負はせたと見えて、犬は一層猛り狂つて、ますます猛烈になつて來ました。しかし、間が悪くも、その時、縄がぶつつりと切れて、七八尺もの高さから、私はどたり！と地面に落ちたのです。それが丁度、犬の顎のところだったのでした。犬は忽ち私に躍りかかりました。

その瞬間でした。上から一撃射撃をうけました。少くも六發位は私の耳もとをかすめて飛びましたが、

幸にも一發も命中しないで、皆な地面に落ちてしまひました。ところが、一層仕合せなことには、その一撃射撃によつて、私の一命が助かつたのです。かういつては妙に聞えますが、その中の一發が、犬の脳天に美事命中したと見えて、ばつたり倒れて死んでしまつたのです。

これは全く天祐といふ外ありません。しかし、私はまだ安全ではなかつたのです。愚圖々々してゐられる時ではなかつたのです。上でがや／＼騒いでゐるではありませんか。

私は犬の死骸を飛び越えて、それから最後の彈丸を、二階の窓をめがけて放ちました。と、忽ち、例の素摸取りのやうな百姓が、顔へ手を當てたやうでしたが、それが見てる間に、顔中一ぱいの血になつてしまひました。——私は勇氣が出ました。足にも力が出ました。私は無中で、方角もわからずに逃げ出しました。

間もなく、高い土塀のところへ出ました。これが普通の時でしたら、恐らく私は、それを越える事が出来なかつたでせう。それ程高い土塀でしたが、さういふ時には不思議な力が出るもので、それも難なく飛び越えることが出来ました。

鋭いライフル銃の音が、静かな夜の空氣をふるはせて響きました。と思つた瞬間！私のかぶつてゐた帽子がボンと飛んで、頭の上を何かどかすつて通つたやうに覺えました。やられたな！と思ひましたが、それを調べてゐる間がありません。土塀の向う側に飛び降りるが早いか、私は一さんに逃げました。さうしながらも、私はピストルに丸をこめることを忘れませんでした。

それから五分位経つたと思ふころ、私は立ち止つて息をつきました。そして、振り返つて、樹立ちの後ろになつて見える例の百姓家の方を眺めました。百姓家は、もう今では三四丁も後ろの方になつて



ゐますが、でも、月の光に照らされて、はつきりと見ることが出来ました。全く静かな夜でした。それ

だけに何かの物音が、手に取るやうに聞えました。私を追つて来るらしい聲音！それを私は、ちつと聞き耳を立て、聴かなければなりません。と、犬のハア／＼いふ息づかひと、とつとと駆けて来る人の聲音とは、いよく明らかになつて来ました。そして、間もなく、三人の男と二匹の逞しい蒙古犬の姿が眼の先きに現れたのです。男達は、犬に向つて、私を追ひかけさせようと、切りにけしかけてゐます。

再び私は駆け出しました。しかし、遠く行かない内に、穴に落ちこんで、足先きを挫いてしまひました。

私はがっかりして、齒を喰ひしりながら、あたりを見廻しました。犬は、もう一丁もない位近く迫つて来てゐます。しかも、口から大きな舌を垂れて、息せき切つて駆けて来るのですから、忽ち私のところまで来るでせう。あゝ残念だ！と思ひながら、

もう一度見廻した時に、ふと一筋の光明が私の心に浮びました。
私から一間と離れないところに、大きな樅の樹が立つてゐました。私は非常な困難をして、その樅の樹の幹を傳つて、葉の茂みの中へ身體をかくしたのです。それから、私の二挺のピストルでもつて、決死の奮闘を試みる用意をしました。



幸なことに、樹の葉が繁つてゐる爲めに、悪漢どもは私のピストルの届くところまで来なければ、私を射つことが出来ないでした。おまけに、こゝにかうやつてゐれば、犬に襲はれることだけは免れるので、その安心も一つはありました。さて、蒙古犬どもは、最早樹の根元まで来て、猛烈な勢で樹の中の私をめぐめて吠えはじめました。しかし、私は彼等に構つてはゐられませんが、私の相手は彼等の飼主なのですから。
間もなく、悪漢どもは、私に撃たれるのが恐ろしくて、樹から樹へ身をかくしながら、次第に迫つて来ました。先づ私の眼に映じたのは百姓

家の主人でした。彼は血に染つた縞帯で頭を巻いてゐました。次に、私が捕へた例の泥棒も、今はすつかり男の服装をして手にピストルを持ってゐました。それから、百姓の息子も一人ゐました。しかし、もう一人の息子の姿は見えませんでした。(それは私に打たれて死んだのだといふことを後で知りました。)



は、私に向つて發砲をはじめました。でも、有難いことには、樹の葉が深く繁つてゐるために、どれも私に當らずに飛んで行きました。そこで、私の方でも、彼等の頭が見える度に發砲しましたが、これも彼等と同様當りませんでした。遂に、彼等の一人、それは私が捕へた例の泥棒ですが、その打つた丸が、私の足を打貫きました。私は怒と苦痛とで、半ば氣狂ひのやうになつて、必ず仕返しをしてやるぞと決心しました。
間もなく、その機會は來ました。私を打つた彼は、ピストルに丸をこめるために、隠れてゐる樹から身體の側面を出したので、こゝぞと

ばかり、一發！ 彼を目がけて發砲しました。
美事、命中しました。彼は叫び聲を擧げて、横腹
に手を當てましたが、見る間に血は指の間からほど
ばり出しました。

そこで彼は、樹の蔭から靜かに離れて、大膽にも
私のかくれてゐる樹の幹のところへと歩いて來まし
た。われ／＼の眼と眼が出遇ひました。私はまたも、
彼に向つて發砲しましたが、それは當りませんでした。
た。

と、彼の方でも、私に睨みを定めて、今にも打ち
出さうとしてゐますが、打たれた傷のために、足が
定らないやうに身體が動いてゐました。

『畜生！ 貴様にと／＼一萬圓の懸賞を取られてし
まふのか。俺は貴様の探してゐる張天鬼なのだ。だ
が、貴様に、その金が入るまで生しては置かないぞ。』
彼は呪はしげに絶叫したのでした。
彼は如何にも口惜しさうに唇をふるはせなが

ら、引金を引かうとしました。しかし、それが出來
ない内に、ふら／＼とよろめいて、倒れてしまひま
した。

彼はそのまま死んでしまつたのでした。

これと殆ど同時でした。向ふの森から突然に續け
ざまに鐵砲の音がしました。不思議に思つて見てゐ
る内に、私を追つて來た百姓と息子が一散に逃げ出
しました。

その筈です。森から現れたのは、馬に乗つた支那
兵の一隊でした。

二人の惡漢は、勿論、捕縛されてしまひました。

× × × × ×

これで、私の冒險談も一段落となりましたから、
この位のところでお話を終へることにしませう。捕
へられた二人の惡漢がどうなつたかといふのです

か。彼等は勿論馬賊で、さん／＼悪い事をしてゐた
のですから、裁判の上で、死刑にされてしまひまし

ました。

それ以來、私の名聲は大に擧りまして、相手が大



た。

それから、例の懸賞金の一萬圓の問題ですが、そ
れは勿論私の手に入りました。しかし、私が一命の
助かつたに就ては、支那兵士の一隊の援助が大にあ
りますので、半分の五千圓をその時の兵士達に分け

人から惡魔のやうに恐れられてゐた張天鬼だけに、
満洲では誰知らぬ者もない位になりました。

そして、その後にも、幾度か身を捨てるやうな冒
険をやりましたが、そのお話は、またよい機會にい
たしませう。

(をばり)



幼年詩

若山牧水選

くさ(賞)

福岡縣下妻校尋四 右田マツキ

おしようさんが
草をとつてゐる
ひの木のかげを
とつてゐる。

評、静かない、寫生です。(牧水)

雨(賞)

甲府市 丸茂 五郎

どしや降りだ

どしや降りだ
水つたまりへ
穴があく。

評、元氣のいい、調子のいい歌です。(牧水)

無花果(賞)

日本女子大學 附屬女學校一 中島 泰子

無花果、無花果

口あけろ

口あけろ

評、これも調子がよい。そしてたいへんに面白い。(牧水)

お日さん

福岡縣下妻校尋 下川ミサヲ

たんばに
うつてゐなさる

恩を返す盗人(推薦)

田賀かずを



九四

昔、丹後の國に善衛門といふ武士がいました。大層、憐れな深い人で、近所の人は「佛の善衛門」と言つてゐました。或る夜この善衛門の家に盗人が入りました。家の人々は大騒ぎをして家中を探し廻りましたが、何處にも見當りませんでした。「物置だ。物置だ。」誰かかう言つたので、善衛門は真先に灯を持つてとび込みました。その瞬間、善衛門は高く積まれた薪の間にチラリと人の着物らしいものを見かけましたが、わざと見えないふりをして他の所を探させました。家の人々は恐る／＼探してゐましたが、いくら探しても見付かる筈がありません。盗人は逃げてしまつたらしいから、皆の者は引上げて寝んだがよからう。」善衛門がかう言ひますと、皆喜んで自分達の部屋に歸つて行きました。

人々の歸つたのを見届けてから、善衛門は再び物置に入つて來ました。盗人はブル／＼震へて善衛門の前頭を下げてゐます。善衛門は氣の毒になりました。「いづれお前も食ふに困つて盗みに入つたのであらうが、言ふ迄もなく盗みをするのは悪いことだ。幸に私に見付かつたからよいやうなもの、他の人に見付かつたら今頃はどうなつてゐるかわかつたものではない。以後は決してこんな事をしてはならないよ。」善衛門は親切にかう言つて、ソツと盗人を逃してやりました。

二

それから二年の月日が経ちました。善衛門に助けて貰つた盗人は、その後も屢々盗みに入らうとしましたが、其度毎に善衛門の言葉を思ひだしては思ひ止まりました。「俺もかうして遊んで居ては悪いことを考へるばかりだ。これ以上悪いことをしては、あの旦那に濟まねえ。何とかして俺も立派になつて旦那に恩返しをしよう。」それから盗人は名も善助と改めて、京都の或る呉服店に奉公しました。その後の善助は全く生れ變つた別人のやうになつて働きました。そうして居るうちに思ひがけない不幸が善助の身の上によつて來ました。とい

お目さん
内へつれていつて
遊びたい。

評、何といふ大きな、そして美しい優し
い想像でせう。(牧水)

あふひ

栃木縣 船越 厚
日光町

あふひの花は
しやせいすると
まづい花だ
はつばもまづい。

評、實にさつぱりしてゐて男らしい。か
んなの、中に自然な調子が含まれてゐ
ます。(牧水)

しづかな海

北海道 佐藤 錠二
釧路村

白帆をかけた舟が
走つて居るよ。
舟のかげが
波もない海の面に
うつつてゐるよ。

評、景色も静か。歌の調子も静か。(牧水)

魚

京 河野正三郎
草町 (十三)

きたない
泥の中に
魚が居た
もうにがさないと
つかんだら
指の間から
にげちやつた。
評、魚がうなひました。指の間には泥ば

ふのは、京都でも一二と言はれて居たその呉服屋も、店の金をスツカリ
番頭に費ひこまれて、立派な家までも人手に渡らうとしてゐたのです。
このことを知つた他の雇人達は、一人去り二人去りして、残る者は善
助一人になりました。

或る夜、主人は薄暗い灯のもとに善助を呼んで言ひました。

「善助や、これまでお前はほんとに一心になつてよく店のために働いて
くれた。誰でもお前のことを賞めないものは無かつた。わしも店の若い
もの等にお前を手本にして働くやうに言ひきかせて來たのだ。そしてゆ
く／＼は店もお前にやつて貰はうと思つてゐた程だ。然し、わしの一寸
した不注意から、お前も知つての通り、あの番頭に何も彼も費はれて
しまつて、今では家屋敷まで他人の物になりそうな有様になつた。店の
者は何時とも無しに逃げてしまふし、親戚も今では寄り付かうともしな
いし……。前通りに親切にしてくれるのはお前ばかりになつた。然し今
となつてみると、將來に望みのあるお前を、何時までもこの家に止めて
置くことも出来ない。どうか他の所に行つて立派に身を立て、おくれ。
わしは蔭ながらお前の成功を祈つてゐるぞ。そしてわしが死んだと聞い
た時には涙の一つも落しておくれ。それでわしは本望だ。」
かう言つた主人の目からは雨のやうに涙がこぼれました。



「旦那、この私をそれ程までに思つて下さるかと思ふと、私は嬉しくて
なりません。今迄誰にも話してませんが、私は元は盗人もやりまし
た。それが或る夜、村でも「佛の善衛門」と言はれてゐる程慈悲深い土
の家に盗みに入りました。ところが
神様の罰があたつてか、運悪く家の
人に見付けられて、危ふく捕まらう
としたところを、その家の主人の情
で助けて貰ひました。それからとい
ふものは、悪いことをしようとする
時には其の主人の言葉が思ひ出され
て、その度に思ひ止りました。その
時から、死んだつもりでウンと働い
てみようと思つて京都に出て來たと
ころを、拾つて下さつたのが旦那で
す。その恩のある旦那をすて、どう
して私一人で出られませう。旦那、
委せて下さる譯にはゆきませんか。
いれます。」

かり、河野の正ちやん混なめろ。(牧水)

雨

福岡縣下
妻校尋四
吉田シツカ

つぶの太い雨

音まで大きい。

みどり

東京芝
區榮町
深野小太郎

草も木も

みどり色です

僕の服も

みどりです。

かげ

京校若
草町
河野
(九)浩

草の上に

松のかげが

いつぱい

うつつてゐる。

にわか雨

東京本
郷元町
中坂石次郎

どしや降りになつた

今行つた魚屋

こまつたろ。

おしろい

水戸市
科崎
久米 百代

おしろいつけた人

指ひにまで

おしろいが

ついてゐた。

善助も泣いて主人を慰めました。

三

善助の必死の努力で、間もなくその店は前にも増して立派になりました。以前の雇人達も二人三人と歸つて来て店は益々繁昌しました。善助は、今はその店の番頭になつて、店の人を指圖して熱心に商賣にはげんでゐましたが、心の中には決して善衛門のことを忘れませんでした。丁度その頃、善衛門はツトしたことから、惡土のために殿様の御側を遠ざけられて、碌を離れてゐたので非常に貧乏をしてゐました。仕方なしに近所の子供等の手習ひの師匠をして、漸くその日を過してゐましたが、家を見る影もなく傾き、壁は落ちて、垣の外から家の中が見られる程に朽ちはてゐました。

雨の日は疊の上に雨だれが落ち、月の夜には屋根を通して月の光がさしこむ程でした。

かうした貧しい中にあつても、善衛門は少しも不平を言はないで、乞食などが来ると、無一中から一錢二錢と施してやりました。

そうして居るうちに冬は日毎に近づいて来て、善衛門は飢と寒さとのために益々衰へてゆきました。

或る静かな晩でした。善衛門は屋根からさし入る月を眺めて、獨り過

ぎし日の事を考へて、せめてものなぐさめにして居た時、ホト／＼と戸をたたく音が耳に入りました。

「バテ、今頃客人とは誰かしら？」

立ち上つて戸を開けてみると、大きな荷物を背負つた一人の男が立つてゐました。

「善衛門様といふはこちら様で？」

「ア、わしが善衛門ぢやが。して御用は何かな……」

「ヘエ、實は京師から来たものです

が、御宅様へこれを届けろといふ

ことで持つて参りましたのです。」

かう言つて、大きな包を疊に下

しました。

「ア、コレ／＼。何か家達ひではないか。この家では、とても斯様な品を注文いたす程の身分ではないが？」

「イエー。たしかにこちら様でございすだ。何でも其の中に手紙が



姉さん

山梨縣増穂校尋六 矢崎 長三

姉さんと呼んだら

風呂場の方で

母さんがへんじをした。

草

山梨縣横澤校尋三 三浦 佐市

小さな草が

雪の上に

顔を出した。

うらの方で

すゝめが鳴いた。

風

福岡縣下妻校尋四 西村 ハツセ

大きい風は

大きくふいてくる

小さい風は

ちいさく

まじつて

ふいてくる。

電 燈

廣島縣御手洗校高一 進藤 元夫

電燈がついた

家が明るく

なつた

町も明るく

なつた。

入つてゐるとか言つて居りました。……デハこれで御免蒙りますよ。」かう言つて其の男はサツサと歸つてゆきました。

善衛門は暫くは何が何やらサツバリわかりませんでした。やがてその包を開いてみました。

ところがどうでせう。包を解くと中には立派なつうらがあつて、つうらの中には暖かさうな、やはらかい綿の入つた立派な着物と、お金か五十兩と入つてゐました。

善衛門の驚きは如何ばかりでしたらう。尙もよく探してみますと、つづらの底に一通の手紙が入つてゐて、それには次のやうに書てありまして。

『突然此のやうなものを持ち込みまして、さぞかしお驚きでございませう。此の品をお送りいたしました私は、名もない一人の商人でございませう。あなたが、あなた様には満更御縁のない者ではございませう。いや、御縁が無いどころか、大變深い御縁のあるものでございませう。もつと詳しく申上ませう。私こそは何時かの年、あなた様の御家に盗みに入つて、あなた様に助けていたゞいた者でございませう。あれから後は悪い事をしようと思ふと、あの時のあなた様の御言葉が思ひだされて、どうしても手が出ませんでした。私は、一つ、死んだ氣になつて力一

ばい働いてみようと思つて、京都に出ました。

幸にも今の店の主人に拾はれて、今では店の大番頭をつとめる身になりました。これも元はと言へばあなた様のお蔭です。どうにかして御恩の少しなりとも返さうと、日頃そのことのみ考へて來ました。

ところが先日、あなた様が大層お困りとのことを人づてに聞きましたので、甚だ失禮ではございましたが、せめてもの恩返しにもと思ひまして、この品を御送りいたしました次第でございませう。お服にかゝつてお禮を申し上げたいとは思ひましたが、私が行つてはとも品物をお納めいたゞけないと思つて、心ならずも使ひに持たせてやりました。どうぞ笑つてお納め下さいませ。そして私が善人に立ち歸つたことをお喜び下さいませ。では、これで失禮いたします。』

この手紙を読み終つた善衛門は、涙を流して喜びました。

誰言ふとなく、此の話しが殿様の御耳に達して、善衛門は再びお側に御奉公するやうになりました。そして『佛の善衛門』の名は、その國中に廣がりました。

(をばり)

曲馬で見ながら

若山牧水

秋祭で

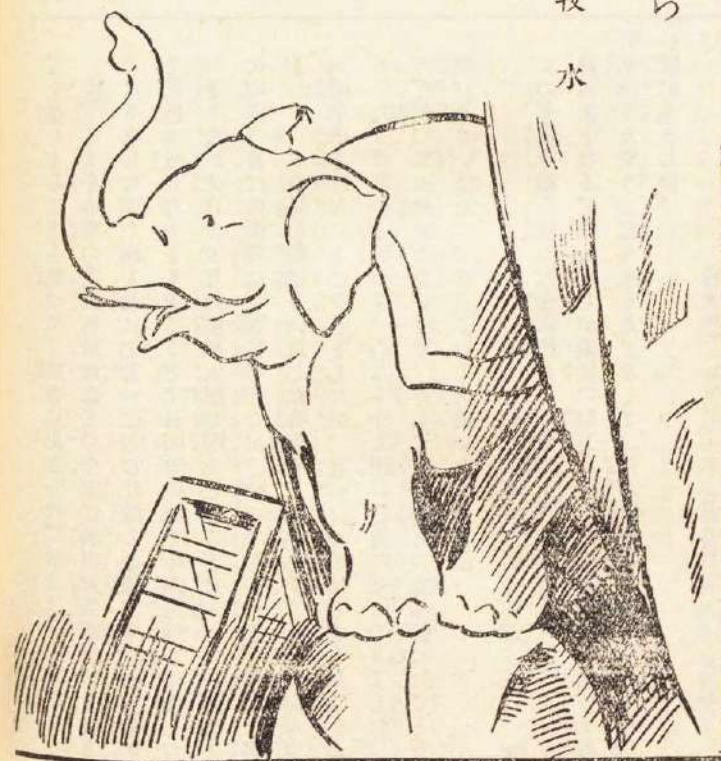
この田舎町に

曲馬團が来ました

馬が多勢あります

象がります

虎がります



獅子がります

獅子は三疋もります

そしてみんなが面白く藝をして

見せてくれます

こんな大きな恐しい獣たち

ほんごうの森の中で

斯んなに仲よく遊べたら

どんなにいいだらう

わたしは思ひました





討たぬ敵

三島霜川

「もう、大丈夫だよ。もう、大丈夫だよ。こゝに弱むでゐれア、いくら焼けて来たッて、死にはしないよ。」

出目助さんは、さう云ッて、お姫様を、本陣の前の井川へ引すり込むやうにしました。そして、

「しッかりするのだよ。さア、しッかりして下さいよ。何アに、おいらが、きツと、國の殿様の許まで送ッて行くよ。跋でも、ごんの奴ア、強いんだよ。それに質が好いからネ。お江戸へでも、長崎の方へでも、何處までも乗せて行ッてあげるよ。」

言葉が少し、ぞんざいでしたが、

出目助さんの言葉には、優しい親切が溢れてゐました。

その時また、ぐわら／＼と音がして、軽い地響がしました。出目助さんは、びつくりして振向いて見ると、それは玄關先の屋根の瓦が崩れて落ちたのでした。

「危なかつた／＼。」——もう一と足遅かつたら、お姫様も自分も、

あの瓦に押潰されたのだと思ッて出目助さんは、ぞツと、身慄をしました。それほどに、出目助さんは、氣が、しッかりしてゐました。

「何うしよう。何うしよう。疾く……はやく、逃げぬのかえ。」

お姫様はまるで、大熱にでも、浮かされてゐる人のやうに、さう云ひました。それが、まツたく、無我無中でした。そして、出目助さんに獅噛みついては、「苦しいッ……熱い！」と、泣き叫ぶのでした。

これには、出目助さんも、困ッて了ひました。いくら泣かれても、叫ばれても、どうすることも出来ません。自分も、焙られてゐるやうに熱いの、煙が、目、口、鼻

へ捻込むで来て、今にも、息が塞りさうでした。それで、破簾を流れにつけては、お姫様にかぶせ、自分もかぶツて、火の紛を防ぎながら、時々、流れに顔を浸けて、苦しい息をついで居りました。お姫様は、氣の抜けたやうになツて、只、ヒイ、ヒイ、泣きつづけました。

もう出目助さんが駆込むで来た方へも火が廻ッて、その通路も塞がッて了ひました。

「どツちへ逃げようか。」

出目助さんは、何處かに、潜り抜けて行くだけの、火の手の薄いところがないかと、痛い目をこすッては、何ン度となく、そこらを見廻しました。

けれども、前も火、後も火、四方八方、火に取巻かれて、二人は、まるで、火燄地獄のなかへ落ち込むだやうになツてゐました。もし、井川の流れが無かつたら、二人は、疾うに、息が塞がッて死んで了つたでしよう。幸にも——と筋の井川——それは、膝までしかない浅い流れでしたが、二人に取ッては、命の綱でした。

「熱い……苦しい！」

お姫様は、息も絶々になツて、何ン度となく、出目助さんに獅噛みつきました。

「我慢をなさるのだよ。この火だからネ。どツちへも逃げられないよ。こゝに、かうして居りア大丈夫、焼死はしないよ。爲方がな

いよ。我慢して下さいよ。」

出目助さんは、頼むやうに、さう云って、お姫様を落ちつかせようとしました。火の紛が、バラバラ、バラ／＼落ちて来て、つぶ濡にした破蓆が、すぐに湯にでも浸けたやうに熱くなりました。それを熱くないやうにと、流れに浸けては、手ばし／＼お姫様にかぶせるだけでも、出目助さんの骨折は大變でした。

するうちに、本陣の棟木が、どツと焼落ちて、そこが、噴火したやうに、恐ろしい火焔が渦巻きました。と思ふと、百萬の惡魔が、ぐわツと吼立てるやうに吹起つた旋風。その旋風に、火焔が大きな柱のやうになつて、くる／＼くる

ツと、空に巻上がりました。

「あッ。」

出目助さんは魂消て、空を見上げました。その瞬間、火柱は、ぐら／＼と崩れて、本陣の玄關までが、眞ッ黒な煙と焔とに見えなくなつて了ひました。

「やられた！」

出目助さんは、ハツと思つて、流れのなかへ蛙のやうになつて、突ツ伏しました。たしかに、火柱に押潰されたと思つたのですが、不思議なことには、旋風と共に、風が變つて、火柱は、反對の方へ崩れました。

その物凄い有様に、出目助さんも、さすがに恐ろしくなつて来て、もう、そこに、じつ／＼居られ

なくなりました。

「かうしてゐても焼死ぬんだ。逃げるだけ遁げて見よう。」

出目助さんは、慌てないで、さう決心しました。そして、お姫様の手を、しつかり取つて、流れの上手の方へ、少しづつ、少しづつ、進んで行きました。

二

『地獄の夢』のやうな、恐ろしい一夜は、明けかかりました。怪しい大風も、いつか、清々しい朝風に變つて、霞のなかに、春の山々が夢のやうに浮ぶ。東がしら／＼と白むで、紅、紫の雲がなびく。向ふの村で、鶏が静に、そして、のどかに啼く。水口の宿は、焼



るだけ焼けて、火も、よほど、小さいくなりました。

出目助さんとお姫様とは、井川から井川へと這渡つて、やツと、火のなかを逃出すと、今度は、黒装束の奴どもに襲はれる心配が出て來ました——これは、火よりも恐ろしい。

『どこから、あの烏天狗どもが出て來るか知れないのだ。』

さう思ふと、出目助さんは、ビク／＼して、吻ツと一息してあるどころではありませんでした。

『どうしたら可い： ナニ、おいら一人なら、いつもの「魃の早業」の手を出して、どこへでも飛込んだ了ふのだが…… お姫様と二人ではな。』

出目助さんは「どうかして、見つからない工夫がないか。」と、大きな頭を傾げて、一生懸命に、その智慧を搾り出さうとしました。肩と二の腕とに、小さな火傷をして、それが、ビリ／＼痛みはするし、もう、へと／＼に疲れてもゐましたが、なか／＼、そんなことに、へこたれて居られませんでした。

『さうだ／＼。川筋から川筋を逃げて行かう。さうだ、それが可い。可い。』

水口の近邊は、山が近い。で、ふだんは、小さな礫のやうになつて、ちよろ／＼水が、白く洒れた石と石との間をくゞつて流れてゐるやうな礫川が、あつちにもこつ

ちにも、幾筋となく流れてゐました。そして、その兩岸には大概、灌木や篠竹が茂つてゐて、姿を隠して礫を涉つて行くには、まことに都合が好いのでした。

出目助さんは、その邊の地の理を精しく知つてゐました。で、お姫様をつれて、野鼠のやうにすばし／＼と、その川の一筋と筋を擇んで逃込みました。

お姫様は、髪が、雀の巢のやうに、むしやく／＼になつて、顔も、煙と土とに眞ッ黒け。まるで泥溝に落ちた三毛猫のやうになつてゐました。出目助さんも然うでした——これも眼だけが光つて、低い鼻など、どこへ、潜りこむで了つたのか解らないやうになつてゐ

した。

『これでも、お姫様かえ。』

出目助さんは、さう思ひました。そして、『これなら、誰が見たつて、お姫様とは思ふまい。』と、反つて、その姿のひどくなつてゐるのに安心してゐました。

するうちに、お姫様が切りに、

『寒い／＼。』と云ひ出しました。

いくら、金糸銀糸で刺繍をしたお小袖を着てゐても、それが、ぐし／＼濡になつてゐては耐りません。お姫様は、ガタ／＼、ガタ／＼、黎明の寒さに慄へてゐました。

『寒いかえ。』 おいらも寒いよ。

困つたなア。 まつたく、困つたよ。』

出目助さんは、口のなかで、プ

ッ／＼云ふやうに繰りかへして、只、さう云ふだけでした——ハツキリした返事をしたいと思ひましたも、どうにも爲様がないのですから、それが、出来ませんでした。何處か、百姓家へ行つて、焚火をして暖めて貰ふ位のこととは知つてゐましたが、うツかり、そんなことも出来ません。

困りきつてゐるうちに、出目助さんは、お姫様の小袖を見て、ふツと、

『やア、こいつア、可けない。こんな着物を着てゐちア、すぐにお姫様だと解つて了ふ。』

と、氣がつかしました。そして、『黒装束の奴どもに見つかつた時に困るから。』と、云つて、大急で、

上着の小袖を脱がせました。それから、その小袖を、帯と一緒に、篠竹藪のなかへ、棄てて了ひました。雀が、ちい／＼、啼いてゐるだけで、そこらに誰も見てゐる者もありませんでした。

『寒いよ、寒いよ。』

お姫様は、さう云ひつゞけました。そして、ぶる、ぶるツ、ぶる、ぶるツと慄へるのが、だん／＼、ひどくなつて來ました。

『可哀さうだ。何うしたら可いんだ。』と、思つて、出目助さんは、まつたく、困りきつて了ひました。

三

出目助さんは、礫川の岸の藪をくゞつて、魎のやうに、ちよこち

よこと這出すと、近い村まで駈けて行つて、『水口の宿で焼出された』と、云つて、ある百姓家から、菰を一枚と、米俵の空いたのを一ツと貰ひました。そして自分も、寒くて／＼、耐らないので、菰を、くるりと背から巻いて、大急で、引返して來ました。

向ふの山の彼方から、お日様が、のツと出て、そこらの林や竹藪や、笹の小藪、蔵の白壁に、紅い影が、チラ／＼と映したかと思ふと、この「世界」が、急に、バツと明るく、輝いて來ました。

出目助さんは、ちよツと、ノビノビした氣もちになつて、『おい／＼、お姫様も、菰を着れア、乞食だ。何んのこつた、何んのこつ

た、菰を着て、お乞食だ。」

そんなことを考へながら、田圃道を突ツ切ツたり、畦道から畦道を傳ツたりして、お姫様を隠してある方へ、すたこら、やつて来ますと、その足音に、びつくりして、鴉めが、ふいに、ひゆツと羽敵をして、畦の下から飛出しました。

「鴉め。」

出目助さんは、何んとはなしに、その黒いのを憎みました。

小さな流れの岸には、「ごん」の好な緑の芒や、軟さうな若草が、露に濡れて、しつとりとしてゐました。

「ごんの奴、飼料を待つてゐるだらうな。」

そんなことも、チラリ、考へま

した。さうして、急いで行きます

と、川岸の田の中に、大きな稻塚が七八つ、グラリと並んでゐるところへ来ました。と、その稻塚と稻塚との間に、何か、黒い物が動きました……出目助さんは、恟々として、よっく見据えようとする

と、もう、其の黒い奴が一人、ぬ

ツと現はれて、ヅカ／＼傍へやつ

て来ました。

「しまつた！」

出目助さんは、石のお地藏さんのやうに、立竦むでしひました。

黒い物が動いたと思つたのは、黒

装束の奴どもの頭でした。それが、

十人ほど居ました。

「こら／＼、貴様は何んだ。」

仁王様のやうに大ツかい圖體の

奴が、小びつちよの出目助さんを見下ろしながら、横柄に云ひまし

た。

「へい、おいらは、馬方だよ。」

出目助さんは、相變らず出目助さん流に、無難作に云ひました。

「何處へ行く。」

「来たな。」と思つて、出目助さ

んは、ちよいと額のところへ手を

やつて、それから、びよこりツと

一ツ、お辭儀をしました。そして、

「水口へ行くんだよ。」

と、キョトンとした顔で云ひま

した。

「なに、水口ツ……たはけ者め。

道が違ふではないか。」

「ま……廻道をしたんだよ。」

出目助さんは、へどもどしなが



ら、さう云ツて、隙を見

て、だツと、逃出さうとし

ました。と、後ろの方にも、

もう、鳥天狗のやうな奴が三

人、眼を光らして、突ッ立ッてゐました。

「あッ、可けない……」
と、首を縮めて、頭を掻きました。

「逃げるとは、うろんな奴だ。水口へ何にしに行く。」
と、後ろの方の奴が、呟鳴りつけました。

「ム、何んだよ、ム、あのネ」
と、出目助さんは、何んとか、ごまかさうと思ッて、「馬を連れに行くのだよ、馬を。おいらの馬を……ごんの奴サ。真ンとだよ。」
「嘘をつけッ。水口にはもう、馬なんぞ一頭も居らんぞ。」
「うさんな奴だ。」
「怪しい小僧だ。」

と、前と後ろから、ガン／＼、ガン／＼、破鐘でも叩きつけるやうに、喚きつけました。

「一體、貴様、どうしたのだ。」
「どうして、そんなに、づぶ濡になつてゐるのだ。」

「どうして、そんなに、鍛冶屋の小僧のやうな顔をしてゐるのだ。」
「その儀は何んにするのだ。」

と、大勢の口から、だん／＼詮議が、急所を突いて来るやうになりました。それに、相手が正體の知れない恐ろしい奴どもです。

「うっかりした事は云へないぞ。」
出目助さんは、さう思ッて、只、キョト／＼と、あッちの眼、こッちの目玉を見くらべるばかりでした。

すると、そこへ、また一人、背の低い、いやにデブ／＼した肥大漢が、のそりツとやツて來ました。

「や、此奴々々。こいつが、今朝、曉方、馬を乗廻して、火のなかへ飛込んだ奴でござる。」

「ア、此奴でござつたか。」
「たしかに此奴でござる。こらッ、小僧……貴様、石部の方で、姫を見たと申したな。いづれの邊で見た。それを申せ。ハッキリと申せ。」

豹のやうな眼を、獐猛に光らせながら、囁付くやうに、云ひました。
「こりや可けない。出鱈目を云つたのが、解ッたかな。」
と、出目助さんは、いよ／＼悲

觀じて縮上がつて了ひました。

「さ、何處で見た。それを云へ。好い加減なことを申すと、打ッ斬して了ふぞ。」

と、圖體の大きな奴が、刀の柄頭をたゞいて、おとしつけました。

「何處で見た……」
と、肥大漢の奴は、その太い手で、むづと、首筋を掴んで、小突きました。

出目助さんは、オロ／＼して了ッて、もう絶体絶命だと思ひました。そして、何ンとも云ひませんでした。

「こら、云はんか……。しぶとい奴だ。」

と、肥大漢は、太い手で、ぐいぐい小突き廻して置いて、力まか

せに、うんと一ツ、小ッびどく突飛しました。

出目助さんは、少しも反抗しませんでした。で、小突かれると、よろ／＼と、跟けて、後ろの篠竹

藪のところへ、見事に尻餅をつきました……その、とたんに、チラと目についた藪のなかの徑。そ

れが、やツと、子どもが、潜ッて行かれる位にすけて、藪の方へ、ダラ／＼と坂になつてゐました。

すばしツこい出目助さんは、「この時だ！」と、思ふが疾いか、思切ッて、でんぐりかへしを打ッて、

「鮎の早様——竹藪をもぐッて、徑をズル／＼と、破へ滑りこむで

行きました。」
「あッ、小僧め……」

肥大漢は、ボカンと口をあけて、呆氣に取られました。

「さてこそ、おのれッ。」
と、唸るやうに云ッて、圖體の大きな奴は、いきなり、肥大漢を

押しのけると、恰も、牛が暴れ出したやうに、猛然と、篠竹を叩分けて、徑を駆下りて行きました。

「逃げたな……」
「それ、追駆けろ。」

と、口々に喚いて、後の八九人の者も、つゞいて、ガサ／＼篠竹を押分けて、徑を下ッて行きました。

四

一本橋を跳越え、三本橋をくゞッて、出目助さんは、ちよ／＼、

ちよこくと、逃げて行きました。後を振り返り、川筋を下へへと逃げました。——それが、まるで、『鬼さん、こつち。こゝまでお出で』と、云ふやうに、相手をお馬鹿にしてゐるやうに見えました。

『思ひの他、すばしい奴、取逃しては相なりませぬぞ。』

黒装束の奴どもは、お互に胸を合つて、一生懸命でした。丁ど驚が雀を追駆ける様な勢でやつて行つたが、破の石がごろちやらして、足が思ふやうに運ばれません。肥大漢などは、驚の化物のやうな恰好で駆けても、草鞋の緒を踏切る、ハア／＼息が切れて来る。五間後れ、八間おくれて、だん／＼



後の雁になつて了ひました。

するうちに、出目助さんは、駈けながら、石を拾つては、ボンボン投出しました。覗の上手か、鍛えた腕前か、その石が、不思議によく飛んで、よく命中りました。

その時、背の、ひよろ／＼した奴が、一番先きになつて、長い脚を飛ばしてゐましたが、こいつが、真ッ先きに、

『あッ』と、叫んで、足が真ッ二ツに折れでもしたやうに、向脛を押へてがっくり前に踏つたかと思ふと、もう起上ることが出来ませんでした。

『如何致した、如何致した……』

それと見て、後につゞいた一人が、踏止つて、傍に近よつて行く

と、またも一ツ、びゆッと飛んで来た石が、こいつの顚額のところを、うんと引ッこすつて、三間ほど先き落ちました。

『あッ』と、こいつも顚額を押へて、よろ／＼と跟めいて、痛みに堪へられないやうに、べた／＼と座つて了ひました。

『飛道具でござるぞ。御油断なさるな。』

と、慌てた奴は、さう云つて、呷鳴りました。

『いや／＼、石でござる。お進みなされい。お進みなされい。』

顚額をやられた奴は、片手を振つて、叫びました。

『それ、面を伏せて。』
『お氣をつけなさい。』



と、お互に氣をつけ合つて、餘の者どもは、どん／＼、どん／＼、出目助さんを追ひつめて行きました。するうちに、また一人、バツタリ倒れた。

『やッ、また一人、やられましたぞ。こりや餘程の手練……不思議な技でござる。手前なぞ、どうやら骨まで挫きましたやうで。』

さう云つて、向脛をやられた奴は、我慢にも立起がることが、出来ないうやうに、顔を壓めてゐました。

『いや、手前も、その、真ッの、顚額をかすただけと存じたが、甚い痛みで、どうにもはや……』

と、痛くて痛くてならぬやうに云つてゐると、またも一ツ、頭の

録附別特
る歸んやち金

清勝山小



上へ飛んで来たので、二人は、ハッ、首を縮めました。と、もう、後ろの方で、あとの鴈の肥大漢が眼のところをまともにやられて、『あッ』と、叫ぶと共に、兩手で顔を押へながら、ふら／＼と倒れました。

『やられた！ 残念ッ。小僧め、いよ／＼凡者ではござらぬぞ。』肥大漢は、さう云ひ／＼、襟を擦って、呼子笛を取出すと、息の續く限り、ビリ／＼、ビリ／＼と鳴らしました。眼のところから、血がタラ／＼と、流れる。それにも構はず、凄い目を片手で押へ、呼子笛を取出して、これも、息のつゞく限り、鳴らし出しました。

五

出目助さんは、かうして、『助の早業』と、『石投』の奥の手を出して、危いところを脱がれたばかりか、あべこべに、黒装束の奴どもを、へこました。さうして、隙を見て、好い足場から藪を潜って、磧から岸へ駆上りました。駆上がると、出目助さんは、ハア／＼息を切らして、もう、そこに、打ッ倒れて了ひさうに、疲れてゐました。それでも死物狂でした。一生懸命に、お姫様を隠して置いた川筋の方へ一散に駆けて行くと、間もなく、呼子笛の合圖に依ッて駆付けた黒装束の奴どもが卅人ほど、眞黒に、一とかたまりになッて来るのに出會しま

した。

『こりや大變だ』と、出目助さんは、目を丸くして、道を外れようとする、そっちの方からまた、石に命中しなかつた五人の黒装束が、何處々々までもと、追駆けて来ました。さうして、出目助さんは、だん／＼追ひつめられて、まッたく袋の中の鼠のやうになッて了ひました。『助の早業』で、小川へ飛込んだり、藪へもぐったり、畦の下へ小隠したりして、秘術をつくして逃廻りましたが、駄目でした。もう眼も眩ひで了ッて、無茶苦茶に、ある一本橋を渡らうとすると、そこで、横合から飛出した一人の黒装束に、腰のところを、うんと蹴られて、バツタリ、倒れて了ひました。

(つゞく)

貧しい人達のみが棲んでゐる街がありました。その近くに公園があつて、その街の小供達は、お天気の日には勿論のこと、少々雨には臆しないで、この公園で遊ぶのでした。

私も亦この公園の近くに棲むやうになつてから、此處を唯一の散歩場として、やつてゐる書きもの、仕事に厭になると、よく出かけて行つたものでした。で次第に子供達とも顔なじみになり、いつか、『おちさん、こんにちは……』など、子供の方から呼びかけられるやうになりました。

かういふ風にみんなと親しくなつたのですが、只一人私になじまない男の子がありました。その子は私ばかりでなく、仲間の少年達にさへ、あんまり口を利かないで、遊戲にも加はらず傍に立つて、じろじろと見てゐる事が多いやうでした。しかし、どこ

目をやりました。彼は今、仲間から何かの遊戲のメンバーに加はることを誘はれてゐました。

『ね君、一しよにやらうぢやないか。』頭に小さな禿が點々と散らばつてゐる横町の定公が言ひました。

『いやだ。』おちぶれた若さまは、一言のもとにはねつけました。そして侮蔑しきつた嘲笑の目を仲間の方に投げつけました。

『やい！勝手にしろい！』元氣短氣な定公は口惜しさうにかう言つて、新しい候補者を探すために仲間の者と會議を始めました。

『何て、高慢ちきな小供だらう。落ちぶれた若さまとは、よくつけたものだ。』と私は思ひました。が、今しも工場の煙突の間に落ちかゝつてゐる真赤な太陽に投げた、その少年の目にふと氣づいた時、私はびつくりしてしまひました。

だつて、彼の目は、今までとはすつかりちがつてゐるのです。その目は希望と熱情に燃えて美しく

なく貴族的に見える、きやしやな少年の風は、始めから私の心を惹きつけてゐました。

或日、私は、みんなが武坊と呼んでゐるチビ助の少年に、

『ね、君、あの子供はどうしたんだらう？ 名前はなんといふの？』と、獨りぼつちで考へこんでゐる例の子供を指して尋ねて見ました。

『ふうん……あれは、落ちぶれた若さまだ、おちさん。』武坊は事もなげに答へました。

『おちぶれた若さまだつて……變だね武坊。』あんまり奇抜なので私は訊き返しました。

『だつて自分でさう言つてゐるんだもの。』

『ほんとうの名は？』

『金ちゃんてんだ……だけど、ほんとうの名なんか誰も呼びやしないや。』

落ちぶれた若さま——私は此のお伽噺にでもあるやうなアダ名に感心しながらも、一度その少年に

輝いてゐるのです。しかもその希望は目の前にある喜びを待ち望むのでなく、偉い詩人達がさうであるやうな、心の中の夢を楽しむと言つた風でした。

『これは全く貴族の若さまだ……王子さまだ！』私は思はずかうつぶやきました。そして歩みよつて、彼に話しかけました。

『君は夕方の景色が好きらしいね。』

少年は黙つて私の方を振り向きました。その目には明らかに——お前などに夕陽の美しくさが解るものか。といふやうな嘲けりの色が浮んでゐました。私は大人氣なくも、少しくむつとしてつぶやきました。

『きれいだ、全くきれいだ。』

すると少年は、突然反駁するやうに私の方を見て言ひました。

『おちさんは馬鹿だね。こんな汚い町の夕日が何できれいなもんか。』

「えつ……」私は驚いて叫びました。

「では君は何をうつと見てゐたのかい。」

「僕はね、もつときれいなこの夕日を見てゐたんだよ。」少年の答へは益々意外です。

「ほう、どこの夕日を？」私は重ねて訊きました。

「そこはなあ伯父さん……」少年は、うつとして話し出しました。「美くしいお庭や洋館があるおやしき町だよ——あの煙突の代りに窓ガラスがきら／＼と光つてゐる塔があり、あのギラ／＼した灰色のトタン屋根の代りに青い屋根がある町だ。そして伯父さん、その町の人々は、みんな海岸に別荘を持つてゐるんだ。そこでは青い松林の間から、夕日に染められて泡だつてゐる海が見へるんだ……僕は、僕は伯父さん、その夕日を見てゐるんだよ。」

「ほう、それは素晴らしい！」私は少年の空想に魅せられたやうに叫びました。しかし、少年は私の言葉なんかもう、耳にとめないやうな風で、夢のやう

に話をつゞけました。

「……そこには僕のお父さんやお母さんがゐる……姉さんや兄さんもゐる。みんなきれいな立派な人達だ。」

「えつ。」私は聞き返しました。「では君は、今両親の側にゐないのかね。」

少年は、やつと自分に返つたやうに私の方を見て悲し気に答へました。

「今、私を育てゝゐる両親は、ほんとうの親ではないんだよ伯父さん……姉さんも、ほんとうの兄弟ではないんだ。こゝにある街も家も、みんなまぼろしです。ほんとうの両親や姉さん、僕が棲むやうになる街や家は別にあるんだ。今はまぼろしで、僕が心の中で考へてゐる未来のことがほんとうなんだよ。」

「さうかい。」私は大きくうなづきました。「さうだつたら、君が生みの親を戀ひ慕ふのも無理はないことだ。して、その両親の名前はわかつてゐるかね。」

少年は悲し氣に首を振りました。

「わかつてゐないのか。」私も嘆息しました。少年はうなづいて見せてから言ひ

ました。

「伯父さん……白い鬚をはやしたお爺さんを見受なかつたかい。」

「えつ！」これは又意外な

問ひであつたので私は目

を見張りました。が、

少年は私の答を待つ

でもなく、又夢見

るやうな風にな

つて木立ちの中

へ歩き出しまし

た。

太陽はもう工場の

蔭に沈んで了ひました。



いつの間にか他の子供達もなくなつて、フランコのみが、かすかに動いてゐました。やがて落ちぶれた若さまの影も見えなくなりました。私は、この少年が一日も早く、生みの両親に會ふことが出来るやうに祈つたのでした。

二

其後もたび／＼私は、その少年に會ひましたが、私をも、まぼろしの中の人物と思つたのか、前のやうに打ち解けて話すことはありませんでした。或日のこと、私は、今、棲んでゐる町から可成り離れてゐる大川近くの堀に沿ふた路を歩いてゐました。

と、向ふから一人の少年がとぼ／＼と歩いて來ます。近づいて見ると例の少年でした。その様子が如何にも物思ひに沈んでゐる様子でしたので、すれちがひになつた時分私は聲をかけて見ました。

「金ちゃん！」

少年はやゝ驚いたらしく、びくつとして足をとめ、目を見張つて私の顔を見つめました。やがて言ひました。

「伯父さん、白い鬚のお爺さんを見かけなかつたかい。」

かう向ふから問ひかけられたのを機會に私は、もつとよく彼の素情を尋ねたいと思ひました。で私は、
「さうだな、そのお爺さんはどんな風をしてゐるのかい。そして、君はどんな用があるのかい。」と訊きました。

「伯父さん、僕が生れた家を知つてゐるのは、そのお爺さん一人なんだよ。」

「ほう、それは不思議なお爺さんだな。」

「私は、少年の話が益々怪奇的になつて行くのに、ひどく興味を感じながら叫びました。そして、少年と同じ方向に肩をならべて歩き出しました。

「全く不思議なお爺さんだつたよ。」少年は語り出しました。『去年の年の暮れだつたよ。どこからともなく、そのお爺さんが歩いて來たんだ。白い鬚を生やし、曲つた柄の杖をついて、茶色の大きな袋を持つてゐたよ。人でも探すやうに、毎日、人の顔を覗きこみながら、行つたり來たり街ちゆうを歩き廻るので、みんな氣味悪がつて、お爺さんの側を通る時は顔をそむけた位だつたよ。或る時、僕が一人で歩いてゐたら、ひよつくり其のお爺さんに出會つたんだ。すると、お爺さんは、しげ／＼と僕の顔を見てゐたが、突然、膝まづいて、僕の手を握り、

「おう、若さま、と叫んだんだ。僕はびつくりして逃げようとする、とお爺さんは一生懸命に僕の手を掴んで、

「若さま／＼、どうかしばらくお待ち下さい。わしは、お前さまを探すために、どんな苦勞をしたかわかりません、といった。

で僕は、

「何言ふんだ。僕はそんなもんぢやないと言つたけれど、お爺さん、どうしても聞かないんだ。そして、とう／＼僕を公園のベンチのところに連れてつて詳しく生れた家の模様をきかしてくれただんだ。終ひにお爺さんは言つたよ。

「若さま、わしは改めて、あなた様をお迎へに參上します。その時まで決して心をけがしてはいけませんよ。この濁つた町にあなたさまの靈を染められるやうなことがあつては大變だ。若さま、あなた様の今の生活は、みんな、まぼろしだ。あなた様のほんとうのことは、美しい御殿の生活でございます。さやうなら若さま。かう言つて、そのお爺さんは又、どこなく行つてしまつたんだ。」

最後に少年は、がっかりした聲で言ひました。

「で、僕は長いこと待つてゐるけれど、お爺さんな

私は、なんだかお伽噺でも聞かされてゐるやうな
わからない氣持ちになりました。それだけに、少年
の言葉に信がおけないやうにも思へたのでした。で
私は、

「金ちゃん、それは夢見たいな話だが、ほんとうに
夢ぢやないかね。」と訊いて見ました。

と、少年の顔は、にはかに青くひきつゝて、憤怒
に堪え切れぬ聲で、

「夢？ うそだ……夢なもんか。ほんとうだ……」
と叫んで、恐ろしい權幕で私の顔をにらんでゐた
が、やがて、すた／＼と反對の方角へ歩き出しまし
た。

あつけにとられた私は、全くわからない氣持ちに
なつてぼんやり少年の後を見送つてゐました。

「金ちゃん、今の生活をまばろしと言つてゐるけれ
ど、その方が眞實で、ほんとうと思つてゐることが
まばろしではないか知ら。しかし、あの奇怪な老人

の言葉が全然嘘とも言へない。若し、彼の老人が二
頭立ての馬車に乗つて、この長屋街に金ちゃんを迎
へに來たら、どんなだらう。全く素晴らしいことに
違ひない。そして、この廣い東京には、そんな事が
ないとも限らない。しかし、若し老人がいつまでも
迎へに來なかつたらどうだらう。金ちゃんは、きつ
と家出するに違ひない。」私は、こんな事を、自分の
家に歸つてからまで、こま／＼と考へたのでした。

三

二頭立ての馬車に乗つて白い鬚のお爺さんが、こ
のせまい町に現はれるのを待つてゐるのは落ちおれ
た若さまの金ちゃんのみではありませんでした。金
ちゃんからは、すつかり警戒され輕蔑されながら、
私は毎日窓から首を出しては金輪の音に氣をつけて
ゐました。

けれ共、いつになつても、それらしい馬車の姿は

見えません。時たま公園に行つて見ると、金ちゃん
は相變らず夢を追ふ目に貴公子の氣品を浮べて立つ
てゐるのです。

それは秋もたけなはな十月の中頃でした。或る仕
事を完成するために閉ぢ籠つてゐた私は久方振り
公園を訪れました。しばらく見ない間に、公園はす
つかり秋の色に染められてゐました。が小供達には
別に變つたことがなかつたと見えて、なじみの顔は
大概揃つてゐるやうでしたが、どうしたことか、例
の金ちゃんの姿のみ見えません。私は武坊に訊きま
した。

「武坊や、落ちぶれた若さまはどうしたい。」

「あゝ、金ちゃんね、一ヶ月も前から、どこかへ
行つちやつたい。」

「引越したの。」

「ぢやないよ。金ちゃん一人で、どこかへ行つちや
つたんだ。金ちゃんちの人も知らないや。」



『ちや家出したんだね。』

『うん。』

『さうかい。』私は一寸驚かされました。しかし如何に驚いたところで、只彼の身に間違ひがないやうに、又、若し生みの両親が別にあつたら一日も早く會ふことが出来るやうに心の中で祈るだけで、どうしようと思ふには、彼と私は餘りに縁が薄かつたのです。で、いつか私は、金ちやんのことは忘れて了ひました。

或日のことです。私は山の手の方の沖村先生のお宅でお話を伺つてゐました。と先生の奥さんが、目に涙を浮かべて入つて來られました。

『今ね。』奥さんは話されました。『可哀さうな男の子が來たのです。何でも華族さんの家に生れたさうですが、小さい時、何かの事情で他所にやられ近頃まで貧民窟に養はれてゐたさうです。その子供が生みの家を探して歩いてゐるのです。もう三日も御飯を

一六六
いたゞかぬといつて、ぼんやり門口に立つてゐたので、御飯をたべさせました。とても可哀さうな小供でしたわ。』

これを聞くと私は、ふと金ちやんのことを思ひ出しました。そして若しや彼ではないかと考へたので直ぐ外へ走り出て見ました。

と一人のぼろ／＼の着物を着た少年が、二二三丁先きに後を向けて立つてゐるのです。その後姿がいかに金ちやんに似てゐるので、私は、

『金ちやん。』と呼んで見ました。すると其少年は、はつと後を振り向きしました。その顔を見ると間違ひなくかの少年です。

『金ちやん。』私はつゞけて呼びかけました。すると彼は恐ろしい者にでも見つかつたものゝやうに、ひらりと身をかへして向ふの方へ馳け出しました。私も二三丁は後を追ふて走つて見ましたが、つひ見失つて了ひました。

こんな事があつて金ちやんのこととが又強く私の心に廻つて來ました。私は歸ると直ぐ少年の家に往く路を聞いて訪ねて見ました。彼の姿を見た事を知らせるのも一つの用件でしたが、彼がほんとうに華族の家に生れたかどうか、何だか事情あるらしい家庭の様子を探るのが第一の用でした。

彼の家は、がた／＼の溝板をふんで行くせまい横町にある六軒長屋一くぎりで、ひどく貧しい暮しをしてゐるやうに見受けられました。私が門口に立つて父親らしい人に來意を告げると、十五六になる娘さんと、病みほうけた母親らしい女の人が轉げるやうにして出て來ました。

『あの、うちの子供が無事で御座いますつて。』かう、あえぎ乍ら言つた母親らしい人の目には、もう涙が一ばいでした。

『あゝ、金ちやん。』娘は、なつかし氣に、かすかな叫びをあげました。

『え、確かに山の手の方でお子供さんの姿を見ました。御丈夫のやうでしたが一體どうして家出なすつたんですか。』私は親身に見へる其人達の様子に、少し期待を裏切られ乍ら、きいて見ました。

『貧しいといふ外に、何もわけはないのですが。』父親らしい人は答へました。

『失禮ですが、御實子でございますか。』

『え、え、實子どころではありません。たつた一人の男の子ですから貧しい中にも、すゐぶん大事に育てゝゐたのです。これはあの子の母親ですが、あの子が見へなくなつてから、すつかり病氣になつて了ひました。姉も毎日泣いてばかりゐるのです。』

父親は病みほうけた母親や、娘さんを指して語りました。

『さうですか。』私は臍に落ちないやうにつぶやきました。父親はつゞけました。

『それが、どうも困つたことには、つひ去年頃から

變なことを考へるやうになつたんです。何でも白い髪を生やした老人から聞いたんださうですが——自分分は華族さまの子で、私達の實子でないと考へ始めたんです。いくら、ほんとうの事を言つて聞かしても、どうしても信じて呉れないのです。それに、その白髪の老人といふのが、ほんとうにゐたのかゝないのか、誰に訊いても見たことがないといふのです。おかしな子だと思つてる中に、とうとう家出してしまひました。』

『成程さうですか。』私は大きくうなづきました。勿論私は父親の言葉を信じましたが、少年の其の空想にも充分同情することが出来ました。なせだつて——若し、此の街の不潔と醜汚に氣がついて不満足に思ふ子供があるとすれば、この街を脱れ出る氣で大いに働くか、でなければ心の中だけで此の街を脱れ出した氣になるかでせう。不幸にして金ちやんは後の方の子供でした。そして、この街の不潔と一しよ

に、両親や兄弟までも見棄て、しまつたのです。私は、この氣の毒な一家のものを憎みました。そして、何とかして金ちやんの行衛を探し出す事に約束して別れました。

四

數ヶ月たちました。けれ共金ちやんの行衛は皆目わかりませんでした。私は心當りを探すと共に、度金ちやんの家を訪ねました。母親の病氣は次第に重くなつて、明日をも知れぬ容態でした。そして、彼女の病氣を快方に向かはせるにも、安らかにあの世へ旅立たせるにも、金ちやんを探し出すことが目下の急務となつてゐたのです。

私はすつかり自分の仕事を投げ出して専心探索にとりかゝりました。それは秋の中頃でした。街路樹の葉が黄ろく色づいて、ハラ／＼と落葉する頃でした。路を歩いてゐた私は『うあつ……』といふ人聲



にふと後を振り返りました。と、銀のボタンの詰襟の服を着た門衛のやうな男の人が一人の少年を引きづつて近くの交番の方へ歩いて行く、その後からは耶次馬共が、のっそり年らついて行くのです。

はつと思つた私は、急いでそちらへ走り出しました。やつと私が駆けつけた時は、銀ボタンも少年も交番の中には入つて、群集がその周囲を取り巻いてゐました。私は群集の中を押しわけて交番の窓近く進みました。そして、ほこりによごれたガラス越しに、中の方を覗きこみました。

その瞬間、私はうれしさの餘り、思はず、

『お、金ちゃん。』と叫びました。その聲は、ガラスの中には聞えませんでした。外にゐる群集を驚かしました。人々は、迂散臭い目でじろくくと私を見ました。その少年はまさしく金ちゃんだったのです。私は直ぐにも、中へ飛びこみたいのをじつと堪へて耳をすましました。どんな事情で捕へられたのか、

それを知らないで飛びこむ事は、却つて事を面倒にするおそれがありましたから。で、私は耳をすますと共に金ちゃんの様子を見まもりました。

金ちゃんは、この前、沖村先生のお宅の側で見た時にくらべてすら、見るかげもなくやつれ果てゐました。着てゐる着物は勿論のこと、顔も首も手足も、泥を塗つたやうに黄ろくアカづいてゐます。からだの肉は老人のやうでげつそりと落ちてゐます。かつては詩人のやうに輝いてゐた、黒目がちの瞳も、今はどんより光を失つてゐます。交番の中からは、銀ぼたんの聲が聞えて來ました。

『いや、これはとんでもない不良少年です。お邸の裏から、こそく入りこんで、じろくくとお臺所を覗きこんでゐましたが、とうく中庭に入りこんで奥の方を見廻してゐたのです。……いや、こいつは、とんでもない悪漢ですぞ。』

『ふむ。』警官はさううなづいて、少年へ訊問を始め

ました。

『こら、お前は名は何といふか、どこの者だ!』

しかし少年はうつむいて答へません。が、答へる筈はありません。彼は、銀ボタンに吊しあげられた儘失神して終つたのです。

今は猶豫する時ではありません。私は、はげしく戸をたゞいて中に飛びこみました。

『金ちゃん!』私はかう叫んで、銀ぼたんの手から少年を奪ひとりました。彼は、ぐつたりと私の胸へ倒れかかりました。私は急いで、驚いてゐる警官に一切の事情を物語りました。そして、この少年を自分下げ渡してくれるやうに頼みました。警官は大きくうなづきました。銀ぼたんも始めの権幕に似ず、目をしばたいて幾度も首を振つてゐました。

やがて私は、失神した金ちゃんを自動車に乗せてまつしぐらに走つてゐました。彼はまだ氣がついてゐません。けれ共、私は彼の耳に口をつけ祈るやう

に言ひました。

『金ちゃん、お前の悪い夢からお醒め! やさしいお母さんの許にお歸りなさい。そして懸命に働きなさい。するとお前が夢見てゐるやうな、立派なお邸に棲むことも出来るのです!』

数十分の後、私は自動車を乗り棄て、金ちゃんを兩腕で抱へて、彼の家に急いでゐました。

『こゝを開けて下さい。』私は戸口に立つた時、叫びました。『金ちゃんが歸りましたよ。』

すると家の中から色々な叫び聲が聞えました。そして、父親も娘も母親も、門口に轉び出て來ました。私は、金ちゃんを父親の手に渡すや、醫者を呼ぶために走り出しました。

やつと醫者をとまなつて、歸つて來た時、金ちゃんの額には濡れ手拭が乗せられ、うれし泣きの人々にかこまれてゐました。診察した醫者は、

『大丈夫です。直ぐお氣づきになります。』と言つて

歸りました。
感きはまつた人々は誰一人として口を利く者はあ



りません。が懸て、金ちやんは、ばつちりと目で見聞きました。一瞬間彼は一々の顔を見まはしましたが、直ぐ、それを感じたものか、どんよりとした目は急速に輝き出しました。その目の光は、決して前に見た夢を追ふ者の空しき輝きではありませんでした。「おう……お母さん、お父さん、お姉さん。」彼は遂に叫び出しました。母親は堪り兼ねて少年を抱きあげました。

「金ちやん、あたしがわかつた。あたしはほんとうのお前のお母さんだよ……天にも地にも、あたしより他にお前のお母さんはゐないんだよ……」母親は涙と共にかきくどくのでした。

「おう、お母さん、堪忍してよ！お父さん、姉さん。」金ちやんはかう叫んで、母親のやせこけた胸を抱きました。目からは涙が瀧のやうに流れ落ちます。

「金ちやん、よく夢が醒めてくれた！」父親はたつたこれだけ言つて、あかじみて黄ろくなつた金ちや

んの足をなで始めました。
「金ちやん、あたしも、お前のほんとうの姉さんよ。」



娘も嬉し泣きの涙の中に叫びました。
「姉さん堪忍してよ。」又かう言つた金ちやんは、もう聲を出して泣きはじめました。

金ちやんは、今はたしかに、あの變てこな夢から醒めたやうに思はれました。限りなく深い、そして熱い母親の愛は、金ちやんの妄想を拂ひのけることが出来たのでした。

「あたし、工場に行つて懸命に働くわ、金ちやん、そして、あなたの學費をつくるわ。」娘は言いました。

「おう、みんなで働きませう。」母親も元氣よく答へました。「だから勉強して來年は中學の試験を受けるんだよ。」

「そしてなあ金、お前が夢で見たことを、ほんとうのことにするために、うんと出世してくんなよ。」最後に父親は強い決心でつけ加へました。

私は、明日、清い涙で洗はれた金ちやんの目を見ることを楽しみに、そつと、この家を辭し去りました。

(をばり)



綴方

齋藤次郎選

鳥屋のおちいさん(賞)

東京本郷千駄木小学校 石井かをる

私の家から一町程行つたところに、一けんのかたならしい家があります。

そこは、にはとりをたくさんつて居るちいさんの家です。そこは主人のちいさんはいつもにこにこしてゐる人です。頭ははげてゐて、耳はつんばで、着物は大きききたならしくしらみがついてゐるさうですが、そんなことには、い

つかう無とんちやくで、私たちが鳥をしやせいにいくと、

『どれ／＼、又繪をかきにいらつしやつたか。仲々お上手だな。』など、しやがれつ聲を出して言ひます。

又私たちが遊びに行くと、そばのけでおしつこをしながら、『今日はお天氣がようございますな。』なんて言つたこともありま

す。それを思ひ出すとおかしくてしかたがありません。前に家にゐた書生のたき川さんも、

『あのちいさんはほんとに面白い人だ。』といつてゐました。いつもたつしやで、こしをかにみたいにまげて鳥のせはをしてゐるあのちいさんの事を考へて、私は時々鳥屋へ又遊びに行きたくなる事があ

女の花屋(賞)

東京本郷元町二ノ五五

中坂石次郎

やつと家と家の間から、朝の陽がさしてきた頃、静かな屋敷町一ぱいに、なんとなく晴々とした元氣の良い聲を響かせて、赤、黄、紫色とりどりの美事な花がごをかついた花賣が來た。

『お花イお花。一は五錢、お花イ』と、花缺の音も調子よく、チヨキチヨキいれながら、家の前迄來ると、『今日はいかが』と言つて、花籠を降した。何時も來る花屋さんだ。『お花屋さんが來たよ。』弟は臺所にゐる母を呼んだ。『そうかい。今行くよ。』と、母は返事をしたが、用事があるのか、いらつしやらない。



「人」なうさびろこ

(賞) 子葉佐遊屋古名

する人もありますよ。男だと思つたら女の花屋さんだよつて。……でも聲だけは争はれないものです。『さうね、私も始めて會つた時、この花屋さんは女

『坊ッちゃん。何してるの？素的なものが出來ますね。』と、昨日から一生懸命ボール紙の汽車を作つて居た弟に、おせじを言ふと、『是かい？汽車だよ。一等の寢臺付きさ。』と弟は鼻を高くする。『まあそーを。』花屋さんは、口に手をあてて笑つた。暫らくして母は、手を前掛でふきながらいらつしやつた。そして『一束買ひませう。』と

言ふと、花賣は『有難うさま。』と言つて、花籠や花たてにある、勢のい／＼長い花を、惜しげもなくチヨキ／＼と切り離して、時々花の組立を見ては／＼とくり始めた。『花屋さんの様に男裝してゐるいたら面白いでせう。初めから女だとわかつてればい／＼がね。』と、母がじよう談まじりに聞くと、

の様な聲を出すと思ひましたよ。當りまへね、女が女の聲を出すのは、不思議ぢやないよ。ハ、ハ、ハ。『私の妹も是が好きでね。かれこれ六七年くらゐになりませう。』と追憶するやうに言ひながら、やつと出來上つた花たばを母に渡した。

『こんど、來る時、見せて上げるよ。』と、横から弟が口を出した。花賣は『へいお願ひ致します。出來たら私も飛せて貰ひませうね。』と言つて笑ふと、『何がお前なんぞに出來るものかね。』と、母も笑つた。

『どうも有難う。』『御苦勞様。また來て下さい。』と母が言ふと花屋さんは、花籠をかつぎながら、『さうなら』と、又あせいのい／＼聲をあたりに、ひやかしながら、『お



花イ、お花、いちば五銭、お花イ。」
と、横町に消えて行つた。

寫生

新潟縣南魚沼郡大崎小學校第六

田中芳子

『動いちやいけないよ。』私は柿の木の下で、いとこを寫生してゐました。眼を描かうと思つて、ひよつと顔を上げた拍子に、眞佐ちゃん

「之博」の可愛い瞳とバツタリ行き合ひました。しばらくすると私は何んだかおかしくなつて來て、ブツとほゝをふくらませました。すると眞佐ちゃんの小鼻が少し

よ。『でも芳子さんが笑ふんですもの。』もう笑はないからね。いゝでせう。『えゝ。』
又、私はまじめになつてすましてゐる眞佐ちゃんの顔を見ながら鉛筆を取りなほしました。けれど眞佐ちゃんはまだ笑ひそうだ。柿の葉影からさしこむ西日は、暑さうに眞佐ちゃんのおさげを照らしてゐます。大空に、びんひよろろー、びんひよろろー。とびが一羽まつてゐます。

うちのおちいさん

京都市養正小學校第五

服部昌世

うちのおちいさんは、たいへんしんじん深い人である。ねどこにをつても、おせんにむかふ時でも、なんなんだぶつ／＼。』といつて

ゐられる。又家中のものが集つた時などは、ほとけ様のことを話される。おちいさんは毎月一度は、かならずお寺へおせつけうをきに行かれる。妹も弟もおちいさんにかあいられるから、よくおちいさんになづいてゐる。年は七十であるが、こしはちつともまがつてゐない。年よりではあるがよくはたらかれる。うちのへつついで

も、やすまきはおちいさんがいつも山からとつてこられる。町へおいでになつた時などは、必ず私たちにおみやげを下さるのである。おちいさんが、
『わたしは年よりで、一人でねると足がひえて、ねられんのでこまゐる。』とおつしやるので、私がいつしよにねたら、
『子供はあつたかでよいが、ねざうがわるいでかせでもひかせてはこまると、しじゅう目がさめてのう。』
が一つしよにねる。
私はおちいさんがすきである。

まゝ／＼

秋田市附屬小學校第五

橋爪俊子

『ごめん下さい。』常ちやんが私の家に青物を買ひに來た。『いらつしやいませ。何をお買ひになりますか。』と私が言ふと、常ちやんは、
『なしを百匁下さい。そして枝豆とを。』と言つた。私は松笠をかごに入れてはかるまねをして『はい、なし百匁。』と言つて出した。私が『枝豆を何匁ですか。』と云ふと、
『えつ。』と言つて、三つ取つた。石のお金を幾つかもらつてから私『ありがたうございます。』常ちやんは『さよなら。』と言つて歸つた。今度は靖ちゃんのお客様。『いらつしやいませ。』と私が言ふと、靖ちゃん『これ。』と言つて松笠を指



「外 郊」市町 澤屋 金金 岡 治

水着の兄さん



兄さん「常ちやん所からかゝつた。大根とパンをもつて来て下さい。」すると靖ちやんが又まねして大根とパンを買つて行つたので、もつて行かれなくなつた。大へん今日のまゝごとは面白

かつた。

青い水着を前に

千葉縣稲毛桃島

貴田幸子 (十四歳)

「さした。どの位ですか。」と言ふとまだ靖ちやんは四つだけに「二錢で。」と言つたので、私は「百匁上げませうね。」と言ふと「ふうん。」と言つた。すると常ちやんが何かをもつて来てくれたので、ありがたうございますと言ふてゐると、靖ちやんがまねしてもつて来て、「パンを入れてね。」と言つたので大笑ひをした。所へ今度は電話が

海へ行つて歸つてから、さて地理の宿題に、と思つて机上を見ると、そこにいつ着たかわからない様な小さい青い海水着がのつてゐた。すわりこんでそれを見てゐる

中にふと思出したのは、今から五年前の、私の九つの時行つた房州の岩井の事だ。
「そうだ。あの時だ。この水着を着たのは。」私はまぢ／＼とその水着を手にとつて見た。青い色がうすれてぼんやりしてゐる、水着を見てゐる中にだん／＼眼界は遠く消え去つて、目の前には岩井の豪壯な景色が浮んで來た。
星か——げ淡く——、海——を照し——私達は大聲でサントルチアを歌つた。兄さんは十三。弟は六つ。小さい弟は二つだつた。岩井は外海なので私達の様な弱い子供には危つかしい波が来る。それでも私は大好だつた。白波が打よせる波打ぎに、はだしになつてかけまはつたおもしろさは、今も忘れない。今ゐる稲毛の海とはま

つなく比較にもならない程、すでに私の氣に入つた海だつた。つゞく砂濱にねころんで波に足を洗はせ、果しない大空を眺めつゝ、大聲にサントルチアを歌つた。幼い私にはそれ程愉快な事はなかつたらしい。私の幼い瞳に、あのちぎれ雲のういてゐる青い／＼大空がうつゝた時、何を感じたのであらう。母があとで教えてくれた。

「あの時はお前、ねころぶのが好きで、どうしたんだか急に泣きだした事があつたよ。」それによると或日いつもの様に空を見てゐた私は突然泣きだしたのでさうだ。母に「何がこわいの？」と聞かれた時、たゞだまつて青い／＼天を指さしたさうだ。私の幼い瞳に大空がなんとうつゝたのだらう。九つと言へばもう二年なのに……。



風 景 市 豊 島 泰
私達は奥まつた大きな古い家に、その家の人と一しよにゐた。正夫と「景」言ふ男の子がゐた。弟より一つ上の七つだつた。弟をいぢめては私と遊びたがつた。私は正夫が大きらひ

で、いつも弟をかばつた。それでも私はよく正夫と兄さん達のつりの餌に「め、すを掘に行かう、め、すを掘に行かう。」と言ひながらみづを掘りに行つたものだ。
夕方になるとお母さんは小さい弟をうば車にのせて氏神様へ参詣に行つた。弟は百日せきでかはいそうな程せきをするので、お母さんは毎日かゝさすなほる様にとお参りした。その後へちよこさんとくつゝいて行くものはいつも私と正夫だつた。氏神様のそばに牛小屋があつた。小牛は私達がのぞくと「メ——」と鳴いて、親牛の腹にもぐつてしまふ。白と黒のまだらな牛だつた。いまはどこにどうしてゐるやら……。
青い水着を前に盡ない私の思出はそれからそれへとつゞく。青い



夾竹桃 千住 長谷川 正道

一四〇
がありました。思へば玉がにく、
てたまりません。私は此の可哀さ
うなびつこのお人形を一番うれい
なふとんにねせ、一番可愛がつて
やりませう。

夏の海

横須賀市汐入六

茶木 富美子

(十四)

大兄さんがこぎ手で沖へ出まし
た。もうおから四五丁はなれた
のでせう。海邊に泳いでゐる人な
どは見へないで鹿島様の一本杉が
ぐうと立つて強い日をうけてるだ
けです。風は少しも無く、日はカ
ン／＼と海面を照しては、はねか
へつてゐます。沖の方はあじ釣船
が二十ばかり出てゐます。

大兄さんは此のあつさに平氣で
片手で煙草を吸ひながら片手でこ

水着。それが何だかなつかしくて
仕方がない。そうつと香をかいで
見た。岩井の香があるかも知れな
いと思ひつゝ……。

びつこのお人形

東京市番町小学校尋五

大隅 政子

それは丁度今日から三日前の土
曜日でした。私は學校から歸ると

すぐ部屋の方へ行
きました。すると
部屋の中でニャー
ゴ／＼と玉のなき
聲がするので、な
せだらうと思ひな
がら障子を開けて
見ると、私はびつ
くりしました。せ
つかく此の間買つ
てもらつたりつばなお人形を、玉
がくわへてじやれてゐるのではあ
りませんか。私は腹が立つて、し
やくにさはりましたから、そばに
かけてあつたほうきを持つて玉を
おつかけてやりました。玉は目玉
をくり／＼させながらえんの方へ
飛び出しました。部屋の中は箱や
きれがバラ／＼にちらかつてゐ
て、其のそばには片足もげた人形

いで居ます。秋兄さんも胸の所で、
あは向けになつて目をつぶつて煙
草を吸つてます。煙はまつすぐに
上つて行きます。海面はキラ／＼

光つて目がいたむ程です。時々ぼ
らがピョン／＼飛んで海面をにぎ
やかにします。海面はたゞこれだ
け變るだけです。観音の岬はこい
緑でぬうと出て居ます。秋兄さん
は歌を歌ひはじめました。海面は
ぼらが飛ぶ度に水銀を撒いた様にな
つて又もとの海面にかへりま
す。

今朝

兵庫縣加東郡河合村栗生西窪町高一

河島 一男

今朝父に『一男／＼』と呼び起
されたのは、四時頃であつた。
ねむい目をこすりながら、

「はん」と答へて、かやの中から
飛び出た。すると父は、
「一男よ、ねたいだらうが、今日、
もう日中だけでつだつてくれよ。」
と言はれたから「はん」と言つて、
すぐ其所にあつたしやつと着か
へ、手ぬぐひでねち鉢巻をして、
素足のまゝで元氣よく出かけた。
町へ出て見ると、まだ道の兩側の
家は戸をしめて深い眠に入つて居
る。ただ電燈の光は夜露にぬれて、
外燈の中でぼんやりととぼつて居
る。僕の足音がびちやり／＼と聞
えるだけで、他の物は何一つも聞
えぬ。しんとした中をびちやりび
ちやり歩いて居ると不意に後の方
から、びん／＼といふ音が、か
すかに聞えてくるから、ふと後を
むいて見ると新聞配達さんであつ
た。そうして居るうちに、新聞配

達やさんは、元氣よく自轉車で僕
を過ぎて向ふの方へ行つてしまつ
た。

いよ／＼僕の家の方まで来た。
一休しやうと思つて、立つて休ん
で居ると、どこか田へ水を入れて
ゐるのか、板のすき間から落ちる
水の音は、あたりの静けさを破つ
て、どう／＼と聞えて来る。いよ
いよ、田の中へすくんで、草取を
初めかけた。七分目ほどとつてか
ら、不意に腰がいたくなつたが僕
は此所が、がまんのしどころだと
思ひながらあへぎ／＼とう／＼向
ふの端まで着いた。やれ安心と思
つて顔を上げて東の空を見ると、
ちやうどお日様は、半分程顔を出
されて、やはらかな光を出して笑
つてをられた。



信 通

自由畫選評

山本鼎

△遊佐葉子さんの「コロビウサナ人」(推賞
首席) 五蔵の葉子さんの繪、題は母
さんかおつけになつたのですな。活潑な母
筆の深も正しい事。
△深井正二君の「傳之サシ」(推賞次席) 人
物のデッサンがよい。脚や腕の處が殊に
よい。大きく丸味をもつたデッサンが此繪
のれうちです。
△吉岡清治君の「郊外」筆致が活きて居る
處が特色、色が一番いい。此繪に空は
白くしておいた方が調和します。
△木村太郎君の「水泳課の兄さん」毛筆
の素描、すべて無難。やばり少し誤い墨
でつけ方がよくはないから。
△堂村泰君の風景、面白味のある繪です。
右手の木のうしろした處から遠山のおたりな

△長谷川正道君の「夾竹桃さく家一團柄など面白く、骨折つて描いて居るが、色がちときたない。子供の居る邊がよくかけて居ます。」

十四年九月

幼年詩選評

若山牧水

▼今度は妙に調子いい、のが揃つてゐた。たとへば丸茂五郎君、中島泰子さんのなど、がそれてゐる。それ、所謂調子さんのなどといふ様な、からつ膝さの調子によきでははない、なく、自然に出て来る眞實の調子なのである。

▼須賀の茶木富美子さんの面白いものであつた。「汽車の窓から」といふのが大きな題で、その中に幾つかの小さな題がついてゐて、それ、に對つてあつた。それは「私が富山へ行つた時、汽車の中で作つたのです」として、されてゐる通り、汽車の窓から見たものを、つぎ、つぎと十幾つか並べられたものであつた。あまり長くなるので、残念ながら誌上には出さなかつた。

▼一枚の紙に四つも五つも書くのをよして

童話の選後に

齋藤佐次郎

▽例によつていろいろ皆さんの作を讀ませ
ていただきました。今月はその數からいふ

悲哀」は小説筆端を餘りに鋒鋭に取扱つてゐるが、かういふものな少女少女の神物として提供することは、總じてちめめ話とては進みすぎず、かゝる面白くないと思はれます。(金の栗一は推論後補作といふとつて置きます)

▽坂夜霧 さんの「三田の灸」西条杏花さんの「伊敷さんと蛇」堀切友雄さんの「猫をたぐり」六助軒雄一の「神様になつた猫といづれも面白、駄洒の少女い作といふ事」が出来せう。

▽飯沼兵衛 さんの「廣す賣の少女」はアンデルセンの有名な作を聯想させるものですが、私はもつと此の作者に、線も肉もある力強さを望みますと思ひます。

▽うちつちの原稿紙に蜘蛛と書かれる人があります、お互ひに大きな紙に、元氣よく太々と書かうではありませんか。

童謡の選後に

野口雨情

朝鮮の小學校の先生から「童話の基礎である良心と云ふことなる理學の上へお説き下されてくれば」と云ふ意味の通信が來つた。一體、良心と云ふことは、同時に先にも度々申した通り、人が生れると同時に天的に持つてゐる心のごとで、俗に云ふ魂のことも思へばよろしいのです。この魂については、學理的に説明することは容易でないと同じやうに、良心についても學理的に説明をすることは至難であります。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友が募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがあります。すから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。

甲乙なかに平均して増減してゆくところ、目的があるのです。實際に於て今の學校に於てこれを平均に伸してゆくことが行はれてゐないのです。教科書に於て教材の上げかみても、智の方偏して教材のなりでありませう。これは、學科の優れることに、重きます。なかおかれてゐるからであります。學科の出來る出來ないによつて、その兒童、優秀であります。ふつこきが普通になつてゐるからであります。かやうな點、どうして留めて置くの方に偏つて了ふのであります。かうして

と非常に澤山でしたが、これはと思ふ程の
作がなかつたのは残念です。しかし、少年
少女の作の方に、作といふ程ではあり
ませんが、考へさせられるものがありまし
た。

子といへば、山口縣門田郡田村の金永マサ。これは怪談です。それが、何の技巧もなく、本當に自然に面白く行つてゐると思ひもし、凄味が出る。その大層面白く、と思ひました。そこは最後の場面ですが、立派な藝術になつてゐました。しかし、私は、前作を探らずにありませんでした。その舞は、後半が最後の場面のやうによく書けてゐないといふ理由もありましたが、慥に無難な話とを告げしものだけに發表しなかつたのです。それから尙、鳥取縣作青町の明倫校の眞田幸久さんの「今の關原大王」と熊本市の戸塚敏さんの「狸の降参」の二つを面白く讀みましたが、この方はさして特色を挙げた程のものでもありません。

▽大人の程のものは、田賀かすをさんの「恩を返す盗人」を拙稿作に舉げました。この作は、まづ過ぎた讀んだ後に物足りない感をもつてしまつたが、よく話になつてゐて、靜かに藝術味のある氣分が、たまはれてゐる事は推して値します。

たへにするものです。童話としての出来栄
えからいへば、「美しい世界」を第一に擧
げたいと思ひますが、しかし、讀む上の面
白さは「金の糸」にあるでせう。「花壇の

一方に偏したとき性は不自然になつて來たのであります。その兒童は人として完全な心を持つた兒童とは云へないのであります。童心のとは、不自然な心性を云ふのではなく、智情意の何れにも偏らない心のことであります。それから、この童心に映つて來るものは、自然な、眞直ぐに映つて來るものであります。又、童心と云ふ心の眼で見ますと、總てのものが矢張り自然のまに眞直ぐに映るものであります。眞直ぐに見ることの出來ると云ふ心は、即、偏しない正しい心にあるのであります。かう考へたならば、心理學上からみた童心とは、智情意が平均して調適發達した心、賄り不自然でない、自然の心を指すものであることが判りになり、自然の心と思はれます。かく、この童心と云ふ心とは、眞直ぐに事物を見ることの出來る心で、智識に囚はれる不自然な心なく、又、子供の心意味するものなく、先天的に何人も持つて生れてゐる本然的、自然の心のことであります。この心を伸して使ふことによつて、偏した心や、病的な心、持たない正しい心を持つた人を作ることゝ出來ます。正しく童心に教育の一致點があり、童語、兒童教育に對する使命あるのであります。

前號の童謡『番こつ』

この（釘口雨情作）の末句「雀は鳥 困つちやつた」は「雀も鳥も困つちやつた」の誤植す。

新らしく出た本

世界童話 佛蘭西童話集

いかにフランスらしい、典雅極まる本で、本書を手にした者は、先づその表紙と口絵の美しさに驚いてしまふ。その上、中の十四編のお話は、みなよく實つた葡萄の實のやうな、色と形と匂いと味とを持つた、面白いお話ばかりです。皆さん、どうぞ早く、この美しい葡萄の實を召上つて見て下さい。(四六判箱入三八頁 定價五拾錢 東京市外巢鴨上町二八 金剛社發行)

地球の姿 (理學士 貴志敏著)

皆さんは、ほんとに深山のお伽藪を知つていらつしやいます。併し、皆さん自身が住んでゐる地球の事については、どれだけの事を知つていらつしやいますか。本書には、この地球がどうして出来たか。その地球の上には、毎日どんな變化が起り、あるか、と云ふ事などが、多數の寫眞版入りで、どんな人にも分るやうに、面白おかしく、説明してあります。爲になつて面白く本とは、この本の事です。(四六判箱入美本二五七頁 定價五拾錢 牛込區山代町一四 イデア書院發行)

不ケツト童話叢書

(1) 竹取物語 (須藤和彦氏著)

(2) あゝ無情 (小島徳彌氏著)

(3) 西遊記 (上巻 進氏著)

ボケツト童話叢書は、その名の通り、眼の中に入れても痛くないやうな、可愛らしい本です。ところが、こんな小さな御本の中に、竹取物語だとか、レミゼラブルだとか長いお話が、ちやんと収められてゐるので、どれか讀んでも面白く、何度讀んでも飽きません。皆さんの小さな本箱には是非無くてはならぬ叢書です。(三五判 一三〇頁 定價各五拾錢 麹町區四番町七番地 第一出版協會發行)

ギリシャ英雄物語 (金の星社編)

昔から永く間持つてゐた、ギリシャ英雄物語が、いよいよ發行になりました。ギリシャ英雄物語は、名前からして面白さうではありませんが、本書は、ギリシャ神話に現はれてくる三人の英雄、ペルシウス、ジェーン、テシウスの勇壯さは、よりなき冒險情味は、實にギリシャ神話の持つ最大特色です。装幀は例により金の星社自慢のもの。一度本屋にいらして手に取つて御覧下さい。表紙と云ひ、口絵と云ひ、必ず皆様の御氣に召すに違ひありません。挿畫は特に柳田諒吉畫伯が筆を揮はれました。四六判箱入一八九頁 定價九拾錢 東京本郷區坂町金の星社發行)

自由書掲載外佳作

岩谷 貞三(秋田) 東山 三次(岡山)
三浦 潤(東京) 岩田 繁夫(岐阜)
村上 次郎(福岡) 深野 小太郎(東京)
神津 清流(東京) 福井 武平(愛知)
進藤 元夫(廣島) 高木 くに子(東京)
弘中 新(東京) 飯守 雄雄(和歌山)
中筋 定雄(和歌山) 鈴木 秀三(東京)
原富 三夫(神奈川) 豊島 泰(山梨)

幼年詩掲載外佳作

浅山 マツノ(福岡) 清村 廣(熊本)
中西 榮之助(三重) 某木 富美子(神奈川)
岸 久子(東京) 根本 悦子(千葉)
鈴木 とし子(千葉) 岡崎 憲太郎(山形)
石澤 正一(山形) 水町 鶴松(福岡)
石澤 金重(山形) 早川 一郎(千葉)
右田 榮(福岡) 末廣 朝人(山口)
青柳 保江(千葉) 岩崎 錦之助(岩手)
大串 重利(福岡) 井口 ハスエ(福岡)
中村 重利(福岡) 小口 壽満子(長野)
喜納 筆(神奈川) 金田 直(大分)
杉原 可子(千葉) 根本 悦子(千葉)

綴方掲載外佳作

河島 一男(兵庫) 渡邊 富美(千葉)
丸山 妙子(東京) 島居 雅子(大阪)
中西 榮之助(三重) 小林 文吉(山梨)

童話掲載外佳作 (大人篇)

河野 昭吉(朝鮮) 三浦 定吉(山形)
松井 雅夫(福岡) 小田 光二郎(不明)
船越 厚(栃木) 岩谷 俊郎(長崎)
重田 益夫(新潟) 川上 健路(東京)
酒井 良夫(京都) 穴戸 功夫(東京)
澄川 長治(兵庫) 吉川 耕村(長野)
若菜 じける(新潟) 笠原 信芳(東京)
三島 定市(島根) 杉山 なな(奈良)
五島 金市(岐阜) 田村 マチ(東京)
森 ぼたる(愛知) 中西 静夫(三重)
福永 次郎(京都) 深野 小太郎(東京)
村上 一(東京) 藤野 福男(大阪)
山田 茂夫(東京) 廣瀬 三四七(静岡)
押谷 サエ(大阪) 廣野 貞雄(廣島)
田中 龜二(長崎) 平野 みどり(東京)
吉武 初夫(朝鮮) 圓谷 ひろ子(秋田)
竹田 芳雄(和歌山) 本多 鐵磨(東京)
喜納 多味男(静岡) 山口 喜市(山形)
鎌納 しげ夫(神奈川) 石崎 香花(茨城)
田代 廣一(静岡) 新田 水明(高知)
若衣 ひろし(廣島) 名方 和郎(大阪)
佐藤 武夫(東京) 木村 喜代志(神奈川)
矢木 露(東京) 晦日 長三郎(兵庫)

河本 喜一(神奈川)

中川 力治(不明) 志村 明正(神奈川)
島野 半平(神奈川) 中筋 定雄(和歌山)
岩田 繁夫(岐阜) 進藤 元夫(廣島)
金峯 愛子(山形) 石川 愛子(千葉)
清水 潤(岐阜) 村岡 繁(山口)
河島 つる(不明) 浅野 彰次郎(岐阜)
横井 修吉(京都) 木村 勇(山口)
船越 厚(栃木) 河野 達 精(茨城)

童話掲載外佳作 (大人篇)

堀波 丘詩(熊本) 堀切 友雄(千葉)
中坂 夜詩路(東京) 西原 李花(北海道)
伊澤 幹雄(神奈川) 本多 鐵磨(東京)
坂井 羊子(東京) 伊藤 香平(不明)
小川 俊三郎(新潟) 太田 貞夫(愛知)
藤本 秀太郎(東京) 大胡 敏郎(東京)
宇佐見 勇(愛知) 門田 洋一(東京)
川村 信長(長野) 田中 信一(兵庫)
花野 野朗(神奈川) 早田 稔夫(和歌山)
村岡 繁(山口) 吉川 行雄(山梨)
中島 越三(東京) 田中 信一(兵庫)
金永 マチ子(山口) 城 敬三(熊本)
直田 幸久(鳥取) 瀬上 文子(大阪)
竹田 八千代(東京) 千葉 梯(宮崎)
豊島 泰山(梨) 柳田 文江(東京)
武部 静枝(不明) 森本 康雄(熊本)

大隅 重雄(東京)

松井 鏡太郎(大阪) 中川 たい時(大分)
川野 邊 精(茨城) 大塚 せい(茨城)
岸 文子(東京) 田中 芳子(新潟)
田中 芳子(新潟) 溝口 曜風(兵庫)
金峯 愛子(山形) 服部 昌世(京都)
海老名 花子(京都) 高橋 市廣(群馬)
林 美佐保(群馬) 阿部 福太郎(群馬)
横山 重義(兵庫) 岩谷 チョ(秋田)
栗澤 涉(長野) 丸目 正熊(本)
井原 盛樹(島根) 竹田 芳雄(和歌山)
羽仁 三郎(東京) 山崎 まさ子(東京)
大蔵 利雄(東京) 厚岸 小學校(常科三學)
橋本 謙治(東京) 年男子圖書係(北海道)
眞木 茂愛(媛) 森岡 邦彦(山口)
寺島 信夫(東京) (以下次號)

新誌友名簿



讀者だより

様御健在です。金の星九月號の出来栄えとて、素敵でした。小島に空に、二人兄弟、歸へて來た奥吉喜。風荒れ満月の夜に、皆面白うございまして。野口先生の童話かくれ狐。とてもいい。特別讀物の愛犬リツキと小島先生のお作、随分面白かつた。童讀二篇御送りいたします。(下葉 夢路など)

▼八月十九日貧しいながら、母親の童讀の會へ、私達下校校目白時會で致しました。熊本縣の、わざと海邊公子様とお父縣の、海邊貴文様がお出で下さいました。そして「童讀と各科」について面白く有益な話をして下さいました。皆まんじりともしないで耳を

顔けした。それから野口先生の「こほろぎ」社、梅「あの町」の町」其他澤田會員でうたひました。それから、童謡の鑑賞をして、せんべいをかちりながら、童謡のレコードをかけて蓄音器をききました。(福岡縣 興田小津) ▼斎藤先生。私の下手くさな、そして生れて始めて作った童謡を投稿致しました。何卒御願ひ申します。それから土産の扇の小川漢三さん敬服いたしました。(本多鐵蔵) ▼ふるとり金の星の「愛犬リツキ」小島先生。ここからもうあやう作を度々出して下さい。おたのみ致します。(中筋定雄) ▼いつの間にか秋になりました。妙に感傷的な気分になりました。童謡を初めて作って一年になりましたが、あまりに貧しい收穫に寂しくなります。仙波しげみ様はその後いかがでせう。今度改名しました。よろしく。(神奈川県伊勢原町、純鏡 山岡純美) ▼九月十日のラジオ・プログラムに童心藝術と趣味野口兩情」とあるのを見ました。私は喜びました。なれば私は野口先生が大好きですから。私は息をこらして

聞きました。本當にお上手です。本當にお上手です。野口先生に厚く感謝致します。(忠友 神津清琥)

▼(お願ひ) 貴識欄と讀者だまりの頁を多くして下さい。皆々様もきつとよろこぶでせう。どうぞお願ひ致します。(岩手 西野光兄)

▼朝野の穴戸功夫さんと、長野の山口齋蘭子さん。美しい名所エハガキを擇ひお送り下さいませ!(編輯部)

▼僕は第二巻第十一號の「金の船」時代からの愛讀者ですが投書は之が始めてです。岡本先生のみ給は愛らさして世界一品です。又寺内先生のみ給も私はとても大好きです。はなす事は出来ません。益々「金の星」の爲におつくり下さい。(東京 大島よしな)

▼初めての見當に候へば萬年庚子の分らぬ某、何卒よしなにお願ひ申し上げ奉る。本屋より買った讀者は投票権利は無きか一寸御尋ね申します。三月六分以上は其縮手、宜しうお願ひ申します(星風生)

▼本屋からお買ひになる方でも立派な愛讀者です。だから、どんな投票して下さい。(鶴子)

▼ノブルなる雜誌が、號を進めてノールになつて行くの思はず快哉を叫ばすに居られませう。先生方の御健康をお祈りします。(札幌 中野くま雄)

▼記者さま、私は工場の職工です。ガングリ響くその休みに敬語を作ることが、はじめてのことですか。あらあしからず。皆さまのお教へを待つて居ります。(佐世保 吉武彪二)

地方文藝難読名簿

(入社希望一方は直接發行所へ御照會下さい)

荳 苗 紀州田邊福路町 荳 苗 社

夢 路 神戸市湊川町六ノ四三 田中一路方 社

夕 風 高知縣幡多郡中村町中之町 浦田武男

鳩ぽつぽ 岩手縣一畑町 二關まさみ

聖 路 岩手縣一畑町八幡街 四野光兒

縁の丘 札幌市山鼻町一七九 中野くま雄

▼こほりが有難う御座います。美しう可愛らしい繪葉書やきれいな原稿用紙など、こほりに有難

講演だより

鹽谷羊友

▼記「先生及び愛識者諸君。私は今月か、授書を數し送つてからよろしく。初めて顔を出す早々からこんな事を申し上げてすみませんが、兩情先生には御めんどうなうが児童の入賞に一つ一つ評をなへて戴きたいと存じます。それから讀者だつても少しふやして、それも入選、喜びの何のと言ふよりも、御馳對しての希望長所、欠點などを書いたのを、なるべくするやうにして貰ひたいと存じます。讀物は一つや二つ減つても、讀者の質をもつと増して下さい。

(東京 川島秀雄)

▼金の星の諸兄へ。金の星は益々僕等の上に其光りを見せようとしてゐます。今年は今比未だ新兵だつたので、何一金の星に盡す事が出来なかつたのです。これから大いに立働り積りであります。九州男子の意氣を示してね。終りに童話の道な歩くく月知市澤見育舎七六川原方 名和暢兒

△入賞になつた方々、まだ賞品を貰はない方は、御申込下さい。(保)

△沖先生と、東北、北海道の金の星社の童話講演を聴く。毎日の私は、秋田市中で夏休中、毎日の公園で、お話を聴き終り、二十六日から愈々童話の旗に出ました。

△最初私は私の出身地秋田縣から始め、次に、一十六日汽車、東北道に上り、山本郡棚川村の湖北小學校に参りました。この學校は秋田の名勝、八瀨湖、北にあり、午前十時八百の生徒さんに二回一盞の饗、十人の大將のいづれも沖野先生の作を二時間半以上もお話をしました。先生も生徒も感動した。で聴かれ、實に樂し、集りて、午後には同窓會、父兄等にお話しました。二十七日八瀨湖の波力男塾半島にそびゆる寒風山、金波里渡湖を眺めて、同郷、濱川小學校参り、午前七百の生徒さんに二回二つ、話題、同じお話をしました。この村は西と瓜の名産地で朝から脚趾走になりました。それより三里湖北小學校、保坂先生、迎へられ、自轉車共、淺内村の御宅に入り、大いなる西瓜、鞠蹴走になり、十二時までも語り合ひました。



念に贈りました。仲野先生が私共
 と學校に適當な話を創作して下さ
 つたことを講演ごとに感謝してゐ
 ます。
 ▽私は私の身體が、つゞく限り奥深
 い山中で虫や鳥の聲をきいて唯一
 の樂しみにしてゐる子供さんや、
 波音をきいてながら空と海をうつ
 めてかゝるとたはむれてゐるだけ
 未だ見ぬ友達に、出来得るだけ



友 羊 谷 鹽



出版だより

◆名著大系第一輯
の完結に際して

齋藤佐次郎

金の星社の世界少年少女名著大系は、第二十編目の『小公子』が近く發行になりました。こゝにいよう、第一輯二十編を完結することが出來ました。計畫者であり、發行者である私は、何ともいへない喜びを感じてになりました。當に愛讀して下さった皆様に、厚くお禮を申したのは勿論です。全く私の仕事は、目出度く一段落を告げたばかりでなく、腹書界から非常な歡迎を受けまして、今では此の種類の本としては、最も多くの部數を發行してゐる状態です。重版！又重版！全くくるなりです。買行ふを早してなりました。

金の屋社の名著大系は、世界の名著な日本の少年少女の方々に紹介する上に、或る程度の貢献をしたらうとは信じてゐるが、私どもの本當の心持からいひますと、これだけで計畫の十分の一もつくとしてなりませぬ。皆なんにさアお贈り下さいと差し出したら、どんなに喜んで讀まれるかと思ふ本はまさしくそれは、澤山にあります。ですから、僅かに二十冊位では本當に不満足です。

又、私どもの希望からいへば、第一冊に加へた二十冊にしても、まだ外のものとして代へたいと思ふものもあります。

世間に既に發行されてゐるものは、改めて紹介する必要もないのだから、外の名著を寧ろ紹介したでせうと思はれた方もありません。計費者であるわれわれは勿論

それ位の事は皆知して承知しないが、そこには皆さきの御承知のない、いろいろの出版營業上の理由があるのではありません。日本出版界はまだ「幼稚」です。ですから、發行者としては、事は十分に承知してゐながら、實行出来る限り／＼の困難がある事を承知してゐたゞき度い外ありません。理想は除くと實行するより外ないのです。

併し、私は第一回の名著大系が幸に之を得様から大歡迎を受けたの之力に留まらしたから、再び第二輯の名著大系の發行に近く着手いたしました。しかし、その間に、これも長年のわれ／＼の計畫である「世界少年少女偉人傳大系」の發行に着手した矢です。

尙、序ながら、偉人傳大系の發行に就ての、われ／＼の計畫を一言申上げて置きませう。

今から二十年位前には、偉人崇拜熱も多分にあつて、偉人傳を書いた本があふん書店にぎはよいました。しかし、少年少女の讀みたがる偉人英雄の傳記は餘り見つけなかつたやうですが、それではよく分らないながらも皆ながら讀んだのです。われ／＼もその

●奴隷トム物語(賞)

読後感

ストウ夫人の世界的名著、アンクル・トムズ・キャビンが、奴隷トム物語といふ、記憶しやすい書名で、金の星社から出版され、六月の初版が、七月に入つて忽ち再版された私の知つて居る範圍では、これが初めてであると思ふ。

奴隷トム物語は、眞實に忠實なスズキ嬢様以上である。しかも日本の少年少女に、まだ見ない遠いアメリカの物語りとして、見るが如くに容易に物語るやうに書いてある。

色が黒いといふ事支けの爲めに、傲慢な白人から、牛馬均しい取扱をうけた奴隷トムが、深く神を信じ愛を奉じ、一方強く惡に反抗するとうとにも、主人に對しては生命懸けて思ひあつたといふ偉い物語である。今や自由と平等とに覺醒したとは云つても、平等と威を失つた舊道徳に發する、嚴肅な新しい世界への途を發見しない民衆に依つて滿たされつゝある、日本にとつて、此種の物語の出版は、さうにと意義ある事であると思ふ。

一四八

讀後感

● 奴隸トム物語(賞)

小川白雨

ネ、トム夫人の世界的名著、奴隷
トム物語といふ記憶し易い書名
で、金の星社から出版され、六月
の初版が、七月に入つて忽ち再販
された私の知つて居る範圍では、
これが始めてあると思ふ。

奴隷トム物語は、眞著に忠實な
斯事は翻譯以上である。しかも日
本の少年少女に、まだ見ない遠い
アメリカの物語りとして、見るが
如くに容易にわかるやうに書いて
ある。

色が黒いといふ事、丈の爲の
に傲慢な白人から、牛馬均に
取扱うた奴隷トムが深く神を
信じ愛を奉じ、一方強く惡に反抗
するのと、主人に對しては生
命懸けで忠實であつたといふ拿
みの物語である。今や自由と平等と
に覺醒したとは云つても、すぐ
感失つた舊道徳に代る、嚴厲な
新しい世界への途を發見しない民
衆に依つて滿ちた種がある、日本
にとつて此種の物語の出版は、さ
うに意義ある事であると思ふ。

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a dark, irregular stain along the bottom edge. A small, faint mark is visible near the top center.

人です。ところで、近年になつても、偉人や英雄の少年時代と特に記して發行された著書も、三種あるやうに見えます。

讀みがつてゐる餘人なり、英雄なりの一生をくわしく、しかも知らず／＼のうちに面白く讀んでしまふやうな本はあまり見當りません。たゞ面白いだけでなく、胸をおどらせて讀んで、深い感動を受けるやうな本——そういう本を出したい、といふのが、金の星社の『世界少年少女偉人傳大系』を發行する動機です。

従つて、われ／＼の選擇する偉人、英雄は、世間から選ばれてゐる人々と多少違つてゐます。そこに、金の星社の特別に計劃のある事を十分に御承知がひたいと思ひます。

て悲壯な最期をとげた「デヤンヌ・ダルク」が現れ、第二編には「勇將であつて、しかも偉大なる人格の人『ネルソン』」が發行される豫定になつてゐます。第三編、四編等何れも決定してゐますが、これ等は今は發表の機會でありませ

◆ 小公子（近刊）

んから、しばらく置きます。
さて大變に長くなりました。私
はもう一度ここに、名著大系第一
輯の完結を皆さんに向つて感謝い
たします。

◆小公子（近刊）

世界少年少女名著大系の第二十編である『小公子』は十月末に發行になりまし。この本は皆さん御存知の通り、有名な本ですが、原作があまり長過ぎるために、お読みになつてゐる方は極く少いらうと思ひます。しかし、名を聞いたただけでも讀みこなせるやうな本ですから、是非紹介したいと思ひまして、こゝに無くてゐる一部分を省略しまして、名著大系の一部として發行いたしました。

作者は米國バーネット女史といつて、この本を作つた爲めにその名が世界に知れたつてゐます。家庭小説としては最もよいものだとして、日本で随分古くから知られてゐます。

お話は英國の伯爵の家に起つた悲劇です。伯爵には息子が三人ありましたが、その三男は米國へ行つて、父親の許さない結婚をした

爲め父の怒にふれて遂に家を勸
當されてしまひました。お母が小
公子のお父さんでした。お母が
んは身分こそ無い人ですが立派な
人でした。全く神様のやうな立派
な婦人でした。小公子はさうして
大層幸福な日を送つてゐましたが、
間もなくお父さんに死に別れて
しまひました。すると、程なく
英國にゐるお祖父さんのところか

僅か九十錢に代價で、思ふに
 立派な本・手に入る。は斯うしな
 かつた。美しい簞入。落付あゝ桔梗
 色の表紙には、名畫の配合もよく、
 内部の装綴も藝術味がある。それ
 に、いつ見てもうつつとさせる魅力
 のある寺内齋伯の筆になる。幼
 少の少年と羊の群の平和な姿を以て
 装つたもの、いろいろな事を考へ
 させると。(岐阜縣坂下町)

誌友 北野

「一、讀く二、讀き進んで、廊下に吐きながら一閑で走りまゐりました。嬉しさがこみあげて行きました。過去の無邪氣な時代を幻想しました。そして現在の自分が子供に接しない淋しさが横に、現在の生活が間違つて居る横にさへ考えさへ聞きました。私は何へんも何へんも讀んだのは「赤い櫻」の頃です。私の嬉しさを一層高ましてくれたもの、この「赤い櫻」なんです。其の外「雀遊び」は私も好きに唄です。たまたまの二行は氣に入りました。読んでみました。かうして唄ひながら、牧場的小牛、青い月、などをよけ取つて見ました。丁度今夜は青い月夜です。お月さまは半分缺いておられました。唄ひながら今日一の楽しい一日を暮しました。本所區豊澤町二ノ一、福島方」

著名大五の生先郎三岩野沖

童話讀本(2)
金の釣瓶

この本は先生の手記で、金釣瓶の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。先生の手記は、先生の手記で、金釣瓶の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。

四六判箱入美本
内容一五〇頁
定価金壹圓
送料六錢

童話讀本(1)
赤い猫

この本は先生の手記で、赤い猫の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。先生の手記は、先生の手記で、赤い猫の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。

四六判箱入美本
内容一五〇頁
定価金壹圓
送料六錢

(近刊)
労働の少年

この本は先生の手記で、労働の少年の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。先生の手記は、先生の手記で、労働の少年の物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。

四六判箱入美本
内容二五〇頁
定価金壹圓貳拾錢
送料六錢

森の祈り

この本は先生の手記で、森の祈りの物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。先生の手記は、先生の手記で、森の祈りの物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。

四六判箱入美本
内容三二〇頁
定価金壹圓八拾錢
送料六錢

父戀し

この本は先生の手記で、父戀しの物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。先生の手記は、先生の手記で、父戀しの物語は、先生が子供の頃に聞いた話から作られています。

四六判箱入美本
内容二二五頁
定価金壹圓
送料六錢

振替東京五九六番
電話小石川三五八番
番六九五九五番

金星社

郷町本坂京動

集募作創賞懸

【意注】童童 【意注】綴幼自

自由詩 山本鼎先生選
若山牧水先生選
方編輯部選
課題は何でもかまいません。諸君の目を見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに描き、詩なり、文なりに書いてください。一人でも何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともに、おとさないやうにして下さい。用紙は自由書はなるべく藍用紙に、幼年詩や綴方になるべく原稿用紙(または牛紙)に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差し上げます。次號轉切は十月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は新年號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

話 野口雨情先生選
齋藤佐次郎先生選

定價冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢
一年分十二冊(送料共)四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢です。御注文の冊は、五分だけ、必ず加へてお送り下さい。
振替口座東京五九六番

廣告料は御照會次第お答へ致します
大正十四年十月九日 印刷部(毎月一回)
大正十四年十月一日發行
編輯兼發行人 齋藤佐次郎
印刷人 小端安之助
印刷所 東京市本郷區動坂町三五九番地
發行所 金星社
振替東京五九六番
電話小石川三五八番

ライオン 歯磨

ライオンねりはみがきは

みな様の歯のために

大変よい歯磨です。

朝晩お使ひになれば

めつたにむし歯になりません。

